

## 北海道家庭学校寮長藤田俊二の中期日誌における寮生理解について

### －対話的コミュニケーションの実践とその意義－

河原 国男

#### 要約

本稿は、北海道家庭学校寮長藤田俊二(1932-2014,昭和7-平成26)による在任中(1963-1993)の膨大な日誌(147名分)のうち、中期日誌に属する3名の記述と、それに添付された、その時々を生徒作文とをとり上げ、藤田はどのように生徒理解したか、その諸相を明らかにし、その上で、どのようなコミュニケーションが示されていたかを分析した。その結果、以下の点が明らかになった。1) 藤田が課した生徒作文の題目数は、全期間で221件、内訳は初期(1965.5.10-1969.3):16、中期(1969.4-1983.11):173、後期(1983.12-1990.3):32であった。その題目領域は、家族のこと、自分の長短、将来像、1年の振り返り、寮生のこと、などであった。これらによって、藤田は、寮生一人一人に問いかけ、その内面にむけた他者理解を試みた。2) もっとも多くの生徒作文題目を設定した中期日誌のうち、3名の日誌には、添付された生徒作文とともに、生徒と藤田とのコミュニケーションが展開し、“対話”を特徴づける相互行為(主題設定、両者の対等性、問いかけと応答)が展開していた。3) その場合、対話的コミュニケーションを通じて、3名寮生それぞれの個性的世界を藤田は記述し、肯定的な理解を示していた。4) このような日誌は、藤田自身のかれ自身の単独の努力によって作成されているが、その対話的な様式そのものは、けっしてかれの自身の発案によるものではなかった。礼拝堂での校長、寮長との対話、朗読会での生徒の自己自身との対話、自然環境との交流、といった伝統的習慣とともに成り立っている。以上1)-4)の対話的コミュニケーションを示した日誌は、M.ヴェーバーの「共同体」にかかわる二概念で把握すれば、北海道家庭学校のメンバー構成の成立にかかわって、二つの特徴を示していた。第一に、寮長と一寮生との関係のみならず、他の寮生も含めた自発的な「結社」の人間関係の絆を導き入れていること、第二に、それにもかかわらず、同時に、所属強制的な共同体である「アンシュタルト」としての教育施設という基本的性格も保持し、人間形成における「強制」という契機的重要性を確認していたこと。こうして藤田の中期日誌は、家庭学校が寮生各人に対して自由と強制という両面性を示した教育活動によって成立する教育共同体として特徴づけられることを、日々の実践記録としての基本的性格を保持して根拠づけていた。

**キーワード：**北海道家庭学校、実践記録、他者理解、対話的コミュニケーション、教育共同体

#### 1. はじめに

##### (1) 本稿の課題

本研究は、北海道家庭学校寮長藤田俊二(1932-2014、昭和7-平成26)が寮生に対してどのようにむき合っていたか、という問題をとり上げる。具体的には、石上館(せきじょうかん)寮生数名についての中期の日誌を手がかりにその対応のあり方を分析し、理解といえる藤田の行為とその諸様相の内容とその特質を対話的コミュニケーションとして把握し、その成り立ちの構造を解明するとともに、その中期日誌が示していた意義を考察するものである。

寮生たちとどのようにむき合うか、という点は、根本的に重要な問いであった。同校は 1914(大正 3)年の開校以来「学校」と称されてきたとはいえ、法制度上は児童福祉分野での「施設」である。生徒たちは、児童相談所によって「措置」されて — 児童福祉法第 27 条により親の同意を得つつ — 入所する<sup>1)</sup>。当の生徒たちにとっては不本意な思いとともに入所する。そしていずれかの寮に入寮する。校長、および寮長夫妻にとって、その一人一人の生徒たちにどのようにむき合うか、という課題が困難を伴うものであることについて、藤田と同時代、校長として同行した谷昌恒(1922-1999/2000,大正 11-平成 11/12)は、折りにふれこう語っていた。

心の扉には取っ手は内側にしか付いていません。外側には取っ手がありません。私たちは切に子どもの心を知りたいと願っています。心の扉の外側に取っ手があれば、君はどんなことを考えているの、さあ、あなたはどうか、などと言いながら、さっさとその取っ手を手に取って、相手の心をのぞきこむことができるでしょう。しかし、それができないのです。外側に取っ手がありませんからです。<sup>2)</sup>

谷校長のこうした困難の自覚は、「鎧」あるいは「虚勢」ということばとともに、藤田を含め家庭学校の職員に共有されているであろう<sup>3)</sup>。のみならず、より一般的に、学校の生徒指導上の問題に直面する当事者にも、多かれ少なかれ共通に認められるであろう。

こうした問いにかかわって、少年にどうかかわるか。まずもって「受容」することは、家庭学校職員に共通する基本的な習慣的な姿勢であろう。全校教職員、生徒の前での対面の場面で拍手をもって迎えること、「新しく入って来た少年を常に『親』に当たる先輩と行動を共にさせ、先輩の行動をただ黙って観察させ」「少年の自発的行動が見られるまで『待つ』」こと、こうした対応はその具体的な姿として重んじられるであろう<sup>4)</sup>。月 1 回、職員、生徒が一堂に会する場で、寮を代表して皆の前で読みあげる「朗読会」も、「子どもの内側を知らなくてはならない」<sup>5)</sup>という谷校長と職員全体の思いとともに、藤田の時代も、今も実施されている。こうした学校全体の姿勢をもって、意図したとおりには少年たちにうけとめられない困難もある。少年たちの、こうした並一通りではない思いを洞察しつつ、谷は「成長」途上の姿を描出している<sup>6)</sup>。

藤田も、寮長として、こうした少年たちの状況と学校全体の取り組みを踏まえる。その上で、みずからの判断でどう対応していたか。

在職中(1963-1993、昭和 38-平成 5)に膨大な日誌を残していたこと、後にふれるように初期、中期、後期に便宜上分類できること等については、筆者はすでに外形的な諸事実を明らかにした<sup>7)</sup>。そのことにあらためて着目しよう。

初期(1965.10-1969.3) 33—36 歳、留岡清男校長期、17 名。

中期(1969.4-1983.11) 37—51 歳、谷昌恒校長着任から研修会報告文書「昭和 58 年度全国教護院教護研修会 寮長二十年のくぎりに」(1983 年 11 月 16 日、以下、「二十年のくぎりに」と略)発表まで、90 名。

後期(1983.12-1990.3) 52—58 歳、「二十年のくぎりに」以降石上館寮長退任まで、40 名。

石上館寮長在職中、より正確に言えば、1965(昭和 40)年 10 月 20 日から 1990(平成 2)年 3 月 13 日まで、24 年 4 ヶ月で、寮生は 147 名に及ぶ。寮(石上館)に属する生徒十数名全員一人一人に即してノートを用意した日誌であった。それぞれ固有な存在感を示しているが、研究の便宜上、1 から 147 まで整理番号をあてた。その日誌を分析することを通じて、藤田が一人一人に対してどうむき合ったかが明らかになるだろう。その見通しをたしかなものにするためには、この日誌に添付されている寮生徒の作文も着目しなけ

ればならない。寮生全員に、藤田自身の判断で課したものである。それらは補足的ならず、日誌と同等の重みをもったものとして存在するにちがいない。そのような作文は、藤田自身による日誌記述と無関係に機械的に添付されているのではなく、日誌の記述の当該日に、あるいは、その前後にまとめられ綴じられている。1冊のノートも、4cmほどの厚みを帯びているものも、すくなくはない。その内的な様態はといえば、伝える側とそれをうけとる側との一種のコミュニケーションを予想する。単純化して言えば、作文を課す（藤田）→作文（生徒）→作文を読み、日誌に記述する（藤田）→翌日の実践（藤田）→寮生活・学業・作業（生徒）→その日の夕刻以降、作文を課す、といった一連の行為が連続する。一方通行のものではない。互にむき合う相互的な行為が成立している。そこに、ことばのみならず、態度、表情、行動などを含む、何かしらメッセージのやりとりを含むコミュニケーションといてよい関係が成り立っているであろう。そのような日誌は、どのように藤田が一人一人の寮生たちにむき合っていたか、という問いに応える書き残された第一級の一次資料として現存する。寮長として日常起居を共にした立場からの記述であった事情をふまえてさらに推測すれば、その資料のうちに、外面的、行動観察のみによってはうかがい知れない、態度、表情、ことば、意識等はどうであったかを、一人一人の生活場面に即して理解するという藤田の行為が示されているであろう<sup>8)</sup>。その場合、その理解はけっして十分に行き届いているわけではないであろう。これらの特性、たとえば加害者性ととも被害者性をも有することについて、あらかじめ職員間で共通理解しているにせよ、個々の事例に即しては予想の域にとどまる。藤田も含め、校長及び寮長たちは少年たちと他者としてむき合う。何ほどかの距離の感覚が求められるにちがいない。そうであるとすれば、ことばには限定しない形で、対話的といえるコミュニケーションを示す相互行為が成り立っていることが予想される。「朗読会も対話の一型式」と捉えて、少年たち自身にも「眼を内側に向ける機会である」と位置づけていた谷校長は、同時にこうも語っていた。「対話はフォーマルなかたちで行われるよりも、インフォーマルな場でかわされる方がはるかに実り多いものである。広大な敷地に恵まれた本校には、寮と学校との往還にも、牧草畑の中でも、汗をぬぐう樹林の日陰にも、巧まない、自然の、対話の機会が豊富にある。その機会を大切にしたいと思う」<sup>9)</sup>。こうした谷のことばと照らし合わせれば、コミュニケーションが対話的性格をそなえていたという予想は、同時に期待でもある。実践者からすれば、こうあり続けたいと思うものである。初期、中期、後期の日誌において、事実として、対話的にかかわったかどうかは検証を要する。その留保を含みながら、本稿課題を設定したい。

すなわち、1)その日誌（生徒作文も含む）において藤田は寮生一人一人に対してどのように理解を試みたか、その様相を中期日誌に属する3名に限定して把握し、時系列で――資料紹介の意味も含めてできるだけその全体像に近い形で抄録して――明らかにし、そのうえで、2)どのように対話的コミュニケーションが成り立っているか、その特質を分析し、最後に、3)この相互行為が家庭学校の成り立ちにかかわって、どのような意義を示していたかを考察すること。これらの点を本稿の課題とする。

課題に対する接近について。本稿全体に関わる基本的な方法は、経営、制度、システム、予算、生徒の属性（学業成績、受賞歴、無断外出歴、その他）など家庭学校にかかわる客観的事実関係ではなく、主たる対象として行為に着目する。その場合、行為にかかわる客観的な事実関係は背景的な事柄とする<sup>10)</sup>。より前面的には、行為者において主観的に意味された事柄がどうであったかを本稿は考慮し、その記述のありように着目する。生徒作文の題目として「母の日」と藤田がしばしば設定したこと（行為）は、客観的な事実属する。寮生が「悪いこと」「めいわくな行動」という時、その内容について主観的に意味された事柄がどうであったかを、本稿では重視する。同様に、寮長であれ、寮生であれ、何かしらの非行事実が語られ、記述された場合に、その当の非行にかかわる客観的な事実確定は、本稿では主たる関心をむけない。なにか

しらのその非行事実が、どのようなことばで当事者あるいは、第三者（寮長）によって意味づけられているか、という点に本稿は関心をむけて跡づける。

こうした基本的な方法をふまえようとするとき、ただちに分析の手がかりとして浮上するのは、藤田の「二十年のくぎりに」である。タイトルが示すように、採用以来、長年にわたる自身の実践を振り返っている文書である。そのなかで藤田は、日誌を書き続けたこと、そして生徒たちに作文を書かせたことについて所見を示している。それは、日誌とともに、その日誌に織り込まれた作文が、コミュニケーションの手段であるとしても、主観的な意味づけられた行為としてどのようなものとして存在したか、われわれが分析解明する際の手がかりとなるだろう。

## (2) 「二十年のくぎりに」—日誌および「作文」についての振り返り—

本文書は、ガリ版刷りで、18 頁ある。その冒頭にはこう記されている。

「昭和 38 年に北海道家庭学校に職を得てまたたく間に 20 年が過ぎました。手探りでの一つ又一个積み重ねたものを振り返りつつ、今その一つ一つを検証しながら、これからの自分の仕事のよすがにしたいと思い、敢えて発表させていただきます」。

「手探り」ということばとともに、「一つ一つを検証しながら」という思いに注意をむけよう。20 年の月日を積み重ねているわけで、実際には「検証」ずみ、の部分が少なくはないであろう。確実性について何ほどの自信にも支えられているにちがいない。しかし、それでもなお、あるいは、そうであるゆえに、藤田はみずからの実践に「手探り」の部分を認めている。作業班の指導、収穫感謝祭での発表、学業指導、夫婦での寮生活、寮内において、新入生に対して信頼できる先輩格（「年季」者）を「親」として当てること、毎月 5 日に平和山に登ること、それらの実践を基礎づける「難有」の理念、こうした長年わたって習慣的な制度として定着している部分がある。それらを他の寮長職員ともに藤田も共通理解して実施する。そうした制度に即した実践とともに、藤田自身が自らの判断で着手し、継続的に実践したことがある。それら、とりわけ後者について「手探り」しながら、その意義を研修会という専門家仲間で確認しつつ、成果を「検証」しなければならない、ということの自覚が示されていると、われわれはうけとめたい。

こうした思いをもとに、本文書は以下の構成になっている。

- (1) 記録を書き続ける
- (2) 長所を探し出す日々
- (3) 集団を意のままに把握したい
- (4) 無断外出を重く考える。
- (5) 復家族復学をまず考える
- (6) 就職について
- (7) 卒業生の群像

生徒の「作文」は (1) の中にふれられている。どのような経緯でみずからが記す日誌を書き続けるようになったかについて、藤田は着任当初参考になった図書（井上肇『山鳩のうた』1950）をあげている。それらを比較検討して、藤田の日誌記述の特質を明らかにすることも、検討課題の一つであるが、ここではふれない。藤田は、次のようにその狙いに説明している。

一人一人の少年について自分の眼で見たことを、家内の眼に触れたもの、他の先生の何気ない言葉の数々に含まれているその少年の学校での、畑での得手不得手の姿態、言葉、明暗の表情、喜怒の笑声、

怒声の数々を、夜になってからじっと思い出しは書き続けました。(改行) そして書き続けての中から一人一人の人の様相の様なものが、得意としているものが、絶対に触れて欲しくないタブーの様なものが、薄ぼんやり見えてくる様になり、考えながら書き、書きながら考える事が私の主たる仕事になりました。

ここに要約されているのは、日誌の内容についての振り返りである。「学校での、畑での得手不得手の姿態、言葉、明暗の表情、喜怒の笑声、怒声の数々」。生徒に関するこれらの様相の記述一つ一つについて分析する必要があるのであるが、この点についても本稿では立ち入らない。校長はじめ、どの寮長も、どう「成長」の姿を捉えるか、という一点は重大関心であったにちがいない。

こうして自身の「仕事」を短く総括して、現時点で 113 名が卒業したと指摘して、藤田は、さらに次のように自身の行為に言及する。「今、発って行った一人一人の記録を読み返しながら、その子への自分の対応が果たして適切であったか？彼は家庭学校での生活をどう考えていたのだろうか？あの時の対応は間違っていたな、あの時に殴りつけたのはやむを得なかった、等々の様々な反省が日がたった故の落ちついた気持ちで出来、その反省を今の暮らしに生かしながら唯ひたすらに書き続けています」。

こうして自身の日誌そのものについて振り返ってのち、藤田は、続けて生徒自身による作文について以下のように記している。「更に、昭和 45 年からそれ迄一冊の日記として少年たちが書いていた日記を、一枚づつの日記として私の手許に保存する事にしました」。手元に保存することは藤田にとって、一つの選択であった。生徒たちがそれぞれ自分の一冊の日記を所持して書くとすれば、どういうことになるか。

お互いに生活の間仕切りなどない自分の物も他人の物も混同しがちな寮集団の中では、いつでも他人の眼にさらけ出される、いつでも誰かに読まれるという大きなリスクがあって、日記はいつの間にか差し障りのない、とりとめない「朝は 6 時に起きました」調だけの文章になりがちです。

突き止めて考えれば、日記とは本来他人に読ませるものでもなく、他人が読むものでもないという事は自明の理であり、私は一人一人が毎日書く文を「一日の作文」と考えることにして書かせることにしました。

内容の空疎な、単に形だけの報告文から区別されるものとして、自身の手元に保存する。その条件のもとで「一日の作文」は、設定されている。こうした「作文」は、どのような意味を示すことになったと、藤田自身は捉えているか。本稿で注意をむけたい箇所を下線を引き、①～③の番号をつけ、以下引用しておく。

この様にしてから一人一人の書く日記の内容が明らかに違って来たことに瞠目しながら、その作文一枚を私が毎日書き続けている記録の上に貼付するという手作業を加えて今日に至っています。

「日記指導」「作文指導」は小学校中学校でも大きな教育課題であり、優れた研究成果や実践が多く発表されています。

それらに出来る限り眼を通し、勉強させていただきながら、①ある時には課題を出し或る時には耳許で小さく囁きながらその子のホンネをまさぐって来ました。

24 時間一諸 (ママ) に暮らしているから解る一人一人の心の動きと表情、集団の流れの座標軸の変化の移り変わり、一人一人の遠い将来の希望と今現在の希望と不満、家族への思いの深淺、故郷の友

達、今の仲間との様々なトラブル等々を、別々に持って来る一人一人の作文から或る程度看取出来る様になりました。

そして書いた本人がすっかり忘れてしまった頃に、家族のことや友達のことをさりげなく話しかけながら将来の希望につながる就職の話などをすると、本人は魔法にかかった様にマジマジと私を見つめながら私の掌中のペースに入ってくる様になります。

②他人の悪口や批判ばかり書いてくる少年も、10日もたてば種が尽きて別の事を書き始めます。季節が変わり始めると書く為の素材を周囲の森に向ける様になり、森での畑での仕事を生き生きと書き始めるともう安心です。

自分、他人、勉強、仕事、将来の希望、が一つ一つと鮮明になってくると季節はその子の為に早く巡る様になり、私は私でこの子をどんなかたちで社会に復元させるかの思案に入ります。

これからの毎日の経過を可能な限り詳しく書いていくのが私の仕事であり、③今の私にとっては今の14人の少年たちと暮らすこと、毎日の作文を読むこと、そして14人のことを書き続けながらその将来の道筋を考えることが不離一体であり、生活のすべてであります。

藤田自身が日々生徒一人一人について記述する日誌、及び、生徒が書く「作文」（「日記」とも生徒は表記）について、この1983年文書「寮長二十年のくぎりに」ほどまとまった記述は、他に見出すことはできない。後者について、藤田の集約された所見が以上に示されている。番号をつけた下線の箇所に着目したい。

① 「課題」を出す場合があることについて。自由に書かせる場合（「自由作文」）とともに、特定の題目を与える場合がある、ということを指す。後者の場合はいつからどのような頻度で設定され、石上館寮長在任中、25年間の経年変化はどうであったか。どのような内容の題目を設定したか。どのような動機から設定されたか。

② 視野の深まりと拡大について。季節とともに移り変わる「森」や「畑」などの自然環境とその変化を少年たちはどのような関心をもってうけとめたか、それを藤田はみずからの日誌でどのように認識したか。そのやりとりが、コミュニケーションと呼べる相互行為を成り立たせていたとすれば、どのような特質を示していたか。その相互の行為は、少年の成長の記録の諸様式のなかで、どのような証跡として位置づけられるか。

③ 作文を書かせること（指導）、生徒の作文を読むこと（理解）すること、ともに暮らすこと。これらが相互にどう関連して、一体的な構造として位置づけられていたか。

以上のように、20年を振り返った藤田の所見に示された、日誌、及び生徒の「作文」の意味づけは、事実をはたしてどうであったか「検証」に値する。中期日誌をとり上げる本稿課題にかかわっても有益な留意点となる。

### (3) 倫理的配慮

日誌、及び生徒作文を研究対象とする本稿は、人権確保の観点から特段の倫理的配慮を必要とする。

1) 生徒氏名、その家族氏名は匿名とした。石上館に属する生徒自身については整理番号で表記するとともに、本稿でとり上げた寮生はアルファベットで名前の頭文字を M、Y、T と表記とした。他の寮生、公立小、中学校の同窓生は、姓のアルファベットで表記した。

2) 生徒の出身地等にかかわる地名は、市町村までの表記とした。

3)職員氏名は、記載通り実名とした。森田芳雄(M1979.2.18)、平本良元(M1978.11.21,Y1981.3.17,7.30)、斎藤益晴(T1981.8.13-14)、軽部晴文(Y1981.9.14,Y1982.1.14)、田中正国(M1978.11.21)、村上時夫(M1978.11.21)、副島平八郎(T1981.9.19)、加藤正志(M1979.8.26)、内田稔(M1989.1.19)、外山伊作(M1980.3.15)などの職員の名が本稿でとり上げた範囲内で記載されている。他の寮長職員も含めて、谷昌恒校長のみならず、藤田の同行者として記録するに値する。

4)内容上、教育上の必要からの懲戒に類する行為が記述されている場合 — 「あの時に殴りつけた」と「二十年のくぎりに」で回顧していた — そのまま原文表記とした。

本研究の計画については、宮崎国際大学研究倫理審査委員会の承認(2021.6.8)を得た。また、北海道家庭学校の特別理事長、学校長、特別顧問の諸氏からも科研上の研究計画について承認(2021.9.22)を得た。

## 2. 生徒の作文題目－初期・中期・後期における題目一覧とその特質－

### (1) 経年別の題目一覧

藤田の中期日誌に本稿は主として着目するが、その位置づけを明確にするために、われわれは、在任中に藤田が生徒たちに課した作文題目の全体像を把握しておこう。

大学ノートを用いた任意の日誌は、1965(昭和40)年10月20日の日誌から始まる。その年の12月31日の藤田の日誌(整理番号2)には生徒の作文内容が、家族等から書簡の内容と同様に、一字一句—おそらく原文通り—転記されている。「この1年の思い出」僕はどこへ来たか」と題された8行の文章が、藤田によって筆記されている。添付された形での寮生の作文は、1966年2月6日から始まる。炊事場から砂糖カップが紛失し、寮内で「私物検査」することになった件で、「全員に今度の事件についての感想を書かせて記録に添付しておく」という藤田の日誌(整理番号1)とともに、400字詰めの市販の原稿用紙で記された生徒の作文1枚が添付されている。「今日の事にて」と題されている。他の寮生にも同様な主旨の作文が添付されているので、題目が指定されているとみなすことができる。この作文を発端として、藤田日誌に添付された作文は、形式上、次のように区分できる。

#### [題目設定]

- 1) 特定の題目が藤田によって与えられたもの
- 2) 特定の題目が藤田によって与えられていないもの：全生徒を対象とする谷校長、寮長等の講話を聴講した際の感想記録を含む作文、生徒自身が題目をつけているもの

#### [用紙]

- 1) 「北海道家庭学校」の所定の用紙：

a:日課を整理する B5 サイズ一枚(「作業」「音信」「学習」などの事項とともに、9字×16行=304の自由記述欄を含む)

b:B4 サイズのわら半紙で、23字×30行のマス目のみが印刷されている。学校全体で月一回礼拝堂で一同が会しておこなわれる生徒の「朗読会」等の機会に用いられる。

- 2) 市販の原稿用紙、便箋等

題目は以下の通りである。経年別に示す。

1966：2件

- ・「今日の事」1966.2.6
- ・「母の日」1966.5.8

1967 : 9 件

- ・「自分の好きな人ときらいな人」 1967.1.19
- ・「自分の笑顔について」 1967.1.29
- ・「自衛隊を見学した感想」 1967.3.28
- ・「自分は将来自衛隊にはいりたいと思うか」 1967.3.28
- ・「お母さん」「母日」 1967.5.5
- ・「母の日について」「母の日」 1967.5.14
- ・エレキ番組など（子供にテレビを見せることについて） 1967.5.29.30
- ・「今夜は自分の思うとおりの作文を書けや！」と皆に言った 1967.9.16
- ・「今年の思い出と来年の決意」 1967.12.31

1968 : 5 件

- ・「現代の映像を見ての感想文」 1968.2.17
- ・「自分の友達について」 1968.10.25
- ・「この一週間を省みて」 1968.11.9
- ・「家庭学校について」 1968.11.13
- ・「今年の思い出」 1968.12.30

1969 : 0 件

特に記載なし

1970 : 2 件

- ・「自分の考えている倖せについて」 1970.8.2
- ・「夏の思い出」 1970.8.4

1971 : 3 件

- ・「自分の新入生のころの思で」 1971.4.16
- ・「子供の頃の思い出」 1971.5.5
- ・「性の意味は？」 1971.8.29

1972 : 2 件

- ・「きらいな人はだれ？」 1972.7.29
- ・「人生にとって病気とは何だ」 1974.10.4

1973 : 2 件

- ・「一時帰省を前にして」 1973.8.3
- ・「皆、大金持になったら何に使う？」 1973.9.20

1974 : 1 件

- ・「僕の好きな人」 1974.2.19

1975 : 12 件

- ・「盗み」 1975.1.22
- ・「結婚」 1975.3.15
- ・「友情」 1975.3.18
- ・「飯」 1975.3.19
- ・「詩」 1975.3.20



北海道家庭学校寮長藤田俊二の中期日誌における寮生理解について  
－対話的コミュニケーションの実践とその意義－

- ・「自分の好きな歌と歌手」 1975.4.1
- ・「結婚と離婚」 1975.6.5
- ・「友情」 1975.7.26
- ・「10年後の日本と10年後の自分」 1975.11.1
- ・「喧嘩は勝った方が良いか負けた方が良いか、男が人生で本当に勝つという意味」 1975.11.7
- ・「自分が政治家になったら、日本を 北海道を 家庭学校をこの様にする」 1975.11.11
- ・「君は大人になったら酒を飲むか！」 1975.11.12

1976 : 21 件

- ・「自分の父、自分が大人になって父になった時」 1976.2.11
- ・「人生の勝負とは」 1976.2.12
- ・「僕はどんな父親になるか」 1976.3.31
- ・「腹の立つ事くやしい事」 1976.4.3
- ・「小学1年生の入学式」 1976.4.5
- ・「春の思い出」 1976.4.28
- ・「卒業生の結婚式と僕の結婚」 1976.5.7
- ・「15年後の自分」 1976.6.25
- ・「平和山に毎月登って考える事」 1976.9.5
- ・「君はミグ戦闘機の事件についてどう思うか」 1976.9.12
- ・「腹のたつ事」 1976.10.30
- ・「一番うれしい時、うれしい事」 1976.11.9
- ・「付和雷同」 1976.11.11
- ・「信念」 1976.11.12
- ・「親友、友だち、好きな人」 1976.11.18
- ・「君ならどの政党に投票するか」 1976.11.30
- ・「(整理番号 50)の言い分 自分の言い分」 1976.12.15
- ・「(整理番号 52)の長所と短所」 1976.12.22
- ・「今年1年の思い出と反省」 1976.12.22
- ・「帰省して家族と何を語り、何を相談してくるか」 1976.12.26
- ・「来年の希望と目標」 1976.12.26

1977 : 17 件

- ・「男の死」 1977.2.8
- ・「自分は人から好かれているだろうか？自分は人から嫌われているだろうか？」 1977. 2.9
- ・「自分はどのように生きていくか」、1977.3.4
- ・「5年前の自分と5年後の自分」 1977.4.28
- ・「自分はどの様な人間なのだろうか」 1977.4.30
- ・「子供の時から自分は大切にされてきただろうか」 1977.5.5
- ・「君は夏をどの様に過ごしていたか？」 1977.7.21
- ・「自分の親友」 1977.7.25
- ・「自分が一番腹が立つ時、淋しい時、悲しい時、嬉しい時」 1977.8.27

- ・「君が家庭学校の先生だったら、どんな学校にしたいか」 1977.9.19
- ・「いやな事」 1977.9.20
- ・「自分が尊敬する人」 1977.10.22
- ・「大きな者から小さな者への注意と言いたい事」「小さい者から大きい者への希望と言いたい事」 1977.11.1
- ・「寮の生活で直してほしい事」 1977.11.18
- ・「自分の長所」 1977.11.19
- ・「(整理番号 55)の長所」 1977.11.21
- ・「自分が将来やりたい仕事 (1) から (5) まで」 1977.11.22

1978 : 17 件

- ・「人間がしてはいけない事」 1978.1.26
- ・「自分の母」 1978.2.11
- ・「自分が本当に怒る時」 1978.2.18
- ・「今、自分が考えている幸福」 1978.3.1
- ・「自分が尊敬する人」 1978.3.5
- ・「今の世の中をどう思うか？」 1978.3.9
- ・「友情」 1978.3.17
- ・「父母のこと」 1978.3.18
- ・「前の学校でいやだったこと」 1978.3.28
- ・「(整理番号 50)にはどんな仕事に向いているだろうか」 1978.4.1
- ・「前の学校の先生の思い出」 1978.4.4
- ・「我妻の噂」 1978.4.25
- ・「自分の家族」 1978.5.1
- ・「最近の寮生活の楽しい事、いやな事」 1978.5.12
- ・「自分の長所と短所」 1978.7.22
- ・「来年の計画」 1978.11.4
- ・「一番腹のたつ時、くやしい時、残念な時、嬉しい時」 1978.11.9

1979 : 27 件

- ・「将来の希望」 1979.1.30
- ・「自分の父母について考える事」 1979.2.7
- ・「10 年後の自分の生活」 1979.2.10
- ・「将来の希望」 1979.4.14
- ・「自分の家族について」 1979.4.17
- ・「男は何故働くのか」 1979.4.19
- ・「今一番考えていること」 1979.5.26
- ・「10 年後の日本と 10 年後の自分」 1979.6.2
- ・「自分が一番思っていること」 1979.7.10
- ・「今、一番楽しみなこと」 1979.7.14
- ・「この一週間考えた事」 1979.7.21
- ・「帰省して家族と語り合ったこと」 1979.8.18

北海道家庭学校寮長藤田俊二の中期日誌における寮生理解について  
－対話的コミュニケーションの実践とその意義－

- ・「君は、10年後の夏をどの様に過ごしているだろうか」 1979.8.20
- ・「自分の長所と短所」 1979.8.25
- ・「先生の居なかった4日間」 1979.9.8
- ・「人は何故金をためるのだろうか」 1979.9.15
- ・「今、考える事」 1979.9.23
- ・「自分の好きな食べ物を10番まで書き、その理由も書くように」 1979.10.10
- ・「自分の好きな聖書の中の言葉」 1979.10.13
- ・「自分の将来の計画」 1979.10.18
- ・「今、一番電話をかけたい人」 1979.10.19
- ・「勝負について考える」 1979.11.3
- ・「自分の希望」・「自分の現在の希望」 1979.11.13
- ・「君は父親と同じ職業をやりたいと思うか」 1979.11.15
- ・「自分の好きな人」 1979.11.17
- ・「男にとって守るべき名誉とは何か」 1979.12.3
- ・「家庭学校の作業で得たもの」 1979.12.21

1980 : 24 件

- ・「今年の目標、計画、夢」 1980.1.10
- ・「今、一番感謝している事」 1980.2.7
- ・「男らしく生きるとはどう生きることか」 1980.3.11
- ・「自分の家族について」 1980.3.13
- ・「小学校中学校の卒業式の思い出」 1980.3.15
- ・「自分の親の事」 1980.3.19
- ・「人はなぜ勉強するのか、自分はどのような男になるか」 1980.4.6
- ・「自分が将来やりたい仕事 10」 1980.4.7
- ・「嬉しい時、悲しい時、腹の立つ時」 1980.4.9
- ・「この1週間の学習と作業をふり返って」 1980.4.19
- ・「人は何故働らくのだろうか」 1980.4.26
- ・「寮の中で皆が気持ちよく暮らす為に一人一人が気をつけなければならないこと」 1980.5.8
- ・「1週間をふり返って」 1980.5.17
- ・「自分が結婚したら、どんな家庭を作りたいか」 1980.5.24
- ・「自分の家族のこと」 1980.5.31
- ・「小・中学校の運動会の思い出」 1980.6.28
- ・「自分の長所と短所」 1980.7.5
- ・「夏休みの思い出」 1980.7.19
- ・「自分のいやな事 10」 1980.9.16
- ・「自分の気分のいいこと、気分の悪いこと」 1980.9.20
- ・「直さなければならない自分の欠点」 1980.9.23
- ・「秋になって考える事」 1980.10.9
- ・「(整理番号 81)と暮すには、どんな事に気をつけたら良いか、皆と暮すには(整理番号 81) はどんな事に気をつけた

らよいか」 1980.10.19

- ・「どんな時に、頭に来る程に腹がたつか」 1980.11.15

1981 : 30 件

- ・「自分の長所と短所」 1981.1.20
- ・「今、考える事」 1981.1.26
- ・「家庭学校について考える事」 1981.1.31
- ・「男は何故喧嘩をするのか」 1981.2.7
- ・「男が怒る時」 1981.2.23
- ・「自分の人生」 1981.3.14
- ・「自分という男」 1981.3.19
- ・「自分が作りたい家庭」 1981.3.20
- ・「自分の兄弟についてこう考える」 1981.3.31
- ・「好きな人、嫌いな人」 1981.4.2
- ・「最近の寮の生活で困っていること、悩んでいること」 1981.5.8
- ・「今、考えている事」 1981.5.22
- ・「この1週間考えた事、感じた事」 1981.6.13
- ・「一緒に風呂に入りたい人の名前を書けや」 1981.7.16
- ・「家庭学校に来てからの生活」・「自分の好きな事、嫌いな事」 1981.8.24
- ・「一番くやしい事、腹がたつ事、悲しい事、有難い事、悲しい事」 1981.8.25
- ・「気がついた事」 1981.9.16
- ・「自分の夢」 1981.9.19
- ・「自分の新入生の頃、やさしかった人、嬉しかった事、悔しかった事」 1981.9.21
- ・「自分はなぜ家庭学校へ来たのか」 1981.9.26
- ・「寮でのきまりは守られているだろうか」 1981.10.24
- ・「君は神を信じられるか」 1981.10.25
- ・「自分が一番信じられる人、君は人を信じられるか」 1981.10.27
- ・「自分がみじめに見える時」「自分が堂々に見える時」 1981.10.31
- ・「心に残っている友達の言葉」 1981.11.10
- ・「言いたい事」 1981.11.21
- ・「自分にとっての今年の10大事件」 1981.12.17
- ・「今年の石上館の10大ニュース」 1981.12.18
- ・「生んでくれた母と育ててくれた母」 1981.12.22
- ・「自分にとっての一時帰省の意味」 1981.12.25

1982 : 9 件

- ・「今日一日仕事をして考えた事」 1982.1.11
- ・「正月を振り返って思う事」 1982.1.12
- ・「自分の健康について」 1982.1.16
- ・「言葉」 1982.1.20
- ・「自分の好きな漫画、その理由」 1982.1.26

北海道家庭学校寮長藤田俊二の中期日誌における寮生理解について  
－対話的コミュニケーションの実践とその意義－

- ・「自分の人生」 1982.2.12
- ・「友達」 1982.3.17
- ・「小学校、中学校の先生の思い出」 1982.3.18
- ・「卒業にあたって」 1982.3.27

1983 : 6 件

- ・「今、考えている事」 1983.2.4
- ・「自分が生きている意味」 1983.3.12
- ・「将来の希望」 1983.6.14
- ・「自分という男」 1983.7.23
- ・「10年後の自分」 1983.7.24
- ・「自分の将来」 1983.10.27

1984 : 5 件

- ・「自分の性格」 1984.1.27
- ・「家庭学校で暮らす意味」 1984.1.28
- ・「いやな人」「いやな奴」 1984.2.18
- ・「自分の5月5日」 1984.5.5
- ・「寮でくらすために一人一人が気をつけなければならない事、その他、考えている事」 1984.5.10

1985 : 2 件

- ・「自分の父親」 1985.9.15
- ・「自分の家族」 1985.11.29

1986 : 6 件

- ・「自分の母親」 1986.1.21
- ・「自分の家族」 1986.5.4
- ・「自分の夢」 1986.7.31
- ・「今考えている事」 1986.11.2
- ・「家庭学校で礼拝をするのはなぜか」 1986.11.21
- ・「自分にとっての正月帰省の意味」 1986.12.24

1987 : 7 件

- ・「自分にとって家庭学校とは何か」 1987.1.10
- ・「今の石上館」 1987.5.27
- ・「将来の自分」 1987.6.6
- ・「心に残っている優しい人」 1987.7.25
- ・「今後の自分」 1987.9.8
- ・「自分にとっての正月帰省の意味」 1987.12.24
- ・「自分が家庭学校にいる意味」 1987.12.3

1988 : 0 件

日誌では確認できず

1989 : 11 件

- ・「自分の将来」「中学校の思い出」「家庭学校について考える」「好きな食べ物」「友達」「人はなぜ働くか」「自分の姉」

「親について」「好きな人」「腹の立つ事」「嬉しい事」1989.6.30

\*1日の作文題目で、複数、それも十を超えた題目を示している事例は、確認したかぎりでは、この日が唯一である。同日、「運動会（6月25日）を総括しての職員会。生徒は寮で5枚の作文を書く」と記されている。1989.6.30

1990：1件

・「今学期の希望」1990.1.17

\*1990年3月17日をもって、石上館寮長を捧一に委ねる。以後、藤田は楽山寮寮長兼教務部長、1993年3月に定年退職。

以上、藤田が課した生徒作文の題目は全期間で221件、内訳は初期（1965.5.10-1969.3）：16、中期（1969.4-1983.11）：173、後期（1983.12-1990.3）：32であった。図1が示すように、中期の件数が圧倒的に多い。

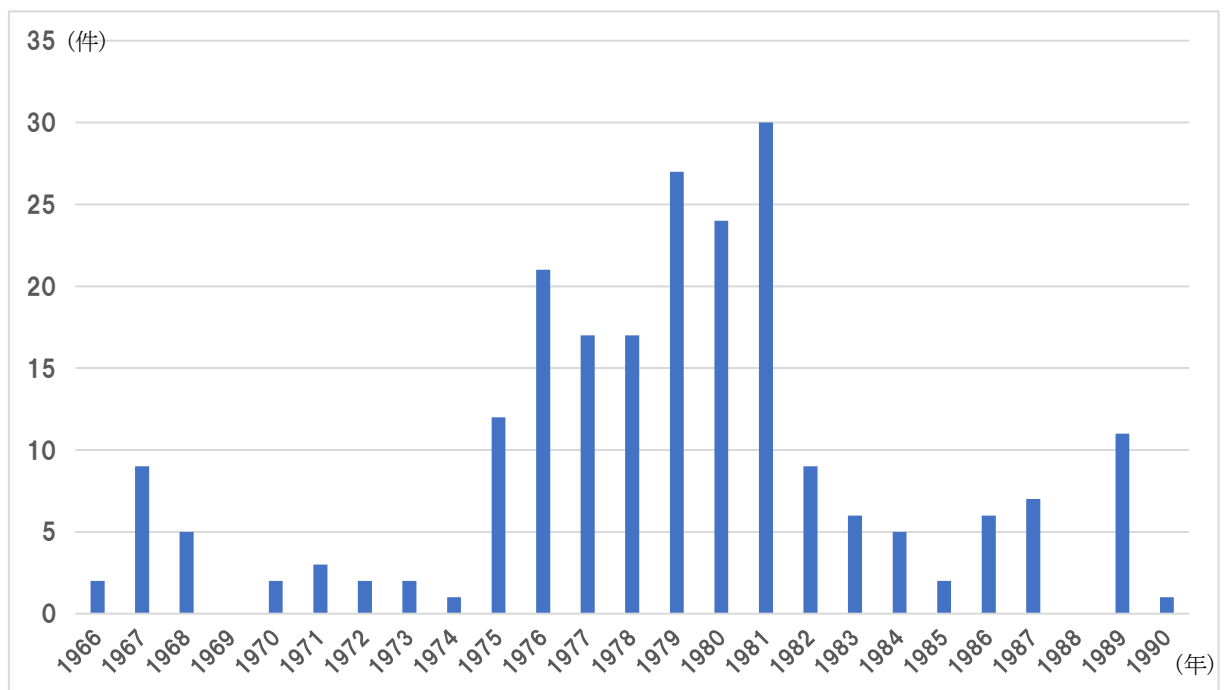


図1. 経年別題目件数

以上の生徒作文の題目は、藤田自身による石上館に属する十数名の寮生全体に対する問いかけでもある。特定の寮生をとくに意識した形のものも含まれている。そのような問いかけは、下記の領域に整理できる。

領域別：

- 1) 家族のこと、親のこと、兄弟のこと、作りたい家庭
- 2) 自分の長所、短所、将来像、笑顔、父親像
- 3) 誇りに関すること（名誉、喧嘩、怒りなど）
- 4) 今年1年の思い出、1週間を振り返って
- 5) 寮生のこと、好きな人、嫌いな人
- 6) 特定主題

人はなぜ働くのか  
人はなぜ金を貯めるか  
男の死（校長留岡清男の死去について）  
寮でのきまりは守られているか  
今年の石上館の 10 大ニュース  
今、一番電話をかけたい人  
小中学校の運動会の思い出  
父親と同じ職業をやりたいと思うか  
秋になって考えること  
最近の寮生活で困っていること  
人生にとって病気とは何か  
10 年後の日本と 10 年後の自分  
君が家庭学校の先生だったら、どんな学校にしたいか

こうした題目設定状況から以下の点が注意される。

- 1) 問題行動にかかわる罪の自覚をもとめ「少年を問責する」（『ひとむれ』第 500 号、1983 年 7 月、谷昌恒）  
ような問いかけは、藤田もまた — 他の職員同様の共通理解をもって — この題目設定を通じておこなっていない、ということ。「不運としか言い様のないハンディを数多く背負っている我々の少年たち」という表記も、その点を端的に示している（藤田「後記」『ひとむれ』第 577 号、1988 年 11 月 23 日、p.79）。「自分はなぜ家庭学校へ来たのか」（1981.9.26）という問いかけが唯一、それに類するものであろう。その場合でも、特定の一個人に対して、しかも明白な非行事実について問いかけているのではない。「今日皆の日記に「自分はなぜ家庭学校へ来たのか」と題をしたのは、新入生それも、（整理番号 88,89,91）の深い思いのようなものを聴きたいからだだった」と記していた。
- 2) むしろ問題行動の背景にかかわる問いかけが、頻度としても多い。家庭、親のこと。
- 3) その日の出来事、1 週間、1 年を振り返るとともに、自分の将来をどう展望するか、という問いかけも、頻度として多い。
- 4) 名誉意識にかかわって、怒り、不満などの感情を抱くことを、むしろ当然としてうけとめ、みずからの内側に眼差しをむけさせ、その種の感情を距離をもって対象化する問いかけも、見落とせない。
- 5) 寮生活での人間関係上の問題解決の手がかりとなる情報を得ている。
- 6) その時々々の社会問題に関心をむけさせている。

こうした藤田の問いかけはどのように関連し、構造化できるか、注意される。

## （2）指導上の留意事項

寮生一人一人に「作文」を藤田が課したことは、指導上の実践に属する。その作文は基本的には寮生全員に毎日求められる。石上館ではほぼ習慣的におこなわれていた。そこに、なにほどこか強いる要素は入ること、その点は明らかである。けれども、題目が設けられる場合にしても、設けられずに自由作文である場合にせよ、生徒たちにとっては、けっして強圧的なものにはないような導入促しの要素が留意されていたことを、われわれは — 藤田の自覚の有無は別として — 認めることができる。

### 1) 生活を基盤とすること

どのように題目が設けられていたか。その当初の時期について、見てみよう。

・「自分の好きな人ときらいな人、自分は他の人に好かれているか知らわれているかについてどう思うか？について、そのことの意味をわかりやすく全員にはなしてから、そのことについて自分の考えていることを書かせてみた」。整理番号 8、1967.1.19

・「人間はむっつりしているよりも常に笑顔でいる方が気分がいいものだし、他の人にいい感じを与えるものなんだ～ということを、様々の例をひいて 20 分ばかり皆に話してから、そのことについて作文を書かせて見た」。同上 8、1967.1.29

・『タベ注意したことについて、自分なりに考えたことを書いてくる様に！』と言ったら、(夜の自習時) 40 分位かかって貼付の様に書いて来たのだった」。同上 9、1968.6.18

・「今日は母の日、皆に自分のお母さんについてかく様に～と言ったら、この子は貼付のようにかいてきた」。同上 8、1967.5.14

こうした初期の事例からうかがえるのは、寮生活の中から導かれる題目であったことである。そうした発想は、以後においても変わっていない。

「勝手に自分自分に飯をもって、普段の倍はあったカレーライスもカレーうどんもあつという間になくなってしまった夕食は、その後になんとなく気まずい空気が流れているので、日記に『飯』という題をつけてみた」。同上 42、1975.3.19

## 2) 特定個人を名指した形で対象化しない。

特定の個人に対する関心が前面になることがある。そのような場合にどうするか。

・「今日の皆の日記に『自分の家族』と題したのは、主として昨日入校した(整理番号 68)の家族、家族観などを知りたいからだったが、他の 11 人の、どれもこれも悲しい家族の群像に改めて切なく胸つかれている」。同上 62、1978.5.2

・「今日の皆の日記に『最近の寮生活の楽しい事、いやな事』と題したのは、(整理番号 67,68)というあまり強そうでない新入生のことが気懸りだからだった」。同上 62、1978.5.12

・「今日の皆の日記に、「将来の希望」と題したのは、主として新入生(整理番号 73)の気持ちを知らなかったからだが、(整理番号 71)の新入生の時から変わらない強い「弁当屋希望！」にはにっこりしている」。同上 71、1979.1.30

・「今日の皆の日記に『自分の家族』と題したのは、主として新入生(整理番号 74)の家族観を知りたいからだったが、他の 10 人の家族の様子に改めて触れて、様々に考えさせられている」。同上 71、1979.4.17

こうした事例が示すように、特定個人に対する関心が前面にあったとしても、そのことが生徒たちには判明されないようにしている。

ただし、名指して題目する場合がないわけではない。

・「今日の日記に『整理番号 50)にはどんな仕事に向いているだろうか』と題したのは、真面目だがなんともいえない一風変わったパーソナリティを持つ(整理番号 50)について、多角的な面からいろいろ考いたいからだった」。同上 62、1978.4.1

こうした例が示すように、名指しする場合には皆でポジティブに助言するという共通理解が成立している場合である。

## 3) 一人一人の生徒をどう理解するか、を主眼とし、書き直しはもとめない。

作文を課すという場合、文章を添削するわけではない。誤字脱字も通例であるが、訂正を求めるわけではない。国語科の作文指導として作文が求められているのではない。これからどう問題解決できるか、どう行動するか、どう生きるか、という課題を明確化するとともに、その課題解決にむけ、一人一人の生徒をどう



理解するかに、根本的な関心がむけられている。「語勢」(T1981.8.23)にも着目しながら、十数名の寮生それぞれの思いの深さ、あるいは考え方の違いが際立つならば、それはそれで肯定的にうけとめている。

・「今日の皆の日記に「一番腹のたつ時、くやしい時、残念な時、嬉しい時」と題したのは、13人一人一人の心の奥底にある喜怒を知りたかったからだったが、(整理番号 71 の姓が表記―河原注)の訴えにははっとしている」。整理番号 71、1978.11.9

・「今日の皆の日記に「自分の父母について考える事」と題したのは、13人一人一人の深い思いを知りたいからだった」。同上 71、1979.2.7

・「今日の皆の日記に『前の学校の先生の思い出』と題したのは、一人一人と先生との触れ合いつらなりの輪郭でも知りたいからだった」。同上 62、1978.4.4

・『10年後の日本と10年後の自分』という題を示して皆に日記を書いてもらったのだが、14人14様に書いているのが面白かった」。同上 33、1975.11.1

・「今日の皆の日記に、『君が家庭学校の先生になったら、どの様な学校にしたいか』と題したのは、10人それぞれの意見に傾聴すべきものがある」。同上 62、1977.9.19

・「今日の皆の日記に「男らしく生きるとはどう生きることか」と題したのは、一連の暴力、喧嘩等をめぐる争闘事件の終止符が一応打たれたことで、一人一人の現在の意見と気持を知りたいからだった」。同上 71、1980.3.11

・「今日は皆の日記に『君は、10年後の夏をどの様に過ごしているだろうか』と題して見た。12人一人一人のこれから始まる青春に幸あれと思いつつ、自分との年齢差を深い感慨で思ったのだった」。同上 74、1979.8.20

以上の 1)・3)諸点は、藤田自身が「留意」事項として明確に意識しているわけではないが、それに相当するものとしてわれわれが整理できる。

こうした点に基本的に留意しながら、中期日誌も作成されているにちがいない。

### 3. 中期日誌の諸様相―日誌記述と生徒作文―

生徒作文も含めて中期日誌をとり上げ、藤田が、石上館に属する生徒たち一人一人にどのようにむき合っているか、以下に明らかにしたい。

この間について、本稿では対象をいくつかの点で限定する。

第一に中期日誌を分析の対象とすることについて。同時期は、題目設定がもっとも活発であった。「他人の悪口や批判ばかり書いてくる少年も、10日もたてば種が尽きて別の事を書き始めます。季節が変わり始めると書く為の素材を周囲の森に向ける様になり、森での畑での仕事を生き生きと書き始めるともう安心です」(「二十年のくぎりに」)と藤田は記していた。この所見に示される内容のコミュニケーションの達成の高さと広がり、あるいは深さを、この時期においてこそ際立った形で示している、と予想できる。

第二に、本稿で対象にするのは、中期 90 名の寮生のうち 3 名にとどまる。入寮から 1978 年 9 月から退寮 1982 年 3 月までの日誌である。この 4 年間(寮生の在籍期間は 3 年 7 ヶ月)の作文題目設定数は、それぞれ 17、27、24、30 である。その設定数多寡で捉えれば、在任中もっとも精力的であった。そうであったとしても、この 3 年間の寮生全員の日誌内容を確認したうえで選択しているのではない。本稿では一部にとどまる。生徒作文(藤田の本文記述からポイントを下げて紹介)も、一部である。研究が進むならば、よりいっそう豊かで多様な姿が検出できるだろう。

第三に、寮生とのコミュニケーションという場合、入寮の出会いから、卒業、復学、就職までの期間の一

連の流れの中で成立するのであるが、本稿では、寮生自身の視野拡大や深まりにかかわるコンテキストを踏まえながらも複数の断片的な場面でしかとりあげない。入寮当初は、「きちっと取っ手を握りしめて、どうしてもその扉を開けようとはしない」という状況（谷昌恒）は、藤田であっても、もちろん免れられないであろう。その事態から、どう「心の扉を開いて」くれるか、その時系列のプロセスそのものを、可能なかぎり原文に即して明らかにすることは、現時点の研究段階を考慮すれば貴重な記録になるはずである。この点については、本稿では限定的であり、より重点的には、別稿に委ねることしよう。原文に即して、という点に関連して、日誌では、色鉛筆で朱筆している箇所が少なくない。しかし本稿では、その点は原則的に考慮しなかった。

### (1) 寮生 M について

入寮時：中学第 1 学年 9 月

退寮時：中学第 3 学年 3 月

整理番号 71<sup>1)</sup>

入寮時の寮生構成：12 名(小 5:2, 中 1:2, 中 2:5, 中 3:3)

#### 第 1 冊

大学ノート使用。表紙に「1978.9.20 入校-12.5 M」と表記。

#### 11.4

今日の皆の日記に、「来年の計画」と題をする。13 人 1 人 1 人の来年への思いに改めて触れ、うむうむと深く頷くものがあつたし、1 人 1 人を改めて見直しもしたのだった。

M は、

「今年は、けんかとか人の物を盗ったりしてきました。それから、皆んなと仲良くしないでむくれてばかりいました。

来年の計画は、むくれたり人の物を盗ったり（しないで）皆んなと仲良くしたいと思います。」

と書いて、（しないで）が入ると入らないとでは大変な違いになるのだが、そんな文法なんて平ちゃらでにこにこしながら持って来た M に、僕は何んにも言いなかったのである。

#### 11.5

今日はちょうど日旺だしと、午前 10 時、全校で平和山に登る。残り少ない暖かさの晩秋の陽射しの中で、立派になって欲しい、中味のある人になって欲しいと淳々と語りかける谷先生のお話、全校深い感動を受けての一刻、一番前できょとんと聴いている風の M だったが、日記を読んでなんともいえない恥かしい思いになってしまった。

「僕は、なぜか知らないけど、谷校長先生がしゃべっていたら、僕は嬉しくなります。」

こんなにも素直に受けとめている事に、僕はなんともいえない感動も受けたのである。

#### \*M 作文 1978.11.5

今朝は、洗濯を、しました。そして、部屋にもどって一人で豆を食べました。それから、また洗濯の方を確めにいきました。そして、食堂で(整理番号 64)君と、僕と二人で、将棋をしました。そして、皆んなといしょに行かないで僕だ

け部屋に残って、ぼうしを取りに行きました。そのあとに、家庭学校の前に行って、皆んなといしょに集りました。それから、平和山の登山に登りました。そこで、平和山に登って、聖書讃美歌を、歌いました。そのあとに谷校長先生の話をしました。そして、僕は、聖書讃美歌を歌っていて、僕は、なぜか知らないけど、谷校長先生がしゃべっていたら、僕は、うれしくなります。ここで、僕は、谷校長先生が、話をして、留岡こうすけ先生が死んでから、半年もかかりました。それから、平和山の念年物(ママ)を、見ていて、なぜ留岡こうすけ先生が生きているような気がします。それから、平和山からおりてきて、グラウンドで少し遊びました。それから、寮に戻ってきて、部屋で日記を書こうとしたら、(整理番号 62)さんが食堂で書きなさいといいました。それから、たつやさんが、おこるつもりをしておくれませんでした。そして僕は、(整理番号 55)さんのことで、おこられていてもまだ(整理番号 55)さんの気持ちを出きしめていました。ここであとは、僕は、(整理番号 55)さん気持は思っていない。ここで日記を終わります。

## 11.20

今日からいよいよ作業班学習の発表が始まる。

今日はまず醸造部と酪農部、多くの鋭い質問がとび交い、それに対してそんじょそこの答弁とは大違いの人間味あふれる名答弁がなされ、1年を締めくくるにふさわしい行事のまずは始まりの1日、Mの質問には満場爆笑となり、僕もいささか小さくなったのだった。

「そのほうまきはとは何ですか？」(下線原文ママ)

一瞬酪農部を代表して答弁に立っている(整理番号 54)も意味が判りかねて戸惑ったのだが、表に示されて判ったらしく、

「これは放牧(ほうぼく)と言って、牛を牧場に放つことです」(下線原文ママ)

と答弁して、わっと爆笑がおこったのだが、これからが又Mは大したもの。

「ハイわかりました」

とにっこり座って悠々とあたりを見回し、僕も全校生徒職員の中で堂々と質問する勇気に敬意を表しつつ、悪いけど赤面してしまったんだよMよ！

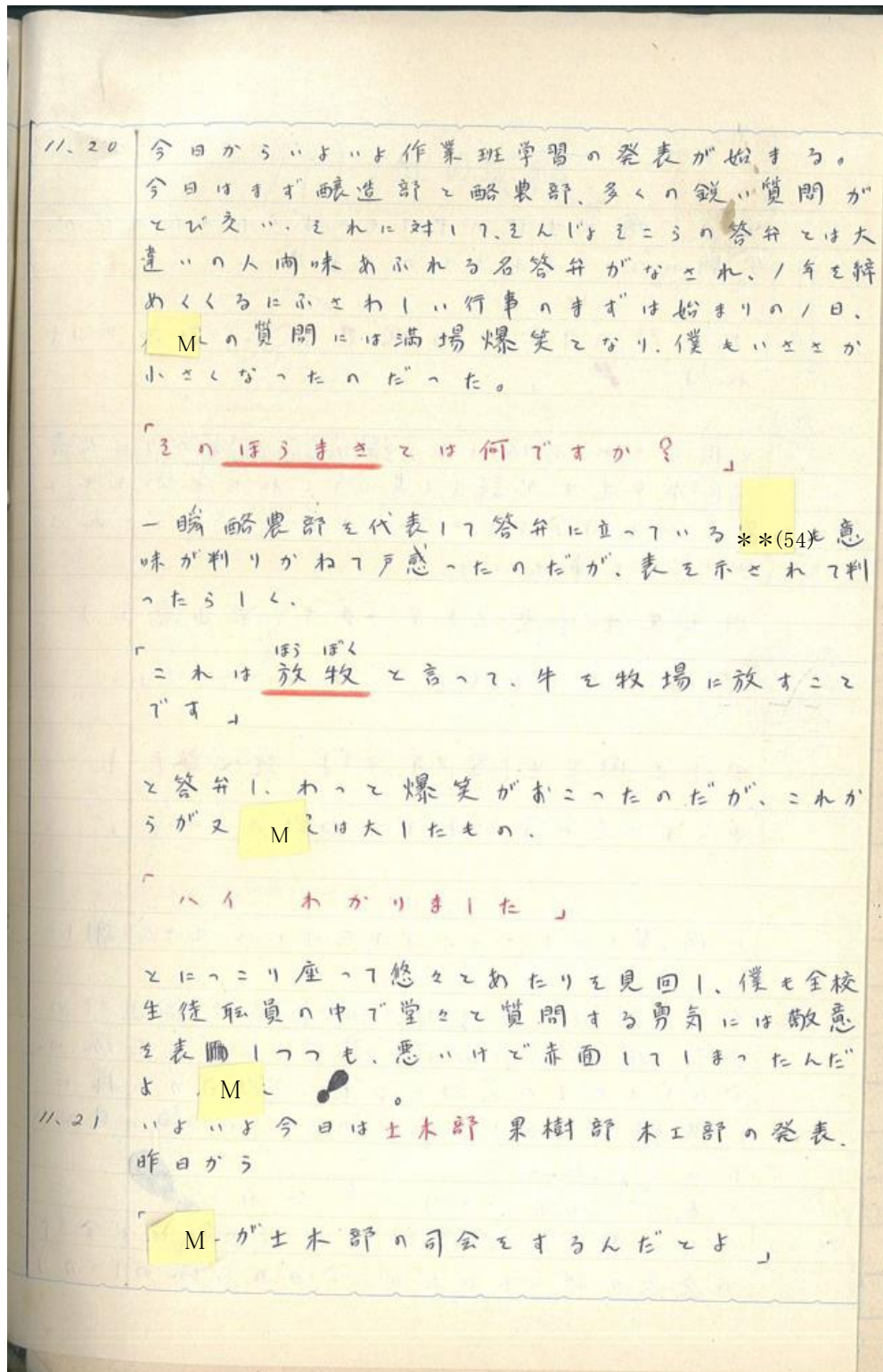


図2. 寮生 M についての 1978 年 11 月 20 日の藤田日誌

「作業班学習の発表」とは、毎年この時期恒例の学校行事「収穫感謝祭」を指している。

11.21

いよいよ今日は土木部果樹部木工部の発表。昨日から

「M が土木部の司会をするんだとよ」

「まさか」

という噂が生徒の中でもっばらだったのだが、今朝になって平本先生から正式に

「土木部の司会はMだ。しっかりやれよ！」

と指名され、Mはもう踊り上がらんばかりに大喜びし、平本先生が詳しく書いてくれた原稿をもとに立派に司会をやってくれたのだから、これはもう大した事だった。

村上先生（歴25年46才楽山寮長）

「Mは大したもんだなあ～」

田中正国先生（歴7年、39才、洗心寮長）

「やっぱり兄の方が上ですねい～」

大抜擢して下さった平本先生には唯々感謝したいと思う」

## 11.22

今日は山林1班、山林2班、養鶏部、輸送部の発表、昨日の名司会で一躍男を上げたMは、今日もまだその余韻にひたっているかの様に上機嫌で、しみじみとその人のいい顔に見とれたのだった。

これからの永い年月、幸あれ！

## 11.23

今日の園芸部、野菜部、工作部の発表で全部の発表が終ったのだが、今日のMのしっかりした日記には感心している。

「今日は、勤皇感謝でした。」

という出だしには度肝を抜かれたのだが～～。

## 第2分冊

大学ノート使用。表紙に「1978.12.6-1979.4.6M 兄」と表記。

### 12.1

またまた他人の物を盗っている（朱筆一注）。

「この頃は他人の物を盗ってもトボケルんだよ せんせ！」

とそれぞれ大切な品々ばかり盗られている12人はいきりたって怒り、僕もいささか呆然としている。

欲しい物はなんでも自分の物としたい願望は、これはもう泥棒の原点の様なもの、～～

さてどうしたものか？と16年目の教護の難敵？になって来た小さな石塚を見つめての夜。

### 12.2

なんとなく石塚の顔を見るのがいやになった。これでは教護放棄じゃないか！と自分にいや気がさしたりして、128cmの小男にのまれてはいけないと思いつつもやや疲れ気味なんだよ 石塚！

### 12.4

連 続 の 泥 棒 で 大 喝 ×（朱筆一注）

盗 品 ？

消シゴム 24 ケ

エンピツ 16 本

定 規 5 本 (学校使用の物)

クリスマスカード

その他無数

皆はたまげた様に石塚を見つめ、Mは「芦別でもらったもらった」ととぼけた様に言いやり、

「そんな事をして弟がどんなに恥しいと思っているか考えた事がないのか レ (原文ママ) 」

と ゲ ン コ ツ 3 発

やって怒鳴りつけたら、始めてぼろんと涙をこぼし、

「Mも泣くんだなあ〜〜」

と皆も家内も異人種でも見る様にMを見つめ、なんだか僕の方が悲しくなってしまった。皆の日記をコピーして貼付したのだが、昨日までMが皆にいろいろ言われる度に可哀想だなあ〜〜という眼差しでじつとMを見つめていた(整理番号 72)までもが、自分の大切にしていた品々がMのベッドから出てくるに及んですっかり絶望したらしく、

「最後に、僕はMにしてやれる事は、もう何もありません」 (下線原文ママ)

と日記を結び、(整理番号 72)の様な優しくてすぐれた人に見放されたMがなんだか哀れで仕方がなく、このままではいけないと気を取り直しての夜である。

## 12.6

なんとなくしょぼんとしているMが可哀想になって、なるべく声をかける様にしての今日は、

「僕は、社会科を考えて僕は、自分の行く道を、考えました。」

という日記を読んで、Mを泥棒にさせてはいけないと改めて奮起の思いになっている。

## 12.8

段々元気になってはいるが、なんとなく皆に遠慮しているというか小さくなっているというかの感じがあって、さてどうしたものか？と思案している。

畏縮しているという訳でもなく、萎縮している訳でもないのだが、やはり小さくなっているのは事実らしく、この小さくなっている姿を原点として、別のMにして見ようという意欲も段々湧いて来て、僕の全精力の半分は確実にMに対して費されている。

## 12.23

いよいよ明日はクリスマスなのだが、Mはもうその楽しみで胸を弾ませている様だ。

「かざりもつけます。

電気もぱつとあかるくなるのでいいなと思います。

そして25日は、夜にプレゼントがあるので、これもうれしいなと思います。

プレゼントの中にノートかも知れません。

25日は、じつにおもしろいなあ」

Mの無邪気さにうたれるのは、どこかに、産れたままの天真爛漫さを持ち続けているからなんだなあ～～と様々に考えこんでいるんだよ。

\*M 作文 1978.12.27-1979.1.7

「自分の行い」

僕は、昨年は、悪いこととか寝しょんべんを、たれていました。そして、先生にもおこられていました。そして部屋で反省したり廊下のガラス前で反省をしました。それでも寝しょんべんとかは直りませんでした。そして皆んなにもめいわくばかりかけていました。それから、まだまだ先生にもおこられながら、平気で寝しょんべんとかたれていました。今度から、全体に寝しょんべんをたれませんから、許して下さいと何んかいもいいました。それと、悪いくせは、直りませんでした。昨日は、一番めいわくをかけすぎて一時帰省にも帰えれませんでした。帰省にも帰えれなかったのは、自分の心と自分の行ないが悪かったからです。今年からも自分のくせを直しながら、今年は、夏の帰省にも帰えられるように努力しながら頑張ります。

1.22

この頃特に感ずるのは、Mの笑顔が良くなったことである。他の子の品物に手をつけなくなって皆から怒られなくなったのも明るい顔になった一因だし、夜にションベンしなくなってここでもなんだかんだ言われなくなった事も大きいしで、いい方の回転軌道に乗って来たから、自然とMの顔が明るくなったんだし、笑う様になったんだよなあ～と、小さなMの頭をなでたのだった。

1.24

午後から除雪をした後皆でスキーに乗ったのだが、スキーとなるとMは必ず顔を揃えて、平和山にも谷間にも必ず皆の後について行くのである。

にこにこしながらよく転び、短い足だから（失礼）すぐ起き上がり、だるまの様な笑顔を見せるMを見ると、人間の原点を見る様な思いで襟を正す気分になってしまう。

2.7

今日の皆の日記に

「自分の父母について考える事」

と題したのは、13人一人一人の深い思いを知りたいからだった。

その中でMの文を読んでなんともほっとしたのは、Mの伸び伸びした父母礼讃に深く心をうたれたからである。いい父さん母さんを持っていて倖せなんだよなあMは！

「自分のお父さんは毎日毎日会社を休まないで真面目に働いています。

だから、僕たちは、幸せなのです。」

\*M 作文 1979.2.7

「自分の父母について考えること」

僕のお父さんは、炭こう夫です。そして、炭こうの中で、石炭を掘ったり石油とったりしています。それから、まっ黒けにして家に帰ってきます。自分のお父さんは、一生けん命働くお父さんです。そして父は、お金もうけます。そし

て、父の考えたことは、炭こうで死がないこと、そして自分のお父さんは毎日毎日会社を休まないで真面目に働いています。だから、僕たちは、幸せなのです。米とか、食類は、皆んなお父さんが働いて買った物なのです。そのあとにお母さんは、洗たくとかおきょうりを作ってくれます。終わり。」

## 2.18

今日の礼拝は森田先生、俳人でもある森田先生が、去年一年の家庭学級の様々な情景を御自分の俳句を通して語られ、その暖かい滋味あふれるお話に深く感動するものがあった。

教護院の朝な夕な的情景を、教護院の職員でもある俳人が俳句に詠むということだけで素晴らしいと、僕は改めて森田先生の人柄とその俳句に深く敬服している。M も、黒板に書かれていく森田先生の俳句にじっと眼をこらして書き写し続けていた。

## 2.25

今日の礼拝は谷先生、聖書讃美歌が終わった後、ペテロのことを語られながら、神を信ずることの至福を諄々と説いて、先生の深い信仰に改めて心から敬服するものがあった。そして、M の日記にも又感動している。

「今僕は、朝出る時にさむかったです。そのわけは神様がさむくしてるんじゃないでしょうか」

M は、やっぱり神様に一番近い場所で生きているんだよなあ～

## 第3分冊

大学ノート使用。表紙に「1979.4.7-8.8M 兄」と表記。

## 4.17

今日の皆の日記に

「自分の家族」

と題したのは、主として新入生（整理番号 74）の家族観を知りたいからだったが、他の 10 人の家族の様子に改めて触れて、様々に考えさせられている。M の日記は、11 人の中では抜群の楽しさで、なんとなくほっとしながらにっこりしたのだった。

## \*M 作文 1979.4.17

「自分の両親、兄弟姉妹について 考えること」

僕はお父さ（ママ）お母さんがいます。そして弟が二人います。」妹が二人います。」（ママ）そして兄は一人です。全部合わせて八人です。その中で、二人が、家庭学校に来ていました。一人は、大沼学院に行っていました。それから、僕達は、両親をうらぎってここに来ました。お父さんお母さん今頃何をやっているのでしょうか。」（ママ）弟は、何をして遊んでいますか。」（ママ）そしてテレビは、何んチャンネル見えていますか。」（ママ）今頃の僕は、学校に行って皆んな仲良して遊んでいます、今頃は、バスケット大会がやっています。そして卓球をやっています。そして、お父さんお母さんは、楽しいすごしているだろうと思います。それから、弟は、家の中で、トランプとか菓子位は、食べているだろうなと思いますけど、まだまだ自分の家に居たほうが、ずっと面白かったと思います。」（ママ）そして妹は、お人形で遊んでいるだろうな。」僕は、自由とかサッカーで遊んでいます。日曜は、遊び時間になっています。」（ママ）そして皆んなと仲良遊んだり卓球したりして遊んでいます。大沼学院に行っている人は、何をしていますか。」（ママ）やり家庭学校と同じ



で、仕事とか除雪とかするんじゃないでしょうか。」そして、何も関係なく同いだと思います。僕の二番目は、洗心寮で、よく頑張っています。」(ママ)そして僕達と同じく仕事しています。それと薪運びとかしています。」だけど、石上館の部は園芸部です。」(ママ)洗心寮の部は、山林部二班です。そこの部だけは、ちがいます。どこの寮だって同じではありません。」(ママ)そしてお父さんは、働いて子供ば(ママ)食べさせていかねばなりません。終わり。」

#### 4.19

今日の皆の日記に

「男は何故働くのか」

と題をしたのだが、11 人一人一人の男論にはっと学んでいる。小さな小さな体躯の M は、

「力が、大きいから仕事が、できるわけなんかありません。小さくても、働けるのです。小さいこそ、働いて、大きくなるわけなのです」

と凛々と書いて、僕は何かこう電気が走る様な深い感動を受けたのだった。

#### 5.2

今日の皆の日記に、「春になって思う事」と題をしたのだが、M の日記には又につっこりしている。

「春になって思う事は、花見がいいと思いました。沢山の鳥が出て来る。それは、からすと、色々な鳥がたくさん出て来ます」

春の一番始まりの小鳥(?) がからすというのもまた M らしいひらめき～～。

#### 5.3

今日は憲法記念日、午前 9 時から全校で谷先生の講話を受けたのだが、一番前の席に座ってしきりにメモしていた M の苦心の日記には、その大きなスケールの日記にはうむうむと唯頷くだけである。

「大きい佛教はインドかも知れないけど、本当の佛教は奈良県の所にあると思います。

その前天皇は昭和でした。」

#### \*M 作文 1979.5.3

「憲法記念日の感想」

今日の午前中は、校長先生のお話がありました。そして、校長先生が、憲法のこと、話をしてくれました。それから、僕は、黒板に書いていて者だけ書きました。憲二十一年十一月三日公布五月三日、記念日二十年八月十五日、マッカーサーと言うのです。そして、日本国憲法は、始めに出きたのです。」それから十七条の憲法、そして聖徳太子、天皇は、子供からつたわた物でした。五百七十四六百二十二、九七十九五百九十二崇峻日本書紀と言う本を、読みました。推古攝政官十二年から六〇四になった。仏教神和をもって貴しとなし争うことなきを宗とす。それは、憲法と言うのですか。そして、昔から、同じと言うのですが、それは、ちがうのです。それは、新日本憲法と言うのです。人間は、しんようが、大事だ。それから、昔は神様がいたのであろうか。忿瞋怒忿(ママ)は、人の物をあつめて自分物にしませんでした。そう言うと思いました。もう一つは、いじを入れて同々と行くのではないのでしょうか。それから、仏教は、インドからつたわたったといいますが、どこにも仏教は、あるのです。大きい仏教は、インドかも知れないけど、本当の仏教は、奈良県の所にあると思います。その前天皇は、昭和でした。その次の天皇は、大正でした。本当の天皇は、明治といわれたといいました。だが江戸時代もあるのです。大切な事は、人のことばを聞いているのです。天皇の次は、太子なのです。新政夫(ママ)ができるわけなのです。そして校長先生が読んでいた本から、出てくる人物は、人に役だつ。」な

のです。それは、うらぎられないようにします。送ることばなのです。

## 5.8

### ○ スポーツテスト結果

- 1500 m    67 位（最下位）    8 分 32 秒 3
- 50 m    30 位（最下位）    10 秒 6
- 巾とび    47 位    2 m 35
- けんすい    0 回
- ソフトボール投げ    失 格

なんとも残念だなあ M！

しかし、この頃は寝しょんべんの毛布も 1 人で洗う様になったし、人の物だって盗らなくなっているから、人間としては進歩しているんだよ！立派なもんだよ

## 5.9

今日も朗らかな 1 日、よく喋り、よく笑い、この頃は皆にまじって一丁前にバーベル上げる様になり、「あまりバーベルをあげると背が伸びないぞ！」と皆に言ったら、小さい小さい M すっかり心配になって来たらしく、

「バーベルあげると背伸びないのかい？ それじゃやめ様っと！（ママ）」

と、やめる事を大きな声で宣言していたのがなんとも愉快だった。

## 5.12

明日は母の日なのだが、今日の M の優しい作文にはうたれている。

「僕は、お母さんがとても好きです。そして、お休みなので、お母さんは、どこかに行っているでしょうね。」

M の優しい気持は、きっと優しい母さんと父さんからはぐくまれたと思うだけに、いつかお会いしたいと思っているんだよ M！

### \*M 作文 1979.5.12 「明日は、母の日、自分の母の事」

僕は、お母さんがとても好きです。そして、そしてお休みなので、お母さんは、どこかえ行っているでしょうね。それから、バラの花を貰えたのと思いました。そのあとに、僕は、お母さんのそばに居たら、世話などはできたかもしれませんでした。そのわけは、お父さんが、入院したかなのです。手紙には、そ書てありました。それから、僕は、自分の家だったら、バラとかやっていました。そして、お母さんには、花とか作ってあげようとしたけど、僕は、家庭学校に居るので、花とかは、作ってあげられません。そして、お母さんのかわいそうな所は、お父さんが、入院したからなので、今何をしているんでしょうね、それから、お母さんは、とても気が強いけど、お父さんが入院したら、四人だけ育ててあげる出きるのですか。米は、どうするのですか。お父さんが入院したら、帰省の時には、どこにも行けなくなります。

## 5.24

M は国語が大好きだ。

国語と言うより、漢字と言うべきなのかも知れないが、習った漢字、覚えた漢字は実に正確にちゃんといつでも書けるから、事漢字に関しては、皆はいささか以上に M に一目も二目も置いて、人それぞれの才能って素晴らしい！ と僕は嬉しくなってしまう。

#### 5.26

今日の皆の日記に「今一番考えていること」と題をしたのだが、M の文にはうーむと深く感じ入っている。

「僕は、まず始めに帰省に帰ることです。そしてお母さんと、お父さんに会って来る事が大事なのです。」

大事なのですよという言葉が実にいいなあ M よ！

#### 6.1

さあ今日から 6 月。6 月は釣りだとか運動会だとかの楽しい行事がいっぱいあるんだぞ！ と皆から聞いている M は、

「せんせ、6 月も楽しいことがいっぱいあるんだね、

家庭学校っていいとこだね　せんせ！」

と僕を見上げながら話しかけ、その如何にも素直な感嘆に僕はなんだか照れくさくなってしまったのだった。

#### 6.4

○ 湧別川へ魚釣り遠足に行って来る。

M の釣り果はゼロだったなあ～～～

針にミミズがうまくつけられず、皆も M の針まで手がまわらなくて、僕もあまり上手ではなくて、結局 M はミミズと格闘して 1 日が終わってしまった様なものだったのである。

針にミミズをつける練習をみっちりさせるべきだったなあ～～～という寮長としての僕の深い悔恨～～～。  
申し訳なし M よ。

#### 6.5

5 月の煙草事件、頻発した無外等の動揺の余波がまだ全校にくすぶっている気配なので、今日から 10 日まで終日寮生活となる。

従って今日の平和山登山も寮ごとで登るという異例の登山となり、山頂での谷先生のお話も又厳しく、且つ重いものだった。

しかし、M にとっては全くの他人事といったあんばいで、

「たまにはいいね、寮ごとで平和山に登るのもね　せんせ！」

とのんびり僕に話しかけたりして、僕も思わずにっこりしたのだった。

#### 7.7

いろんな事をユーモラスに書いている M の日記だが、最後の 2 行にはふき出してしまった。

「それから、僕は、(整理番号 75)さんはまだ新入生なので、かわいがってあげています。」

有難うよ M！

○ 発信 母さんへ

7.14

今日の皆の日記に

「今、一番楽しみなこと」

と題したのは、皆の一番楽しみにしているのが一時帰省だということを承知の上で、その底に流れている一人一人の深い思いを知りたかったからだった。

Mは、

「僕は、去年失敗してしまいました。今年は、お父さんお母さんの所に帰って、僕の失敗をはんせいして～～」

と書き、所々に文法上の誤りは例によっていっぱいあるが、Mの言わんとしている事はいたい程に理解出来て、今年の夏の一時帰省がMにとっては大切な一里塚だと、しみじみ思っている。

7.19

この4、5日、僕とMとでリンゴと梨に袋かけをしているのだが、(Mは僕に袋を渡す役目)、Mはいろいろいっぱい僕に話しかけて、世間の森羅万象、Mの口から語られると実に楽しいのである。

「日本で一番偉いのは留岡幸助先生なんかもね」

「悪いことすれば谷校長先生になんでもわかられてしまうんだよね！」

「弁当屋もうかるんだもんね！」

「弁当自分で作って、自分で売れば一番もうかるんだよね」

「北の湖とジャイアント馬場と喧嘩したらどっち勝つべね？」

先生ならどっち勝つと思う？」

「僕と（整理番号64）とどっち金持になるべね？ せんせ」

「石油なくなれば、僕の父さんもうかるよね」

(Mの父さんは三井芦別炭坑採炭夫)

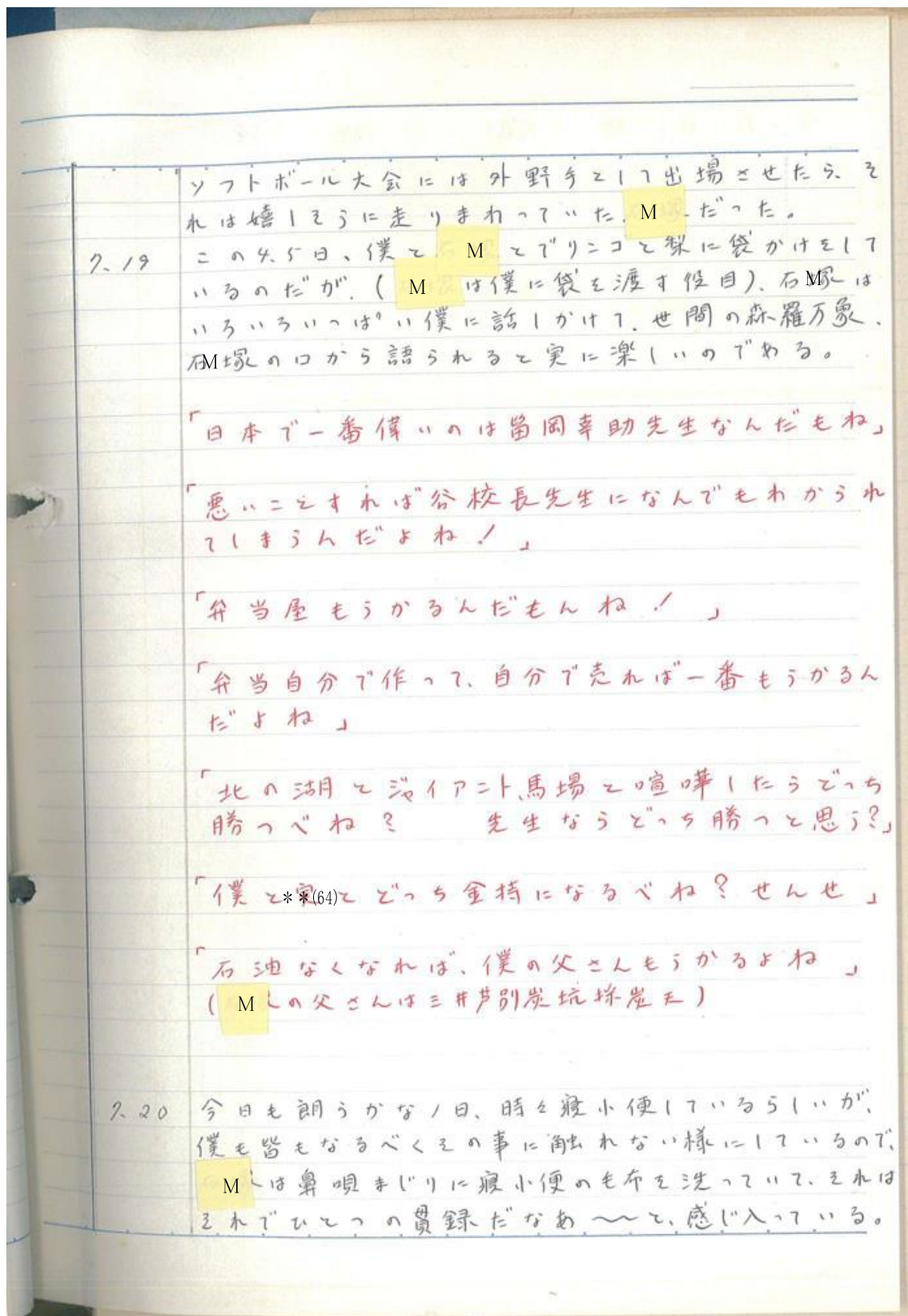


図3.寮生Mについて1979年7月19日の藤田日誌

7月16日にも「なんだか世間離れした感じになってしまったMとの語らい」と藤田は記している。

大学ノート使用。表紙に「1979.8.9-12.19M」と表記。

8.20

今日の皆の日記に、「君は、10年後の夏をどの様にすごしているだろうか」と題をして、12人1人1人の青春論をじっと聴き続けての夜、Mの文にも圧倒され続けたのだが、結びには思わず顔がほころんでしまった。

「そして、子供も生れているかも知れません。10年後でそういう意味かも知れませんね 終り」  
たしかに、そういう意味なんだなあ～～。

8.26

Mの文法をどう直したらいいか困っている。書く文章だけではなくて、話す言葉にも首かしげる文法のまちがいがあって、困ってしまうのだ。例えば、今日はこうなのだ。

「せんせ、礼拝堂で加藤先生と言う人(?)と会いました」(下線原文ママ)

「加藤先生って? 栄養士の加藤先生かい?」

「いや加藤先生です。前に桂林寮に居た!」

「そりゃいつも教務室に居てMと顔を合わせている加藤先生ではないか〜!。こういう時にはな、加藤先生と会いましたって言うもんだよ!」

「そういう風に言うのかい? せんせ!」

10.5

早朝6時、全校で平和山に登る。しばらく振りの平和山でなんとなく皆の足が弾んでいる様に見いる中、Mは

「やっぱり平和さんはいいね先生!

留岡先生待っているんだよね せんせ!」

と僕の顔を見上げる様にして話しかけ、いい事言うなあ〜と、47才うなるばかりだった。

10.6

今日の、Mの日記というより作文にはほう!と感嘆している。文章もしっかりしているし、文法もちゃんと合っていて、何よりも自分の好きな女の子への思いと、その思い出を美しく書いて、Mの文才に眼をみはっている。

「そして、後から本当の美人が、来ました。その女の子は、(姓表記—河原)夕子さんでした。」

「そして、僕は、やはり女の子は、好きなのです。」

「そして嫌いな人は、(姓表記)夕子さんでした。」

「それから、苦しくても悲しくても僕は、がまんをしました。」

2人の夕子さんに僕も会いたくなかったなあ〜 Mよ。

10.18

今日の日記に「自分の将来の計画」と題をしたのは、主として、来春卒業予定の5人の(整理番号 46,59,65,67,69)

今の気持を知りたいからだだったが、Mの文にも又はっと注目している。

今まで弁当屋で働きたいとは言って来たのだが、その弁当屋の所在はまだ不確定の漠としたものだったが、今日の文にははっきりと美唄と書いていて、これは重要な意思表示だと思った。

「もう一つの将来は、美唄の弁当屋に働きたいと思います。

それから、すてきな事は、人生で有った。」

素敵な事は人生で有ったのか！ いい言葉だなあ Mよ！

\*M 作文 1979.10.18

「自分の将来の計画」

僕は、去年と同じくしないで、大人になってからの事を書きます。それは、まず始めに、背が、大きくならなかったら、だめなものでした。まだまだこれから大人になって行くのでは、ないでしょうか。僕の考えでは、小さいのかも知りません。ですから大きくなるためには、ご飯を沢山食べて、運動をしていかなかったら、だめなものでした。前の将来は、ぬかしたいと思います。卒業したとしたら、僕は背が小さいから、働く場所が、ないと思います。そして、大きくなった場合は、皆人と同じくしていけるのかも知りませんでした。そして、札幌のパン工場でもいいです。僕は、それが、とても良いと思います。そしてもう一つの将来は、美唄の駅弁当屋に働きたいと思います。それから、すてきな事は、人生で有った。それから、僕は、考える事一つだけ有るのです。それは、さぼらないで、働らく事でした。真面目勉強して仕事して、頑張っていくのでした。そして、僕は、卒業する前に、小便を直して行きりっぱな大人になりたいと思います。そして、将来の事一つ一つ大事にしていきたいと思います。もう一は、算数、国語に力を入れたいと思います。特に、算数に力を入れたいと思います。ここで僕は、日記終わります。人生の事も一つだけ書いて置きます。それ、命と、人間の力でした。

終わり、 M

11.22

今日の工作部木工部土木部の発表、数ある作業班の中でも、この3つの部は高度な技術を持っていることのでなるのだが、今日の土木部の「ヤコブの井戸浄化槽の模型による浄化の実験」は今年最大の圧巻だった。Mはもう眼を丸くして見つめ続け、僕もすっかりその実験に見せられての半日、素晴らしかったなM！

\*11月22日M日記

「家庭学校では何故仕事をするのか、

今日午前中、収穫感謝祭が有りました、そして、まず最初に、土木工部から、発表をしました、そして、(他寮M)君は、S54年度月別作業表を発表しました、それから、(整理番号67)君作業種別表を発表しました、そして、(他寮)君は、ろかそうと配管見取り図とろかそう、貯水そう作りの図工事内容及び容積を発表しました、そして(他寮O)君は、少し位あがっていましたが、それでは、(他寮O)君は、頑張りました、そして、(他寮N)君と、(他寮K)君と二人で、ろかそうの働きとろかそう内部のしくみを発表しました、それから、かわしま君は、ろかそうの実けんを調べながら、発表しました、そして、(他寮A)君は、ろかそうと貯水そう作りにかかった資材と金額を出したものでした、それを発表したのでした、これで土木工部の発表終わりました、僕は、家庭学校で、仕事を学ぶ事は、まず始めに力を、着けるために来たのかも知れませんが、そして、僕は、一生懸命頑張りたいと思います、そして、家庭学校で、何をしたらいいのかは、まだ考えていないけど、僕にしては、堆肥が一番良いと思います、それから、工作部にも関係があります、そして、木工部にも関係が有ると思います、でも工作部は、鉄、板は、使う物でした、そして、今日の事にはとても大事だと

思いました、そして、仕事は、色な仕事有るのでした、それから、僕は、真面目に、仕事をして頑張っていきたいです、これで僕の日記を、終わり、そして、いつも天気良くて、とても、嬉しかった、そして、僕は、何んでも良かったけど… これで、おわり、」

## 11. 27

午後から全校で感謝の谷奥右側斜面のから松植林地（10 町歩）に、ねずみの毒餌撒きに行ってくる。この植林地は谷校長が着任した昭和 44 年に植林されたことをしみじみと思い出し、10 年という年月の早いことに、今更ながら深い感慨を覚えたのだった。

「この樹と、谷校長と同じ年齢かい？！ せんせ！」

笹と同じ位の高さから松を見上げて言った M の言葉はまさに至言！

## 第 5 冊

大学ノート使用。表紙に「1979.12.20-1980.4.11 M」と表記。

## 1.19

今日の日記、

「僕は、今年で中 3 になるのです。僕は中 3 になってから、あまえる事が出来ないのです。そして、僕は、小さい生徒に負けない努力するのです。」

最後までくり返しくり返し読んでいる中に、なんだか目頭が熱くなっていた。いい奴なんだよなあ！M は！

## \*M 作文 1980.1.19

三学期に入ってから、学級での勉強、作業班での作業をしてみて感じた事、考えた事

僕は、三学期に入ってから、学校の生活にも慣れてきました。そして学校に居ても先生の言う事を聞いたりしました。そして少しでも落ち着いてきました。そして、(他寮の K1)さんが、学級委員になっています。そして、(他寮の K2)君が、副委員になっています。そして、(整理番号 73)君が、書記長になっています。今までは、僕書字係になっています。それから、三学期に入ってから、勉強は、少しいくなりました。そして、僕は、とても勉強が、好きになりました。そして、内田先生が、居る時では、静かにしています。森(ママ)先生がいる時でも静かにしているのです。頃々田中教室で、うるさくする人もいなくなったし、ちょうかいもかける人もいなくなりました。平和(平和寮の-注)田中教室になりました。そして、作業班でも、真面目に仕事をしています。そして除雪でも、雪投げをしています。そして、僕は、今年で中三になるのです。僕は、中三になってから、あまえる事が出来ないのです。そして、僕は、小さい生徒、に負けない努力するのです。そして、小さい生徒見たく、あまえてはいけなかったのです。そして、僕は、皆んなと、同じく生活したいのです。そして、来年は、これでも卒業するのです。そして賞状を一枚位は、取らなければなりません。そして、取らないで、卒業したら、恥しく見られるのです。そして一日一日大切にしたいです。そして、僕は、とても喜びが有るのでした。それは、テレビを見れる事でした。 終わり

## 2.5

8時半、全校で平和山に登る。

そして M が、なんと

M



平和山に3番で登ったのだ。

「僕はとても、うそのようで、本当のようで、とても信じられないほど、気分が、良かった」  
ほんとうに大したことだよ M!

## 2.6

いよいよ今日からスキー大会の前哨戦が始まり、今日まず神社山で滑降と回転の練習会を行なったのだが、昨日ほめたばかりの M が、全校の生徒がすっきり整列し、準備体操が終ってもまだ寺崎先生住宅あたりでもちゃもちゃもちゃもちゃスキーの金具をつけれないでいて、僕はもう汗顔の至りなんてものではなくて、顔から火が出る程恥かしかったよ! M!

夕方寮に帰ってから、M を呼んで、

「M よ!

お前は昨日平和山に3番で登ったではないか!

やる気になったから3番で登れたんだよ!

起床して後の身支度にしても、登校する前や行事に参加する時の身支度にしても、いつでも一番最後だということを恥かしいと思わなければ駄目だよ。人より後に、それも最後になるのは男として一番情ないことなんだぞ!」

と一喝したら、昨日の晴れ晴れした男らしい顔のちょうど正反対のしょぼしょぼした顔になり、僕もなんだかしょぼくれた気分になって言うのをやめてしまったのだった。

## 第6冊

大学ノート使用。表紙に「1980.4.12-8.21 M」と表記。

## 5.2

一生懸命に一生懸命に果樹部で仕事をしている M だが、この頃ちょっぴり息切れした感じがする。

「今日1日の反省は、今日作業をしていた時、ぼんやり立っていた事でした。とても悪いと思った。」

しかし、結びのとても悪いと思ったという反省が出来る様になったことに、僕は M の成長を見てもいて、僕は M の人のいい笑顔に見とれていた。

## 6.26

午後からサイロの応援に行って来る。前回はそうだったが、今年のサイロの中のゴミはいつもの年の倍以上もある感じで、流石に僕までもが辛かった。そんな中で、後半はすっかり疲れきった様に少しよろけながらも黙々とサイロの中をふみ続けていた M の姿には、なんともいえない真摯なものが感じられて、熱い思いが胸にこみ上げて来たのだった。

「サイロの中がつかかった。そして、サイロの景色は、とても暗かったです。」

今日の辛さを表現して見事な表現だと思う。

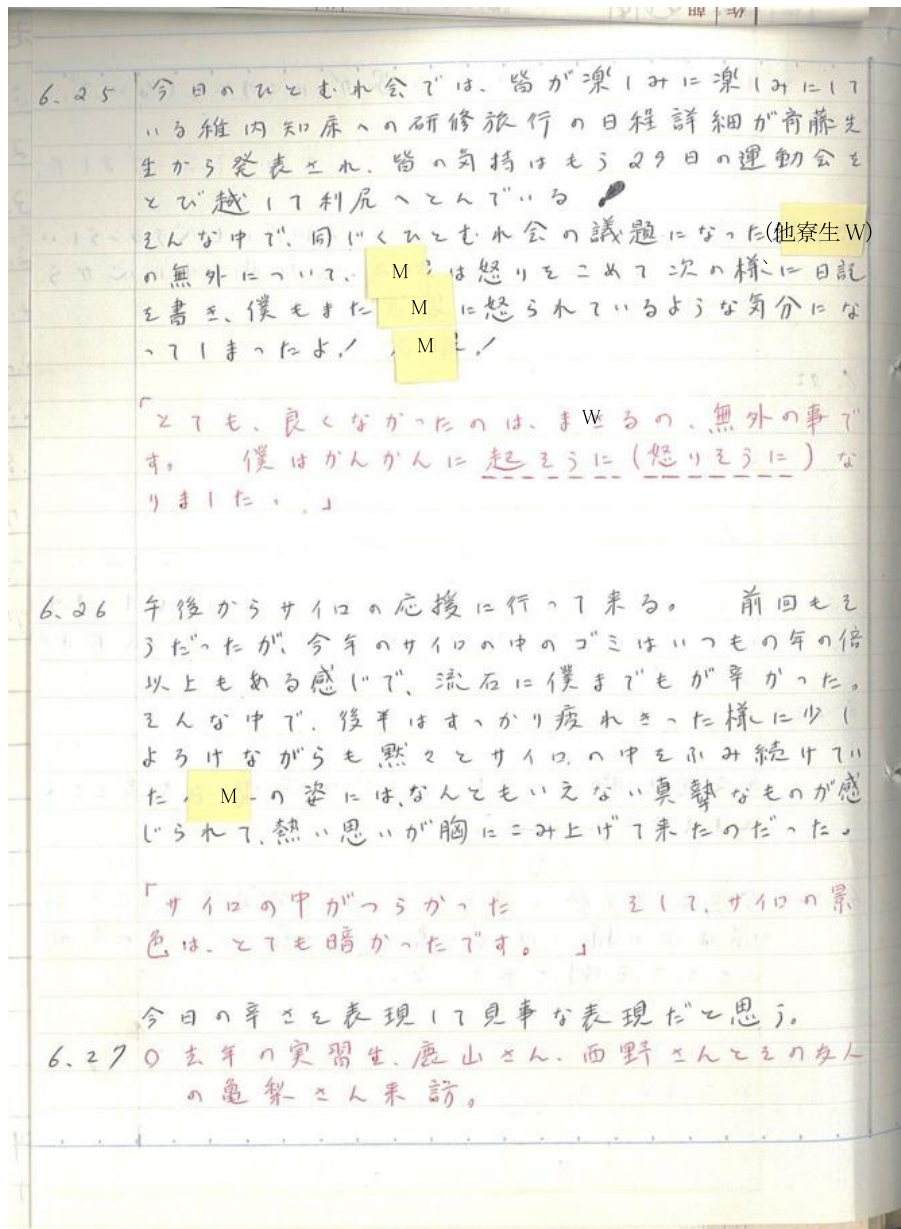


図 4.寮生 M についての 1980 年 6 月 26 日の藤田日誌

サイロは、今も家庭学校校門はから入って左側、平和寮の先にあつて、牛舎に隣接する。

1981 年 9 月 25 日の T についての藤田日誌及び T の作文も参照。

\*M 作文 1980.6.26 「今日の日記」

今日の午後、酪農手伝いをしました、そして僕は、とても、サイロの中が、つかかった、そしてサイロの景色は、とても暗かったです、そして、一しゅうたおれそうになりました、そして、ワゴンにのって、ブラックの所の牧草ちに行っていました、そして、まちがえて、ブラックの下がわの方まで、行って、牧草ちを、ワゴンの車にのつけました。そして、僕は、とても、良かった事は、今日いそいで、牧草を、あつめて、てきぱきできて、良かった、そして、サイロの中に入って、とても、つかかったが、最後まで、頑ばって、できたので、とてもよかったと思います、去年よりも、サイロの中が、とても、つかかった気がする

図 5. 寮生 M の 1980 年 6 月 26 日の作文

今日の皆の日記に「自分の長所短所」と題をしたのは、11 人の今の自己認識を聴きたいからだだった。その中では、M の日記は M も含めて皆の万華鏡の様なものだなあ～～と、しみじみとした気持で何度も何度も読み返している。



「そして、僕の欠点は、人の顔を見て、ごはんを食べることです。」

それが欠点と言うべきものなのかどうか？ は僕にもよく判らないが、人の顔をまじまじと見過ぎるのは他人への興味有り過ぎるからだよなあ〜と、にやにやしながら **M** の顔を見直したのだった。

## 第7冊

大学ノート使用。表紙に「1980.8.22-12.21 **M**」と表記。

10.9

今日の日記「秋になって考える事」

「僕は、何事も有っても、負けない秋にしてみせます。そして、日本中の秋になると思います。心も落ちてきます。」

うーむ！ 言うことなしだ！ **M**！！

10.20

○\*\*児相に中間報告提出（コピー貼付）

公的な文ということになるとこの様にしか書けないなあ〜と頭をかきながら、**M** の日記をにやにやしながら何回も読んだのだった。

「僕は、風呂場の中の、ガラスふきをやりました。そして、僕は、ガラスふくのが、好きになりました。」  
有難度うよ！ **M**！

## 第8冊

大学ノート使用。表紙に「1980.12.22-1981.3.21 就職 **M**」と表記。

3. 15

◎朗読会 (**M**, 整理番号 73,76 出場)

「卒業を前にして」という作文を全校で 15 人も読むという今日の朗読会、小さな **M** が、

「僕は前は馬鹿にされていたけれど、今は皆さんと仲よく暮らしています。」

と読んだ時は、なにかこうじんと胸にくるものがあつたし、

「僕は仕事している時いつもぼけっと立つ癖があるので、社会へ出たらその欠点を直さなければなりません。」

と読んだのに対して、外山先生が

「自分の欠点を **M** 君が知っているということ、それはとても素晴らしいことだし、大切なことだし、これから自分を大切にして社会で頑張ってください。」

と暖かく講評して下さったのも感謝だった。**M** よ、今日読んだ朗読文を絶対に忘れないで頑張って生きていくんだぞ！

\***M**、朗読文「2年5ヶ月生活した学んだ事」

僕は、ここに入校したのは、昭和五十三年の九月二十日でした。そして、僕は、石上館と言う寮に入りました。そして、

僕は、全く何もわからなかった僕でした。そして、一週間がすぎました。そしたら、皆んなの名前とか、寮の生活が、慣れてきました。そして、最初僕は、(整理番号 64) 君と、土木部へ行きました。そして、どんな仕事を、するのかなと思議に思ったぐらいでした。そして、僕は、皆んな親切な人だなと思いました。そして、勉強もあまり出さなかった僕でしたが、今になって数学の問題が、出きるようになりました。そして、僕は、皆んなから、馬鹿にされた、僕でした。今は、仲良く暮らしています。そして、僕は、一番思う事った事は、園遊会でした。そして、園遊会で、沢山食べ物が、出ました。そして、色々な事を、学んだとおもいました。そして、石上館から、何人か人達が、卒業していきました。そして、僕は、ここで一生懸命くらしで良かったなと思いました。その後は、作業班や、学習が、有りました。一番つらかった仕事は、山林部二班の仕事でした。そして、ここで、学んだ事は、十二月のクリスマスパーティーが、有りました。その時は、お客さんが、沢山いって、にぎやかでした。そして、皆んな楽しいそうにやっていました。そして、スキー大会も有りました。とても、楽しかったスキー大会だと思いました。そして、残念な時も有ったけど、それに負けなかったです。そして、一の思い出になると思います。そして、僕の思い出は、スキー大会と、雪像コンクールでした。とても冷たかった、雪像でした。そして、皆んなも一生懸命頑張っていました。そして、とてもつらかった雪像だなと思いました。そして、色々な雪像が、ずらずらとならんでいました。その後は、皆んなが、一生懸命やっているのを見て、良かったなと思いました。そして、僕は、園芸部と言う所に来ました。そしたらハウスの中が、ものすごく熱かったです。そして、メロンや、スイカや、トマトが、植えて有りました。やはり園芸部と言う所は、いいなと思いました。そして、ハウスから、出た気持ちは、とてもいい気持ちが、しました。そして、やはり園芸部と言う所は、花の部だなとわかりました。今まで、園芸部の仕事をして、つらかったなと思った事は、草取り、草刈りでした。後に思うと、やって良かったなと思いました。そして、話が、かわって、僕の欠点は、仕事をしている時に、ぼけと立っている事でした。そして、社会に出てもぼけとした行動をとらないようにしていきたいと思います。そして、今までどおりでなく、りっぱな社会人にしていきたいと思います。そして、仕事に一生懸命頑張っていきたいと思います。そして、むくれたり文句を言ったりしないように気をつけたいと思います。 終わり。」

## (2) 寮生 Y について

入寮時：中学第 2 学年 3 月

退寮時：中学第 3 学年 3 月

整理番号 85

入寮時の寮生構成：本生徒を含め 14 名：小 5:1,小 6:2,中 1:2,中 2:2,中 3:7

第 1 冊

「1981.3.12 -6.21 入校 Y」と表記

### 3.16

ハウスに積った雪を落したり、午後からは 30 度 c にまで上った温床にトマト、ナスビ、キャベツ、ピーマン、ナンバン、シシトウを蒔いたのだが、Y のこつこつした真面目な仕事ぶりには心嬉しくなっている。今あんでいるバックネットあみでも、Y は皆のわいわい騒いでいる中から 2m 位離れて 1 人で黙々と編み続け、それでいて顔にはとてもいい笑いがあって、いいものを持っているなあ〜とじっとその清冽といってもいい顔に見とれたのだった。

\* Y 作文 1981.3.16 「日記」

午前中、学校へ行かず、ハウス作業をしていた。作業の内容は、除雪、たねまき、草とり、その中でも、土をほり返す仕事はしたことがないので、一生けんめいにやっていたが、5分ぐらいしてから、すぐ、ばててしまいました。だけどがんばりました。昼ごはんを食べてから、また、作業が始まった。作業が終わってから、寮に入り、おやつをもらった。また外に出てネットはりだった。ネットはりがおわってから、寮に入り、すこし安んしてからメシを食った。メシを食ってる最中、ブンタが、足にかけのぼってきて、ぼくのはしにくいついた。だけどぼくはそのまま使っていた。

### 3.17

平本学級に僕は行くことがないので、学級での様子がどうなのかよく判らないのだが、6時半に皆と一諸に起きるようになったこと、午後からのハウスの仕事でも黙々とよくやること等々が特に胸にしみた1日だった。

「Y！電気のメーター廻ってるかい？」

「ハーイ、勢いよく廻ってます！」

そして、今日の日記がまたいい。

「自分でも感心していることは、ケンカ、むくれ、などが無いということです。兎相では、ケンカばかりやっていたが、ここで、この2つ、直された」

#### \* Y 作文 1981.3.17「日記」

朝起きが、今日にかぎって早く目をさました。五時五〇分ごろー。朝の作業は、ハウスの実の手伝いだったけど、ハウスに行っても、実がいないので、学校に行って、実をさがしたけどいかなかった。そしたら、実が15分ぐらいしてから、「Y何してんのよー」と言いながら走って来た。また失ばいー。ここに来てから、何回失ばいをしたものか。みんなは「新ぺいだからいいー」と言うが、もう5日すぎたから、みんなと一しょに作業を出来るようにしたいと思う。だけど、自分でも感心してることは、ケンカ、むくれ、などが無い、ということです。兎相では、ケンカばかりやっていたが、ここで、この2つ直された。」

### 3.19

今日の日記「自分という男」

「何をしても、何をわるいことをしても、自分は悪くないんだ！と思いこんでしまう、ということは、僕の最大の欠点だと思います。」

今までの自分は悪い泥沼に落ちていたと思えよ！Y。僕が今日の題を皆にだした真意はな。そんな反省文を読むためではなく、長短含めての自分をしっかりと見つめつつ、将来をどの様に生きていくかの男らしさをまず見つけることを期待したからなんだよ！Y

### 4.9

毎日の皆の日記が実に面白い。1人1人の文章に言うに言われぬ個性があるし、その個性が日々の生活の中でどの様に息づいているか、僕などはもうそれをじっと眼を見開いて見るだけで楽しくなってしまう。今日のYの文の子供らしく生き生きとしていることよ。

「起きてから、便玄掃除をしているとき、僕の気の故か、ハウスの近くの2本の木の上を白いものがフワフワ浮いていた。UFO？そのとき、僕は恐くなってベットの所にかくれた。皆にはそのことを言っていないけど、恐かった。」

そうかあ～UFOが出たかあ～Yよ。

＊ Y 作文 1981.4.9「今日の日記」

今日の朝はめずらしく一人で目が覚めた。そして、文太（飼犬一注）が2号室に入ってきたので、布団に入れて一緒に寝た。起きてから、便玄掃除をしているとき、僕の気のせいかな、ハウスの近くの2本の木の上を白いものがフワフワ浮いていた。UFO？そのとき、僕は怖くなってベットの所にかくれた。皆にはそのことを言っていないけど、恐かった。学校の藤田教室で、（他寮 M）君の筆入れを、だれかがかくしたという事件があった。そして、やった人がわからないと言って、藤田学級全員で本館回りを、11周させられた。僕は嫌な気持ちになった。そして、待ちに待った授業も、二時間つぶしてしまった。本当に嫌な気持ちになった。

4.10

一喝×「ぼけっとしないで勉強に集中せい」

僕の国語の時間、順々に新しい教科書を読んでいたのだが、Yだけはぼかんと頬杖をついてあらぬ方を見ていたので、ぼかぼかと、ビンタ 2、3 発やってしまった。しかし今じっと考えてみると、あの時 Y は UFO のことでもぼんやり考いていたのかも知れないと思ったら、なんだかビンタやる程激昂してしまった 48 才を恥しいと思つての夜なのである。

4.16

午後からハウスの中でトマトとスイカのポットへの移植をしたのだが、38 度にも上っているハウスの中はもう暑くて暑くて大変、そんな中で暑さにたいかねたか Y、

「先生、短パンで仕事していいですか～」

と聞いてから、短パン一丁になってにこにこしながら仕事をしていたのが如何にも楽しかった。Y には白い短パンがよく似合う！。

第 2 冊

「1981.6.22 -11.17 Y」と表記

7.30

「家庭学校の生活」と題をした今日の日記、

「最後に、最初の藤田先生の印象は、失礼ですが、何か用務員のおじさんかと思ったことです。ごめんなさい」

Y の結びの言葉には呵呵大笑いしてしまった。用務員のおじさんかあ～言い得て妙な表現だなあ～Y よ。ぴったりだしなあ！アハハ！。

＊ Y 作文 1981.7.30「家庭学校の生活」

僕はこの家庭学校に来て、もうかれこれ 4 ヶ月と 18 日目です。この学校に入校するまでは色々な悪いことをして、よく警察のお世話になっていました。そして一ヶ月、児童相談所でくらし、更に二ヶ月もたたないうちにもう一度入ってしまいました。そして、児相で、（整理番号 86）や（他寮 K）と会い、とうとう（整理番号 86）と 2 人で児相の窓から飛び降り、無断外出をしてしまいました。それは 3 回目の無断外出だったので、もうなれてしまったような感じで、悪い事

をした、という気がしなくなっていました。その頃の自分はとても悪で、シンナー吸ったり、タバコを吸ったり、家出して 24 時間のゲームセンターに入ったり、人の家からお金や物を盗んだり、万引きをしたり、色々さまざまな事をきて、父さんや母さんにつらい思いをさせてきた。そして、三月一二日。僕はこの家庭学校に入校した。僕は家庭学校というところは、とても恐くて、一歩たりとも外に出れないという、恐怖の教護院に思いました。ですが、実際この 4 ヶ月を生活していて、とっても良いところだと思います。僕は新入当時からずっと園芸部ですが、色々な思い出があります。冬に除雪をしている時、(他寮 Y) としゃべっていて、実が、わあわあとかわめいていた頃や、メロンやスイカの種まきで、沢山の水をくんで、水かけをした日…。ハウスのストーブがつかなくて、実にたすけてもらった日…。色々な思い出があります。そして、冬にはまだ文太が小さくて、寮の中ではしゃぎ回っていた。その頃の文太はものすごく僕になついていて、寝る用意が出来る、僕の布団にとびこんでくる、というとてもめんこかった文太でした。最近、とてもたくましくなった文太はすごく吹えて、ときにはかみついてくるというときもあります。この 4 ヶ月の生活には色々な思い出があります。ですが、平本教室から一気に藤田教室にあがったときに、(整理番号 86) さんに茶かされた記憶があります。そして、最近ではクワガタが沢山とれて、クワガタどうしのケンカをやったりしていましたが、その闘いも、僕のは逃げてしまって、みんなに馬鹿にされたりしました。ですが、クワガタを飼う箱を外に捨っぱなしだとか、トマトやスイカを窓の下にすてるなど、うらの面で悪い所が出ました。そして、クワガタを逃がして、人のせいにしたり、色々なめ事が起きました。更にカブトムシの幼虫をなくしたの何だかんだとわめきちらす人が沢山いました。この 4 ヶ月の間生活して、一番おもしろかったことは、海水浴でした。色々な貝をとったり、魚をおいかけたり、焼いてたべたり、とても楽しかった。だけど、日に焼けて、とても背中がヒリヒリしてとてもいたい思いをしています。ですが、一日中、ずっと海の中で遊べたのでとても満足です。最後に、最初の藤田先生の印象は、失礼ですが、何か用務員のおじさんかと思ったことです。ごめんなさい。(おわり)

8.28

○誕生会。

49 才の誕生日を祝ってもらった夜に、Y の日記を読んでなんともいえない気持ちになっている。

「僕はまともに誕生会をしてくれたというと、小学校 2 年生まで、それ以後は家出していたので、1 回もしてもらえませんでした。これからは、こっちから、父や母の誕生日を、いわってあげたいと思います。」(下線原文ママ)

こっちから父さんと継母の誕生日を祝ってあげたいという心意気！に自立への胎動を感じるのだ。

＊ Y 作文 1981.8.28 「自分の誕生日の思い出」

自分の誕生日の思い出というと、一番心に残っているのは、新しい母になったころ、初めて、プラモデルを買ってくれました。それが、つかわれているジープで、700 円ぐらいのもので、もったいなくて作りませんでした。そのぐらい大切にしましたが、今ではすぐ作ってしまって、かざっておくだけが楽しみです。よく、家出したときなんかお金を沢山とって、プラモデルをいっぱい買って、作って他の人に売って、またその金でプラモデルを買って…。何となく、ここにくる前までは、物の価値がまったくわからなくなったような気がしました。何となくああいうようになると、自分でも気が狂ったんでわないかと思うことがよくあります。そして、中学校に入ってから、一回も誕生会をしてもらえませんでした。でも、僕が悪くてそういうようになったのでしかたないつもりですが、やはり今になって感じることは、きちんと家にいればよかったなあ、ということです。家出さなければ、きちんと、僕のバースデーをいわってくれたらと思うと、胸がキュンときてしまいます。僕はまともに誕生会をしてくれたというと、小学校 2 年生まで、それ以後は家出していたので、一回もしてもらえませんでした。これからは、こっちから、父や母の誕生日を、いわ



てあげたいと思います。

#### 9.14

今日は味噌小屋の大掃除をしたという。

「面白かったさあ～～」

と家内に話していた言葉を思い出しながら、今日の日記を楽しく読んだ。

「アラヨッ コラヨッ ヘイ！ 一丁あがり！」

などの言葉を日記に表現出来るのは Y1 人、実に生き生きした表現だなあ～～と何度も何度もくり返し読んでいる。味噌工場の情景が実に暖かく伝わってくる～～。

#### \* Y 作文 1981.9.14「今日の日記」

今日の朝はとっても眠くて、たまらなかった。皆んな、どどっと、勢いよく玄関の戸を開ける音が聞こえたので、僕も急いで起きた。何となく最近、起きるのがイヤになってきた。ところで、今日、テープを聞いていて、レコードも出してほしいなあ(整理番号 86)と二人で話していました。午後からは作業班で、味噌小屋の大掃除をした。そして、僕は洗いのをやって、ものすごいスピードで洗っていると、水が四方八方に飛んで、あげくのはてに軽部先生にまでも水をかけてしまった。僕と、掬泉寮の N が大声で「アラヨッ コラヨッ ヘイ！ 一丁あがり！」とやると、軽部先生も段々のってきて、とても楽しく作業をやれた。

#### 9.24

##### ◎創立 67 周年記念式

「今日は家庭学校の開校記念日で、午前中は礼拝をした。礼拝で校長先生はいつになく厳しく、又、優しい顔をしていました。」

「僕はここに来てからもう 6 ヶ月以上たっているのですが、こんなに熱心に話していた校長先生は今までに無かったと思います。」

家庭学校の教育の理念を淳々と、しかも深い調子で話された今日の谷先生のお話には厳しい迫力があつたし、それだけに又、鋭い感性の Y には心に響くものがあつたと思う。

#### \* Y 作文 1981.9.24「今日の礼拝の事と食事についてのマナーについて」

今日は家庭学校の開校記念日で、午前中は礼拝をした。礼拝で校長先生はいつになく厳しく、又、優しい顔をしていました。そして、校長先生は、話をしてくれました。ここに来る子供達はとても辛く悲しい思いをして来る、医者のようにその仕事に慣れてしまうというのはとても恐い事だと思います…。というような話を聞いて僕は、いつも校長先生や寮長先生は僕らを見守ってくれて、何となく、僕なんかジーンと来てしまいました。そしてそれを一生懸命僕らに話をしてくれる校長先生の姿を見てみると、厳しく、優しく、僕らの事を考えてくれているのだなあと思つて思いました。僕はここに来てからもう六ヶ月以上たっているのですが、こんなに熱心に話していた校長先生は今までに無かったと思います。今日の礼拝はとても僕は勉強になったと思いました。話は変って食事の配膳についての事です、つい三、四日前まではよく選んで自分のところに置いた、という事をやっていましたが、よくよく考えてみると、何と阿保らしい事をしていたのだらうと思ってしまう。つい三日程前から自分でそういう事をやめましたが、まだやっている人がいました。何となくそういう人を見ると恥しくないのだらうかと思いますが、以前まで自分もやっていたのでそういう事は言えないようです。そして、よく枝豆が出ると、食べ切れなくて(整理番号 82) とかに食べてもらう事もよく

ちよくあったので、これからはそういうような事はないように努力して行って、更にやっている人がいれば注意できる立場になりたいと思う。

10.27

「君が一番信じている人？」

「君は人を信じれるか？」

「両親、身内をのぞいては、何年か一緒に遊んだりした人達以外はあまり信じられません。」

一緒に悪い事をしたかつての仲間は、向うもそう思っているかも知れないけど、絶対に信じられないという言葉に、それらにきっぱりと決別した Y の決意の様なものをひしと厳しく受けとめている。

\* Y 作文 1981.10.27 「自分が一番信じている人、君は人を信じれるか」

自分が一番信じている人—それはやっぱり家の家族達でしょう。ですが、この家庭学校に来る前は家の人達をだまして、お金を盗ったり、家や店をあさって物を盗ったりして、とても迷惑をかけてきましたが、夏の帰省で家に帰ると、皆、喜こんで出向えてくれました。その時は、いつもの家族とは違い、とても本当に良かったねと心の底から僕に言ってくれました。そんな家族は僕にとって掛け替えのないものでしょう。それと、家庭学校の先生達も信じています。僕さえ約束事を守れば先生達も僕らの要求を聞き入れてくれるし、僕らがやってはいけない事をすれば、ビシッと注意してくれるし、とても僕にとっては、好きなタイプの先生ばかりなので、信じられます。けっして嘘はつかないし、絶対だまさないし、とても僕にしてみれば、注意されれば、何くそ！という気になって、今度こそは！という気持ちにつながって、とても、毎日毎日を有意義に過す事ができて、とても有り難いと思います。「君は人を信じれるか」と言われてもやはり、両親、身内をのぞいては、何年か一緒に遊んだりした人達以外はあまり信じられません。前に悪い事を一緒にしていた友達は僕をだましたり、金を盗ったりで、絶対信じられません。相手も、今、真面目にやっていたら、僕の事をそう思っているのだろうが、そんな事は気にせず、これからは、人を信じ、また、自分も人に信じられるような人間になりたいと思う。

11.6

桂林寮から展示林に至る林道左側に大きな桂の苗木を 100 本全校で植えての午後、この桂が成長して見事な並木をつくる 30 年後を思い、何かしんみりした気持ちになっていた。その頃 Y は 45 才！いい家をなしているだろうなあ！～～。

鋤を 1 本折ったことも年月の中に埋もれてしまうよ～。

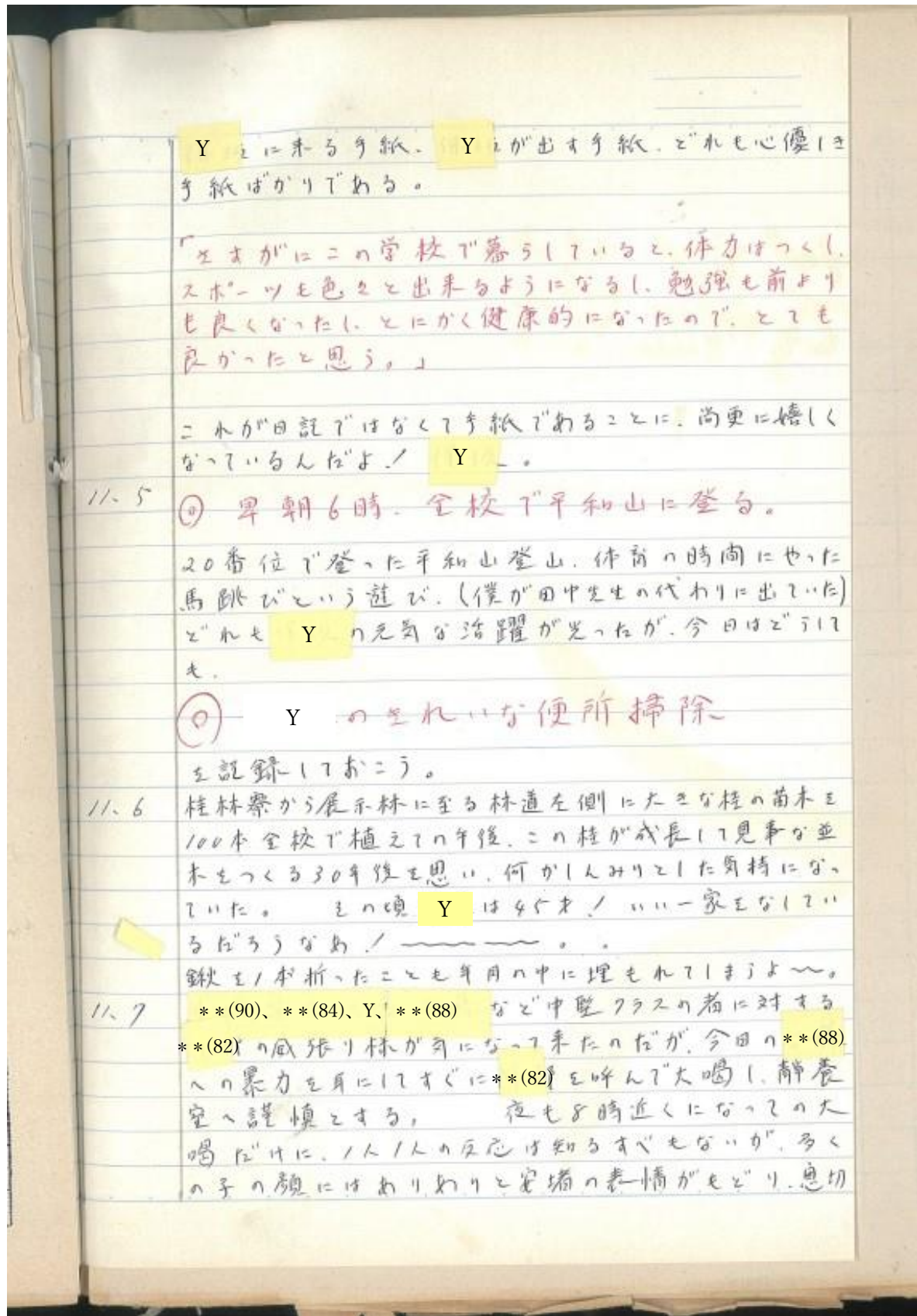


図6.寮生Yについての1981年11月6日の藤田日誌



		56年11月6日金曜		(天気(晴れ)) 氏名( )	
作業音信	朝炊事 夕牛乳缶			使用道具	<input type="checkbox"/> した・しない <input checked="" type="checkbox"/> した・しない
音発信受	へから	T E L T E L 手紙手紙	H A K I H A K I	通信内容	發音 受信
(午前)	(学習)班毎寮用寮每行事レクリエーションその他(班習学部予干)				
学籍	1.科目理地層村上先生 2.科目習内容山口先生	3.科目国内容藤田先生 4.科目体サッカートニョ先生			
(午後)	班毎寮用寮每行事レクリエーションその他(全校作業部予干)				
内容記録	植林かつら(藤田先生)				
挨拶返事報告むくれけんか破損管管理健康状態通院違反行為					
良・悪忘れた	良・悪忘れた	良・悪忘れた	有・無(こま)	有・無(きり)	有・無(植林)
良・普通・悪どこが(さじ)	有・無(さじ)	有・無(いふ)	有・無(おん)	有・無(うた)	有・無(しやう)
今日のは物大切に使うていきなさいと思つ。	ボキッといっただの、やつたら根が切れた。	二頭に来てグインとふんばった。	ままでも抜けなくなりました。	直径10cmもあるような大きな根にさしてはダメです。	ブザツとかいう感じで植えたいと思います。
その木の根を切るように植林してください。その根を切ってしまえばいいですね。	それを二個目の穴には、大きな木を近づけてください。	くくしましたがないと思いつつ頑張っていました。	初めて山林部の植林で一個目の穴を掘りました。	苗を植えました。前の松の植林の時とは違いました。	今日は午後の全校作業があり、カツラの全校作業を行いました。

図 7. 寮生 Y の 1981 年 11 月 6 日の作文

\* Y 作文 1981.11.6 「今日の全校作業」

今日は午後から全校作業があり、カツラの苗を植えました。前の松の植林の時とは違い、とても手間のかかる作業でした。僕は最初、山林部の植林ぐわで一個目の穴を掘っていましたが、なかなかぐわではやりにくく、しかたないと思い

つつ頑張った。そして二個目の穴は、大きな木の近くなのでその木の根っこが沢山出ている、その根っこを切ろうとして植林ぐわを大きく振ってグサッと力いっぱいさした。するとくわは直径 10 cmもあるような大きな根にささったまま、抜けなくなってしまいました。そこで、頭に来て、グイッとふんばったら、ボキッといったので、やった！根が切れた！と思ったら、くわが折れてしまった。これからは物を大切に使いしていきたいと思う。

### 第3冊

「1981.11.18-1982.3.28Y」

12.17

「自分にとっての今年の 10 大事件」

如何にも Yらしい文章の中での、

「体で覚えた家庭学校と児童の差」

という言葉にぎくっとしている。体で覚えた家庭学校と児童の差という言葉、家庭学校で暮している少年たちの素直な気持を代弁しているのかも知れないなあ～。

12.22

今日の皆の日記に

「生んでくれた母と育ててくれた母」

と題をしたのは、2人の母を持っている(整理番号 81,85,86,89)の今の気持の様なのを知りたいからだった。

「自分の母さんについて」

と題を書き変えてつづっている Yの文、なんともいえない切ないものが伝わって来て、11日に訪ねた時の店の様子を改めてまざまざと胸に思い浮かべたのだった。

\*Y 作文 1981.12.2 「自分の母さんについて」

僕を生んでくれた母は、僕が小学校二年で姉が中学校二年の頃、僕や姉をおいて家を出て行ってしまった。僕の生みの親はあまり良い人ではなかったと祖母は言っていました。ですがあまり、小さい頃の話なので頭に残っていませんが、何となくやさしくしてくれた母のような気がしました。そして、半年くらいして、父は今の母と再婚しました。最初は慣れなかったけれど、一ヶ月もすれば「お母さん」と言えるようになりました。ですが、姉はもう中学生だったので、慣れる事ができず、今でも、話の最初に「ネエ、あのさ…」とか、まるっきり母のようにには言えないようです。それも仕方ないと思います。それは、年だって、あまり変らないし、“母”というより“姉”というかんじだと思う。一度、僕が小学二年生の終り頃、今の母がきて一ヶ月たった時、一つのマイクロマンという人形を盗んでしまって父にばれて、なぐられたりした。その時、左のさこつが折れてしまって、入院した事がありました。そして、入院している最中、三度くらい僕を産んでくれた母が心配して見舞いに来てくれました。だけどそれも父にばれた時から本当の母は一度も来ませんでした。ですが、今の母は、まだ年は若いのに、僕や姉、妹たちを育ててくれて、本当に感謝しています。が、今まで、五年間くらい、実の子のようにしてくれて、僕が盗みとかしても、その店へ行って頭さげてきてくれたりして、本当に悪い事をしたように思います。だから、その事も含めて、これから僕が店を手伝って、母を楽にさせたいと思います。

12.25

◎年賀状 8 枚です。

Y をめぐる友だち関係の暖かさはちょっと類がないだけに、今日の年賀状をじっと見ながら、明日からの正月帰省楽しくある様にしみじみ希っている。

「久しぶりに友達の家に行ってみようかと思っても、相手は悪い奴らばかりだと思っているのでしょうか？」

そうは思っていないよ！Y。もっと自分と、自分の生き方と、自分の友達に自信を持てよY。

1.11

「今日 1 日仕事をして考えた事」

如何にも Y らしい知的な文章だなあと感心している。 生木と生木でないのとの重さの違い、

「あたりまえのような事だけど、僕にとっては大問題だ。なぜあの大きな木から水分が取れてしまうのだろうか？」

そう言われれば僕も段々不思議になって来たよY。

＊ Y 作文 1982.1.11 「今日一日仕事をして考えた事」

今日の朝作業は薪切りでした。僕は全々切らないでおさえればかりいて、結果的には1本の木しか切りませんでした。何となく、ぐうたらな作業だったなと思う。そして、午前中の木を切り出して、運んで来る作業では枯れ木でも重い物があって、一目見ると、細くて軽そうな木でもよたってしまうくらい重い木があった。だけど、T(整理番号 89)なんかは、直径30センチメートルくらいで長さ 2、4 メートルくらいの大きさの木を、ひょいとかついで、トコトコと歩き出した。それもシラカバ。びっくりして、ちょっとかつがせてもらったら、とっても軽かった。だけど僕の持っていた木は同じくらいの長さで、直径、15センチメートルくらいの木が、全くかつげなくて、もう。まいった。ここで考えたのは、なぜそんなに木の密度が変わるのだろう。やっぱり乾燥したら水分がぬけてしまうのではないかなあ。あたりまえのような事だけど、僕にとっては大問題だ。なぜあの大きな木から水分が取れてしまうのだろうか？。この事はあまり考えると頭が痛くなるのもうやめる。もう一つ不思議に思ったのは、どうやって木は冬をこすのだろうか？という事です。だって、葉っぱが無いんだから光合成が出来無いでしょう？そうしたら、太陽の光、というのは関係無くなるんじゃないか、と思うと同時に、根から吸い上げる水分、養分だけで生きて行けるのだろうか？本当に今日は不思議な事ばかりあった。

終り



図 8.寮生 Y の 1982 年 1 月 11 日の作文

今日の Y の日記にも深く心うたれている。

「今年の正月は、今まで生きてきた 14 年間で、一番充実した正月だったと思う。」

という書き出しに始まって、対立していた父親との和解、継母と異母弟妹との団らんをしみじみ胸にしな

がら、

「何んとか自分でも信じられない。今までの自分がとても恥ずかしいように思えてならない。」

と結んで、この正月が Y にとってどんなに素晴らしい果実を後にもたらすことになるか図りしれないものがあるなあ〜と、僕も心の底から安堵している。

＊ Y 作文 1982.1.12 「正月をふり返って思う事」

今年の正月は、今まで生きてきた 14 年間で、一番充実した正月だったと思う。あまり父の仕事が無くて手伝いをする日が無かったけれど、雪が降れば、自分から雪かきをしたりして、夏の帰省よりも、はるかに良かったと思う。お年玉も、合計で七千円くらいになりましたが、何となくもったいないような気がして八百円しか使いませんでした。実際にお金を持ってよく考えながら買い物をしたりすると、やっぱり以前のように「七千円くらい大した事ないな。」という事が無くなって、無駄使いも無くなって、この家庭学校に来て良い勉強になったと思う。それと、父との話の中で就職の話が出てきました。夏の帰省ではあまり父との会話がなかったのですが、この正月は、案外と気楽に話せて、自分でもとってもびっくりしました。だけど、普通の家ではそれが当り前の事だろうと思いました。だけど以前までの僕は、あくまでも父を否定し、捕まったと時以外は完全に無視、というような状況でした。ですが今では信用を取りもどしたというか何というか…。だけど自分にとっては嬉しい結果でした。父も母も、祖母も妹も姉も、皆が僕が卒業して帰って来る日を楽しみにしてくれています。何となく自分でも信じられない。今までの自分がとても恥ずかしいように思えてならない。だけど、今ある父や母、皆の楽しみ、そしてぼくの楽しみをこわさないように、自分から一生懸命、残り少ない家庭学校の生活を大切にしていきたいと思います。

1.14

昨日は成績査定会、明日はその成績発表と始業式、そんな中で今日の Y の日記に少しがっかりしている。

「何んとか、他の先生方に良い見られ方をしていないと思うし、学習もあまり上がっていないし、作業も軽部先生に良く見られていないと思うし、寮生活でも良くやっている訳でもないし、やっぱりもらう事は出きないでしょうー。」

馬鹿ったれ！そんな本心でもない投げやりな事を口に出すな！Y。

3.19

◎（整理番号 78）が 21 日に中 1 に復学して行くことを皆に発表。

H の復学は何となく気配で感じていた皆だったが、いざ実際に僕から正式に発表されてみるとショックは大きいらしく、なんとなくしんみりした顔をして聴いていたのが可哀想だった。

「とにかく(整理番号 78)には頑張ってほしい。」

と結んでいる Y の日記が鋭く厳しい。

＊Y 作文 1982.3.19 「先生の話した事」

最初に先生は IQ の話をしてくれました。実はさっき、H が「俺、IQ118 だから、(整理番号 64)さんよりも頭いいんだ。Y さん、二番目だよ、一番は(他寮の生徒名)だわあ。」と、一生懸命言っていた。僕はよく IQ という事を知らないから気にしていませんでした。だけど、H の話によれば、「歳の差で行けば俺、中学三年生になったら Y さんよりも良くな



る、」と言っていました。何が何だか訳がわからないけど、IQというのは、知能の発達を示す指数だというような事はよく解かりました。ですが、自分としてはそんな事にこだわらないで、自分自身をみがいて行こうと思います。もう一つは（整理番号 78）の復学の事が話され、僕は心で祝福しました。が、復学という事はちょっと楽な事ではないように思え、「頑張れ」と言いたくなりました。就職や復学の事も話されましたが、先生の言われる通り、僕にとっては社会という物はとても大きく、広く、厳しいものである。という事が最近になってとても怖いくらい身にしみついて来ている。何だかとても身が重たくなったようです。が、今はとにかく卒業の事は頭から置いて、自分の心を改造して、改めて考えるようにして、有頂天にならないように、少し、大人になったつもりで物事に取り組んで行きたいと思います。とにかく（整理番号 78）には頑張ってもらいたい。 終り

### (3) 寮生 T について

入寮時：中学第 1 学年 8 月

退寮（転寮）時：中学第 1 学年 3 月

整理番号:89<sup>12)</sup>

入寮時 14 名（小 6:1, 中 1:3, 中 2:6, 中 3:2, 中卒：2）

#### 第 1 冊

「1981.8.11 入校-11.3① T」

8.13～8.14

○サロマ湖へキャンプに行って来る。

（残留生で）

まだ皆にも紹介されていないままにあわただしくキャンプに出かけたのだが、やっぱり T はどうしても 1 人で淋しくなりがちなのが可哀想だった。おまけに僕は 13 日の晩に風邪を引いてしまったらしく、14 日の午前中はほとんど天幕の中、ボートに乗せてくれたりオホーツク海をずっと案内してくれた平本先生と斎藤先生にはただただ感謝のほかない。

僕がただひとつ気になったのは、T がヤスにずっと興味を持ち続けていて、それも海の中ではなくて、砂浜に上ってからのなんとなくひまな時間にはほとんどヤスを 1 人で持っては砂に突き刺していたこと～～、しかし、これは決して T 1 人だけではなくて、あと 4、5 人はヤスにしきりに興味を示していたし、そう感じることも自体が僕の偏見になってはいけない！ と気持ちを引きしめている。

とに角楽しかったなあ！ T よ！。

#### \*T 作文 1981.8.14

##### キャンプの事

13 日の午前、家庭学校から、サロマ湖にキャンプに行った。ついてすぐ天幕を張った。張り終ってしばらくしてご飯を食べた。午後は湖で水泳をした。途中で体が震えたのでたき火にあたった。13 日は二度水の中に入った。夕飯に肉と野菜を食べ、夜食は赤いきつねを食べた。夜、キャンプに来た人達と、たき火を囲んでキャンプファイヤーをやった。かく館ごとにし物を出し物をきめそれを他の館の人に見せた。キャンプファイヤーが終って花火がくばられた。僕はロケット花火を主にとった。十四日は水泳をしたりボートに乗ったりした。それからオホーツク海に行き波に足を入れたりした、波で流れてきた、こんぶに、小魚が生きたまま、ひっかかっていた。サロマ湖の海底に草がはえていたので泳ぎにくか

った。でもボートの場合は思ったよりすすいと進んでいった。小さな子などは、サロマ湖で魚をとって焼いて食べていた。貝をとって食べた人もいた。おいしそうに食べていたけれど、僕は食べる気がしない。天幕をかたずけるのを、手伝ったがなかなかたいへんだった。かたづけ終って、車が入ってこないでみんな何百メートルか歩いた。車についてた時、僕は、足のうらが痛くなった。車に乗って、家庭学校に行く途中後のせきを見ると3人が寝ていた。

## 8.16

○ 映画「連合艦隊」をみてる。

T も段々皆と話す様になり、北見までの往復の車中、時々何がおかしいのかくくっと笑い合ったりして心和むものがあった。

映画の内容については、48才の僕には何か戦争中の映画を見ている様な錯覚さを感じられて、微妙な感慨がひたひたと胸をつつんだのだが、5人の感想は1人1人如何にもからっとしていて、35才も違う年令のことをしみじみ考えない訳にはいかなかった。

5人の中では、Tが一番意気こんで日記を持って来た。

「僕ね、わきにはみ出して下にも書いたんだよ」

とにこにこしながら持って来ただけに、堂々とした戦争論は仲々の迫力だ。頭の良さがきらきら光っているし、背後に父親を感じさせる。

## \*T 作文 1981.8.16

「映画の感想」

日本人は、昔から頭が良かったが、どこかが欠けていると思う。何故かと言うと、開国後、日本は外国と遅れた、あらゆる物を輸入しそして、日清、日露戦争の時はもう強国と言われたが、欲がありすぎて、南国を占領しているうちに作戦が悪くて最後は負ける結果になってしまったことである。今も日本の車の性能が良いのは頭が良い証拠だと僕は思う。話は変って、人間は大昔から、争い続けてきたと思う。大昔は自分が生きてゆくために必要な食料を殺して食べただけだったが時代が変るにつれて自分の土地をほしいとゆう欲がわいて、村と村などで争い、武器を使うようになり初め、そのうち白兵戦に乗り物や弓矢などを使いだしさらに、矢に毒を塗ったり、鎧をつけたりし、強力な武装をして、そのうちに弓から鉄砲に変わり、船に武器をとりつけ飛行機を争いに使い、国内の争いから国と国の争いになり変わり、死者も昔の何十、何百、何千何万と増えてゆき、至極、危険な争いになっていき無惨な死にかたをするようになった今、普通の爆弾から原子力を使った爆弾に変わり、この恐ろしい戦争を映画を通じて、戦争を知らない子供達に教える事も必要である。又話は変って、第二次世界大戦の時の日本人は、お国のため、お国のためと、命をすてて自分の国を守るために最後は、たたかったのである。争いは、どっちかが負けなければ終らない。勝った方はいいが、負けた方は、土地を占領され、どれいあつかいされ、苦しい生活をしなければならなくなる。こんど第三次世界大戦がおきたら、全対（絶対一注）に、かく兵器を使い、今までの何倍もの死者をだす恐ろしい戦争となるだろう。そうなる前に、かく（核一注）をなくす運動に世界中の人間がさんかししなければならない。これからは平和とゆう事がたいせつだと僕は思う。ぜひ世界中の人間が平和をもとめなければならないと思う……。

## 8.17

一時帰省して行った組がいよいよ明日帰って来る。10人が帰省して行ったのが11日の朝、Tが来たのが11日の午後、明日からの14人の賑やかさを考えると、ちょっぴり不安もあるがやはり楽しみである。今日の皆の日記にこの「一週間の生活」について書いてもらったのだが、Tも一丁前に「一週間の反省」と

題をして書いているのは微笑ましい。

「食事の仕度の時など無駄話が多い。それをなくせばもっと速く、正確に、きれいに出来るのだと思います。」

細かな掃除の仕方も丹念に書いていて、今日の T の日記には僕の方が脱帽である。

#### \*T 作文 1981.8.17

##### 一週間の反省

この一週間、僕はここで、いろいろな仕事をしてきた。いままでやった事のない、草かりや草取り、掃除や食事の仕度など、そのなかにかまの使い方などを新しく僕は覚えた。だが、初めてなのでみんなよりもおそかった。もっと速くやれば最つと初く終っていたのと思った。食事の仕度の時など無駄話が多い。それをなくせば最つと速く、正確に、きれいに出来るのだと思うのです。掃除の時も、すみずみを、きちんと、はき、きれいに、ゴミを、ちり取りで取れば、ぞうきんにゴミが少ししかつかずにふけると思うそうすれば、ぞうきンを洗って、かわかしたとしてもあまりよごれなくて、長く使えると思います。それから、ほうきを使う時は、しずかにはけば、ほこりがたたないですむので時間がたって上からちりが下ってくる事がなくなると思います。あと、いすなどを、動かす時はなるべく、手でもち上げたほうが良いと思います。理由は、床にきずがつかないし、いすのあしにゴミがつかずにすむからであります。それとぞうきを使う時すみのほうきでとれなかったゴミをふきとる事が出来るので便利だと思います。今週は、僕の反省は仕事の事で、最つと頑張れば速く正確な仕事をやりたいとゆうことです。そして1日も速くこの生活になればと思います。これからも、頑張って仕事や勉強をしていきます。もう書く事ありませんのでこのへんで終らせませう。

#### 8.18

##### 一時帰省して行った生徒

続々帰って来る。

((整理番号 90) のみ未帰校)

続々と皆が帰って来て賑やかになった寮の中で、なんとなくものりだけが淋しそうに見えた…のだが、夜に日記を読んで、そのキラキラ光る感性にははっと胸をつかれている。

「平凡が非凡になる日が待ち遠しい」

T よ、

「家に帰ってる間は僕は自由なんですか？」

と結んでいる今日の言葉に僕は今は答え様もないが、これからじっくりと語り合っていかなければならない大きな命題がこの T の言葉には含まれていると受けとめているんだよ！

#### 8.22

今日は学校の大掃除をする。8月25日～26日の全国院長会議にそなえての学校内外の清掃が今日も続いたのだが、Tの真面目な仕事振りが今日も地味だが光っていた。

「朝と夕方に、笠間稲荷神社と書いてあるお守りに手を合わせました。」

首に下げているお守り、何かいたいたい気がするのは何故だろうか？。

#### 8.23

◎ 朗読会 (整理番号 80) 出場。

皆なが揃っての初めての礼拝堂での礼拝だった。T がどんな顔で座り続けていたか知る由もないが、日記が厳しく胸をうつ。

「僕だって、あの 7 人以上に、学び、全体的に成長し、短い期間で、家庭学校を、卒業し、立派な学生、又は社会人になり、回りの人にめいわくな事をしないで、自分の回りで、めいわくな行動をしているような人には、その人のために進んで注意してあげたいです。」

特に、僕だってという語勢が印象的だ。

\*T 作文 1981.8.23

今日、僕は初めての礼拝を、やりました。まず七人の、生徒が作文を読んで聞かせてくれました。七人は、家庭学校での生活の様子や帰省中の出来事などを、話してくれました。みんな、立派な文章でした。七人供、家庭学校で、いろいろな事を学び、体も、心も、成長した事でしょう。僕だって、あの七人以上に、学び、全体的に成長し、短い期間で家庭学校を、卒業し、立派な、学生、又は、社会人になり、回の人々に、めいわくな事をしないで、自分の回りで、めいわくな、行動をしているような人には、その人のために進んで注意してあげたいです。僕は、今まで、数々のいたずらなどを、していましたが、今になって、考えてみると、自分という人間が、つくずくいやになってしまいます。今は、悪い心と良い心を、いれかえて、卒業後、高等学校に入学しないとしたら、日本人として、日本の伝統を受けついで、伝統工芸の職人になりたいと思います。生まれて、初めてうたった、讃美歌ですが、むずかしいと思いましたが、うたいやすいでした。でもあんなにあるとは思っていませんでした。うたっている間でも歌になにか深い意味があるなと思いました。これを、考えたとしたら、やはり、何か、一つにまとまるような意味が出てくるのではないのでしょうか。礼拝の途中に、TV 番組の、大草原の小さな家とゆうのを思いました。あの番組は、よく教会が出てきて、番組の中の、日曜日は、いつも教会で、讃美歌を、うたったり、本を読んだりする場面がありました。

8.24

◎ 大きなダンボール送られて来る。

まだ中味は見えていないのだが、今日 1 日なんとなくぼつんと 1 人遊びしていた T が、それは嬉しそうに、にこにこしながら実と 2 人でダンボールを事務所から運んで来た顔の明かるかったのが嬉しかった。

(冬物の衣類、今迄使っていた学用品等)

今日の日記、

「時々、勉強に、一生懸命になった時の自分が好きです。そして少し昔の自分が好きです。」

その時の気持が痛い程理解出来るだけに、昔の T に戻す事の責任の重さをひしと受けとめての夜である。

8.28

○ 夜、誕生会。

僕は T の日記に深い衝撃を受けている。

「〜〜だから、妹が十才をすぎれば、我、一家は、何か異変が起るかぎり(起らないかぎり)一生、家族の、だれ一人として誕生会をやる事はないでしょう」

異母妹 N さん(49.4.9 生まれ)の誕生祝い、自分のこと、T の透徹した眼は大人のやることなすことをじっとすべて見すかしている様な気がして、その鋭い感受性に今更に舌を巻いてしまうのだ。

\*T 作文 1981.8.28

#### 自分の誕生日の思い出

僕の誕生日は、昭和四十三年\*月\*日、時間は不明。幼稚園の時、家族で誕生会をしてくれた、覚えがある。その時の事は、それしか分からず、あと、どのような事をしたのか、覚えていない。それからあとは、小学校の低学年の時、同じ組の、O君と、近所の友達の、I君、K君、その他、何人か、よんで、誕生会をした事を覚えている。その時は、ケーキと、オレンジジュース、すし、お菓子などを食べた。友達は、僕に、プラモデルなど、何個か、それと本や、学用品をくれました。又、小学校の中学年で、近所の友達をよんで、誕生会をしました。その時もやはり、プラモデルや、本や学用品などを、くれました。そして、やはり前とにたような物を食べました。あと、僕の誕生日は、友達をよんで、やった事はあまりありません。あとの誕生日は、母と妹と僕でやりました。その時は、プレゼントなどなく、ごちそうだけでした。ごちそうとはジュースに、すし、ケーキ、その他でした。僕の誕生会は十才で、終わりで、十一才の誕生会はやってくれませんで、僕は、なぜだかわかりません。それから、今まで、(一字空白一注)は妹の誕生会だけで、母父僕の、誕生日が来ても、誕生会をする事は無いでしょう。僕は、妹も、十才の誕生会で、十一才の誕生日には、誕生会をする事は無いだろうと思います。だから、妹が十才をすぎれば、我、一家は、何か異変が起こるかぎり、一生、家族の、だれ一人として誕生会をやる事はないでしょう。

#### 9.6

◎ 最後の礼拝に出席して、(整理番号 80)が元気に発って行った。

(整理番号 80)が去って行った感傷とは別に、僕は今日の T の日記に深く心うたれている。

「僕は自分でやると心から決めた事は昔からやっていた。だからこんな所に入ってしまった。だが、こんどは今までの逆の事を決心した。これも僕は、実現させたい。」(下線原文ママ)

並ではない 1 人の男の意志をじっと感じるのだ。

#### \*T 作文 1981.9.6

##### 礼拝堂で

まず、礼拝堂へ行く時、誰かが、ビニールハウスの所で、蛇がいたと言って、僕とあと二人以外全員野次馬のようだった。整列してから、先輩の(整理番号 80)さんが、卒業前のあいさつをした。礼拝堂で、讃美歌を唄い、聖書を読み、家庭学校の校長先生の話しが初まった。校長先生は、人を信じなさいと、僕達家庭学校の生徒に教えた。この話しは、僕達が、社会人になった時、やくに立つだろう。そして、(整理番号 80)さんが、社会人になった時、一年三ヶ月、家庭学校で、学んだ、信ずる事などが、やくに立ってほしい。(整理番号 80)さんが、立派な社会人になった時、僕も社会人として、日本のどこかで、元気に、一生懸命働らいていることだろう。僕はまだ、はっきり言って、信じる事が、どれ位、良い事か、全然、分からない。それが少しでも、分かった時、僕は、一段上に成長した事になる。こう、考えてしまうと、僕が、目標にした、一年半で、家庭学校を卒業するとゆう事は、無理のような気がする。だが、僕は、普通の中学生の、三倍以上の努力をしようと思う。僕は自分で遣ると心から、きめた事は昔から遣っていた。だからこんな所に入ってしまった。だが、こんどは今までの逆の事を決心した。これも僕は、実現させたい。礼拝堂の話しが、だいぶ、ずれてしまった。そして、だいぶ、自分の考えや気持ちが入ってしまった。

#### 9.8

今日の T の日記に考えさせられている。

「僕は、家庭学校で、普通の中学でやる、勉強より、おくれるのではないかとゆう不安がした。あと一つ、中学 2 年の勉強をしないで、中 1 から中 3 の勉強に入ったら、中 2 でならう勉強を、やらないで、ここを

卒業してしまうのではないだろうか。」

T の指摘は、能力別に分けられた家庭学級の学級編成の弱点を的確に指摘していて、その直感力の鋭さにたじたとっている。

#### 9.18

T は黙々と暮している。勉強も一生懸命にしているし、ひまさいあれば自分の部屋に居て、手紙を書いているか本を読んでいるかして、皆との間になんとか一線が引かれている感じ！。

皆が T を嫌っているとか、T が皆を拒否しているとかではなく、なんとなくどこかが違うのである。例えば、「お八つだぞ！」と僕がひと声叫ぶと皆わっと集まって来るのだが、T だけは決して走らない。ゆっくりと皆の後から歩いて来て、皆がもらい終った一番最後に、

「どうもありがと御座いました」

と頭を下げてもどって行くのである。それが少しも気取った様子を感じさせないのは T の品格だし、皆から白けた感じで見られないのは T がとても真面目だからだと思う

#### 9.19

今日の T のスケールの大きな日記に感動している。

「将来、絶対にアメリカやカナダ、フランス、イギリスに行ってみたい。もし万が一行けたらギリシアとスイス、中国にも行ってみたいと思う。これには金運に恵まれていないと、とっても出来そうにない事だと僕は思う。」

金運とは又、なんと古風な言葉を知っている事よ！ T！。

\*付箋付き

\*T 作文 1981.9.19

自分の夢

家庭学校に来て、初めて考えた夢は、一年半で復学する事だったのだ。今でもその考えは、全然変わらない。今僕は副島教室だが、いまに、藤田教室に上って、クラスで五位以上の成績を取り、そして北海道家庭学校を、卒業して、普通の中学校で勉強する事が夢だ。又生まれつき良い体を、ここでいっそう強くする事も、僕の一つの夢である。違う夢では、英語、仏語、独語などを覚えて、将来は、一人で、海外旅行をしてみたいと思う。地理を一生懸命勉強しているのはこのためである（歴史も）。そして、中学を卒業し、高等学校に入学しなければ、早いうちに、本州の中部地方辺りまで行って、大工でも、伝統工芸の職人になりたい。そして、日本アルプスの穂高岳や槍ヶ岳や白馬岳、又、北岳や荒川岳その他に、谷川岳や鳥海山、八甲田山、などいろいろな山に上りたい。日本の代表的な山を、全部上り終ったころ（夏山冬山、）外国のロッキ山脈やアルプス山脈を上れたら上ってみたい。将来、絶対にアメリカやカナダ、フランス、イギリス、に行ってみたい。もし万が一行けたらギリシアとスイス、中国にも行ってみたいと思う。これには、金運に恵まれてないと、とっても出来そうにない事だと僕は思う。最っとも最低でも、三十才以上生きていたい、最高なら何百才でもいいが、しわだらけのよばよばは嫌だ。死ぬまでに、一度でも二度でもいいから、宝石や、金、銀、白金を触ってみたい。生きてるうちに、絶対に日本の代表的な山を上り、北アメリカと、ヨーロッパの土を踏んでみたい。

#### 9.25

午後から酪農部のサイレーン応援に行ってきた。長いホークでの草積み、草をいっぱい積んだトラクター

に乗って大きく揺れながらの往復、サイロの中での草ふみ！そのひとつひとつに歓声をあげては遊んでいた皆の中で、Tの静かな笑いはたしかに異質だった。暗く沈んでいるという訳ではないのだが、小さく皆のふざけ合いに眼をやるだけのTの微笑…には、なんだか俗っぽい事をきっぱりと拒否する司祭の様な別の微笑があった様な気がしている。

\*T 作文 1981.9.25

今日の日記

学校で音楽の授業を遣ったが、ふえがうまくふけなかった。国語の宿題は遣ったがあまりよい感想ではなかった思う。作業班では、石上館が酪農部手伝をしました。だから園芸部が解散しました。トラクターに乗り、牧草をトラクターにつみサイロまで行きました。僕はサイロの中で草踏みを遣りました。出入口をしめてベルトコンベアーの所から出て行って寮中掃除を遣りに行きました。寮に帰ってから、まず食堂をはいて次に廊下をはいてそれ位した所でみんながトラクターに乗ってきました。夕方、友達三人に手紙を出しました。夕食の魚はおいしかったです。

10.6～10.7～10.8

研 修 旅 行 。

(日記と日程表貼付)

知床から尾袋沼、阿寒を廻っての3日間の旅、どこを見て歩いていてもめったにTの表情に笑いはなく、かと言って怒っている訳でもとりたてて淋しそうな表情でもなく、淡々とした表情で見て歩いていたTの3日間の旅だった。

◎際だって印象的だったのは、ガイドに指名されて1人1人が順々に歌をうたった時に、Tは、

「僕は、石川啄木という人の短歌をうたいます。」(下線原文ママ)

と、ゆっくり言うてから、

東 海 の 小 島 の 磯 の 白 砂 に

我 れ 泣 き ぬ れ て 蟹 と た わ む る

と、淡々とした抑揚で詠んだ事だった。

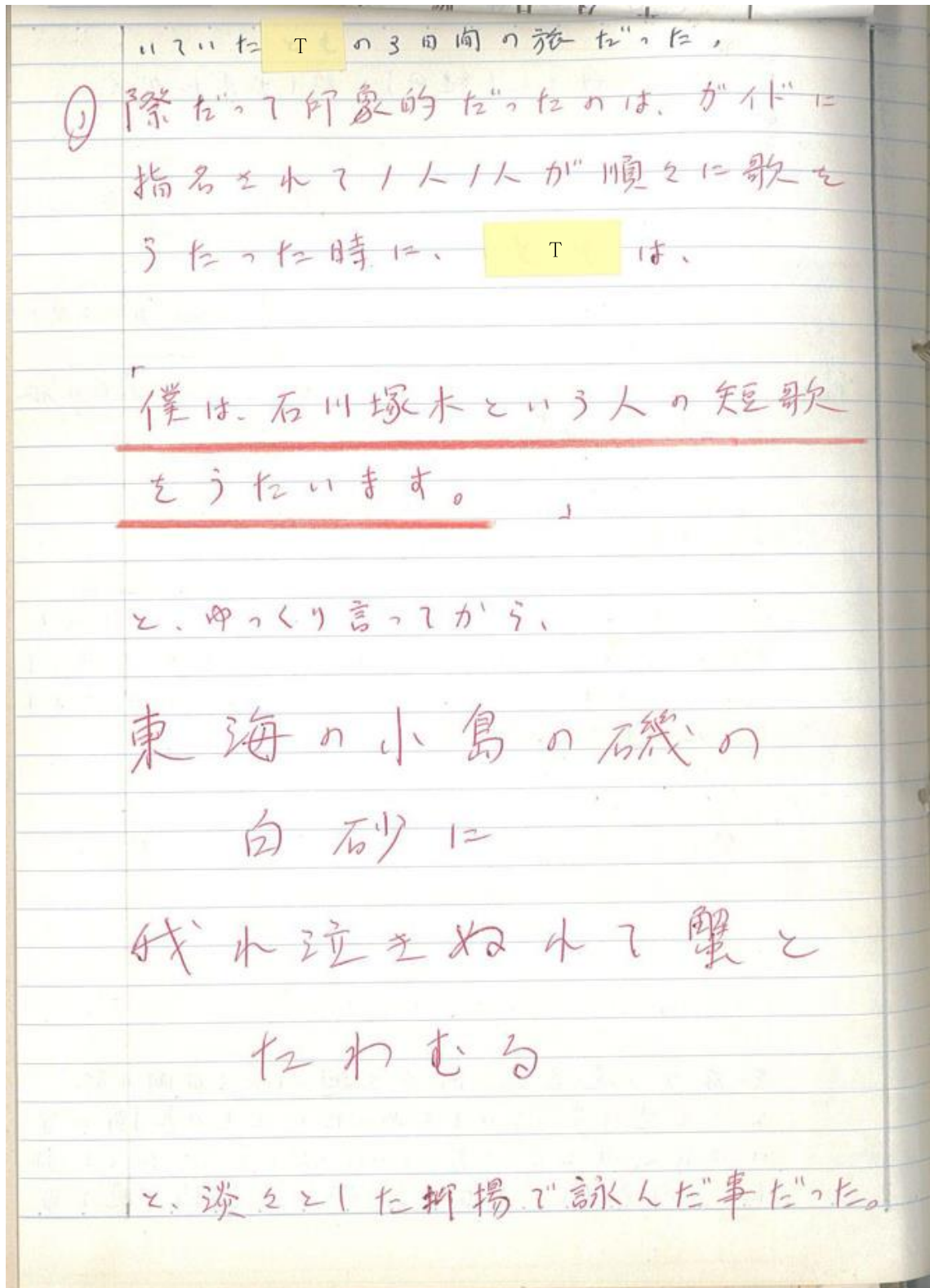


図9.寮生Tについての1981年10月6-8日の藤田日誌

10.15

◎ 誕生会 (整理番号 88,91)

ほとんど笑わない T が、柏葉寮の時だけにと白い歯を見せて微笑したのが嬉しかった。T をもつともつと笑わせること！ T をもつともつと怒らせること！~~~~



この2つが表裏一体として皆との暮らしの中に出てくる様になれば、Tは次の少年期に入ることになる！

10.25

「君は神を信じるか」

僕はもう今日のTの日記に圧倒されている。

**大した人間だなあ Tよ！（朱筆）**

◎ 来 信

同級生全部より。

\*T 作文 1981.10.25

「君は神を信じるか？」

僕の本心は神を信じないとゆうのが本当です。僕の信ずる宗教は日本の大乘仏教でもなく、大乘仏教の反対の自己のさとりを第一とする消極的、形式的な仏法です。キリスト教を信じない理由は、キリスト教とゆうのは、愛を根本主義として魂の救いを得ようとする物だからです。僕は昔から自分以外の人間は信じれなかったからです。又僕は人たよるのもたよられるのもあまり好きでなかったからです。

10.27

「君は人を信じられるか？ 君の一番信じている人は？」

「僕が心から信じられる人、それはT、自分自身です。」

「僕は昔から自分だけの単独行動をして来たため、他人と一緒に行動すると足手まといになって、しまうからである。そのため人にたよる事を嫌いである。ですから、愛を根本主義として魂の救いを得ようとするキリスト教もプロテスタントもカトリックもギリシャ正教も信じる事が出来ません。」

うーーーーん～～～～。

大変な男と暮している！ という重い実感。

◎ 家から小包。

\*T 作文 1981.10.27、付箋付き、用紙の下1cmの帯状に朱筆。

「自分は一番誰を信じられるか 君は人を信じれるか」

僕が心から信じられる人、それはT、自分自身です。何故かとうと、もちろん自分を左右するのはこの僕自身だし、良くするも悪くするも自分自身だからです。主な理由はこれです。それと細かい理由としては、自分は自分の意志でも出来るが他人と自分では意志のくい違いがあるから、それが、何よりの欠点である。又僕は昔から自分だけの単独行動をして来たため、他人と一緒に行動すると足手まといとなって、しまうからである。そのため人にたよる事を嫌いである。ですから、愛を根本主義として魂の救いを得ようとする、キリスト教もプロテスタントもカトリックもギリシア正教も信じる事が出来ません。だからこうなると今の僕の心じれるのは大乘仏教でもなくラマ教でもなくイスラム教やヒンズー教でもなくやはり小乗仏教だけです。とゆう事になってしまえば一番信じる人は最初に書いた自分だけとゆう事になります。とゆう事になると「君は人を信じれるか」とゆう題の方はもちろん、自分以外いないから、僕はこの世の人間は一人しか信じられません。もし万が一少し信じているとしたら両親や祖父母なんかよりも、友達であります。何故両親を信じれないかとうと、時々やるけんかの中で、僕が寝てると思って、父は「あの馬鹿」と言うし母は、それに合わせて話しをする事があるからである。僕は自分の事を馬鹿だと思っているから別に気にしないが陰口を言わ

れるのが嫌いだからとても嫌で嫌いです。

10.31

「自分がみじめに見える時」

「自分がみじめに見える時とは、僕にとっては、マァ悩み事などを、山や川や海などに行って、かき消している時の自分が惨めに思えます。」

「何とか自分に人を信じる事が出来たらなと思う事が屡屡（しばしば）あります。」

「自分が堂々と見える時」

「あまりないが ① 試験中にカンニングをしたことがない事 ② 友達との約束は忠実に守る事。」

表面おとなしく見える T だが、水面下の T は大変に誇り高く生きている。

第 2 冊

「1981.11.4-1982.2.5 \*」\*テープ貼付。テープの下は、「T」の字か（注）

11.21

「言いたい事」

「石上館は何故夜おそくまで電気をつけて勉強させてくれないのですか」（下線原文ママ）

には眼をぱちぱちさせてびっくりしている。別に勉強するな！とも言った事はないのだが、夜 6 時半から 7 時半までの自習時間でお互いに充分じゃないの〜といった了解と感じがあって今迄来たのだが、この様に真正面から問われると何んだか僕が禁止して来た様な後ろめたい気持ちになってしまう。夜 9 時消灯は家庭学校のきまり、唯、時々寮によって補習させているという話は時々耳にする。T がこの様に勉強したいという意志で問いかけて来た以上それに応えるべきだなあ〜と思索しつつ、さてどうしたらいいかなあ〜？？〜と時間と、電気と、灯油と、皆の反応を様々に思いめぐらしての夜ではある。

11.23

◎ 今日から作業班の発表始まる。

（そ菜部、園芸部、果樹部）

「園芸部の 1 年の仕事」という表を書くのを T に任せたのが 3 日前、丹念に仕上げていよいよそれを今日全校生徒と先生方の見守る前で発表したのだが、はっきりした声で、物おじしない態度で本当に堂々とした発表だったぞ！ T！。

○今夜の自主勉（T、整理番号 88,90）

1.11

枯れ木を取って来た後は、寮前のスロープで楽しそうにスキーにのり続けていた 13 人の 1 日、

Y の日記

「T 君は、中 1 なのに僕よりひょいと楽々太い木をかつぐので参ってしまいます。」

たしかに T は中 1 としては見事な体力を見せ始めて、この冬が終っての春になったら見事な体格になるだろう！と頷いている。

遂々来ることのなかった父さんと母さん（継母）、夏に会ったらびっくりしますよ！  
もしかしたら、精神的にもあなた方を大きく越しているかも知れませんよ！。

＊T 作文 1982.1.11

「今日の仕事で考えた事」

今日の午前中の作業は、僕は平和山登山道を上った辺りで枯れた白樺などを切って石上館の横まで持って来ました。仕事で考えた事は（木を切っている時）この木は本当に枯れているだろうかという事です。何故そんな事を考えたかというと、僕はまだ少ししか、枯れ木の区別が出来無いからです。僕がその時切っていた木は白樺でした。叩くと中でビーンと音がしました。それからもう一つその木を切っている時に考えました。それは木が自分の思った方角に倒れてくれるかという事です。何故そんな事を考えたかというと僕は木を切り倒した事がまだ数回だけで下手だったからです。僕はやっと少し木の切り方が分かったけれど、まだあんまりうまくないので少し位練習しようと思います。次に考えた事は木を運んでいる時に、この木はすごく枯れているんだなという事です。それは直径が 20 cm位で長さが 2m以上の白樺だったけれど、僕は重く感じなかったからです。でも石上館の畑の辺りまで来るとだんだん肩が痛くなってきて一回肩から木をおろして、少ししてからもう一度かつぎ直して、寮の横に持って行って、又山に行きました。そうして又枯れ木を捜して切り初めました。今度は白樺では無くて僕の知らない木でした。その木にはつるが巻きついていて半分位を切るとそのつるを引っ張って木を倒しました。木っている途中や運んでいる途中で考えた事も、白樺を切り倒した事と同じ考えでした。

1.19

新しい作業班が始まって 2 日目、T と(整理番号 81)のコンビが平和山中腹からグランドまで木を橇で運んでいる。饒舌な(整理番号 81)、無口な T、骨皮でやせっぽちの(整理番号 81)、どっしりとした体格の T、何からかにまで対照的な 2 人だが不思議にうまが合うらしく、せつせと木を積んでは走り下り、登りの時は前を T がロープで引っ張り、後は(整理番号 81)がにこにこしながら押していく風景に目頭が熱くなってしまったのは、2 人に共通している実父継母のあまり楽しい家庭ではないことを胸に思い浮かべたからだったかも知れない。

1.21

午後から職員会となり、寮に残った皆には、今迄読んだ本からの読書感想文を書いてもらう。

○次郎物語

「小さい時から苦勞をしたり我慢をしたりした次郎の様に僕もそうゆう生き方をやってみたいと思いました。」（下線原文ママ）

少ししか読まない本を他の子から応援してもらったり、教えてもらったりして書いた感想文が多い中で、次郎の生き方の中に自分の生き方を二重映しにさせながら読み切っている T の感想文は、群を抜いた迫力で身につまされるものがある。

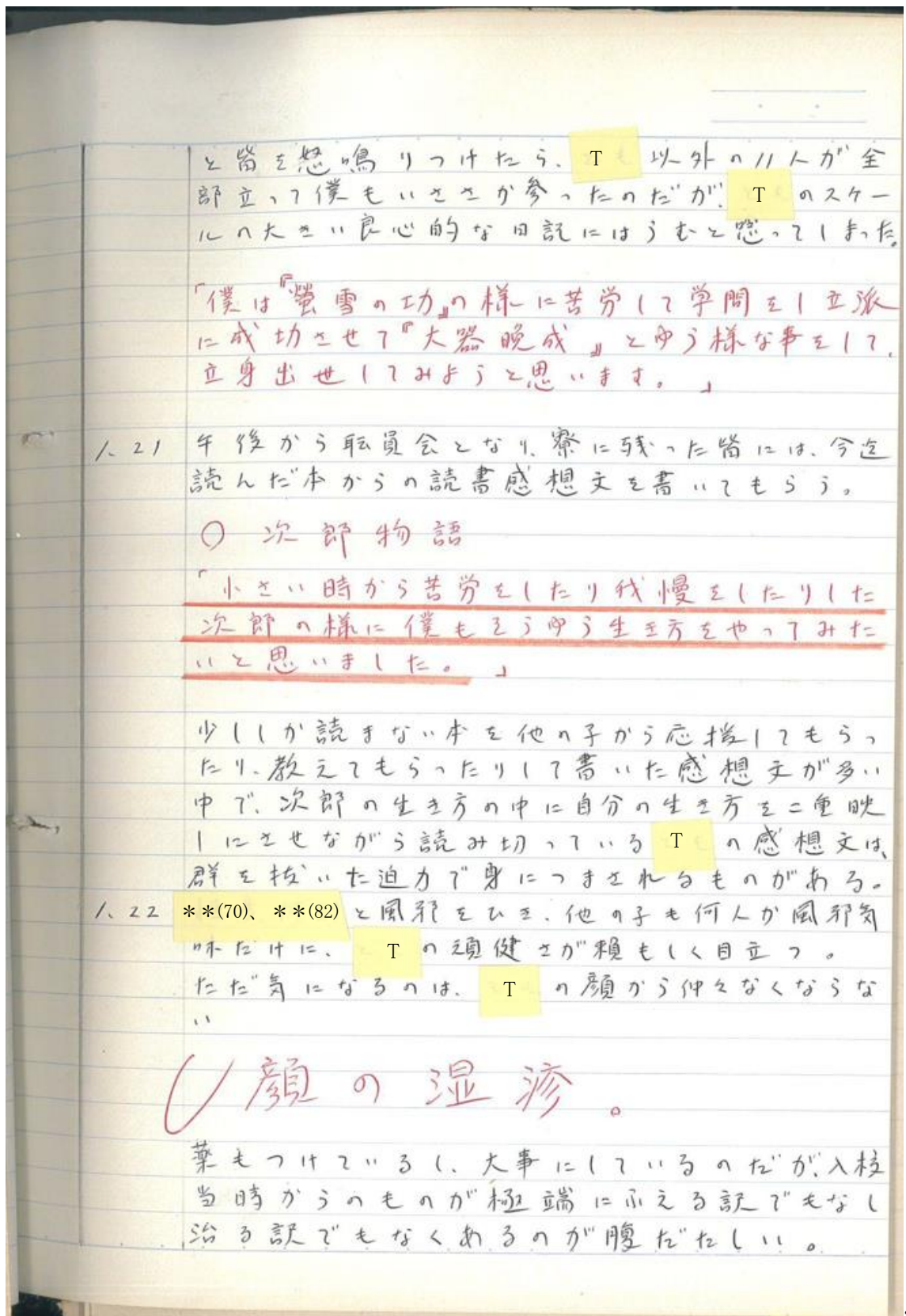


図 10.寮生 T についての 1982 年 1 月 21 日の藤田日誌

前日の日誌にも着目しよう。『(寮生の名—河原注)をビッコと言ったことのある者立て!』と皆を怒鳴りつけた」とある。その該当者ではなく、むしろ、この種の日常の身近から離れ、「螢雪の功」を思う T について、藤田は「スケールの大きい良心的な日記にはうむと唸ってしまった」と記す。そのような T が「次郎物語」に共感している。

\*T 作文 1982.1.21

読書感想文「次郎物語を読んで」

僕は去年の七月十日に札幌中央鑑別所に入り、約一ヶ月の間に色々な本を読みました。その中に、五日間かかって読んだ次郎(ママ)物語りとゆうのがあります。次郎物語は下村湖人とゆう人が書いた第一部から第五部までの自伝的長編です。でも次郎物語は作者の死によって未完成のままで終わってしまいました。物語の主人公は次郎といい、次郎は生まれた時は猿みたいな顔をしていておばあさんや母は「なんて子憎らしい顔をしているんだろう」と思いました。又次郎の兄が二人居、その時は母は乳が出なかったのである田舎の学校の用務員室に住んで居る、お兵という母にあずけられて育ちました。やがて次郎が里子から帰って来た時は、本田家が嫌で嫌で毛嫌いしました。そして毎日毎日ひねくれてばかりいました。そしておばあさんは母さんのお民が居無い時に、食べ物で次郎を幾もいじめています。そんなある日次郎は何故かの部屋にお菓子を入れてある箱を見つけて、その箱を何処かにたたきつけて踏んだりけったりしました。又その他には兄の小学校の教科書を便所の中に投げたりしました。そんな様の次郎は家族に幾もし返しばかりしていました。やがて次郎も小学校に入学して、六年生の演説を聞いている時に、みんなびくびくして下を向いているのに次郎だけは演説をしている人の目をにらみつけて居ました。それを見た六年生の男は感にさわって怒り次郎と言い合いをしたり殴り合いをしたりしました。そして何年かたって次郎が小学三年生頃に、お兵の引越しの話しや学校の建て直しなどの話しがあり、次郎はお兵達が引越した後にお浜の家の土台の上に座り今までの事を思い出していました。その頃の次郎は小さいながらも勇気と腕力があり、何時もけんかをしたりしていました。そんなある日次郎と仲間達が遊んでいる時に、誰かが次郎の兄がやられているとか言って来ました。次郎はいくら兄が憎らしくとも兄弟だったのかは知りませんが、兄を助けに行きました。そして川に落ちたりしてどろだらけになって夕方遅く帰って来て叱られるかと思ったけど昼間あった事を兄が全部母達に話していたので、次郎は反対にほめられました。又ある日次郎の弟だったか兄だったかが、父「しゅんすけ」の大事にしているソロバンを壊してしまいました。そして兄弟三人がある部屋に呼ばれてソロバンの事を聞きましたがソロバンを壊したとは誰も言いませんでした。そして母は三人にある話しをしてから次郎をうたがいました。次郎は人の罪を自分がかぶろうと決心しました。次郎は叱られ風呂場の所に居ました。とその時に戸がカタカタ音をたてて兄弟の一人が入って来て自分がソロバンを壊した事を言いましたが、次郎は秘密にさせといて最後まで兄弟の罪をかぶりました。僕はこの次郎の成長した姿が好きです。それから次郎は母を失ないました。葬式の事にはお浜も来て何年ぶりの再会をしました。それからの次郎はまるっきり性格が変わり本当にすごい成長をしたなと思いました。小さい時から苦勞をしたり我慢をしたりした次郎の様に僕もそうゆう生き方をやってみたいと思いました。次郎物語は良い本でした。

1.28

T と H をそ菜部にしてから、あの饒舌で仕事半分、喧嘩半分の H の仕事振りが少しづつ変わって来た。

○ H の日記

「僕は、T 君と仕事をする様になってから、なんだか仕事をする様になりました。だから、これからも T 君と一緒に仕事をして行きたいです。」

黙々と仕事を続ける T の人柄が(整理番号 81)を大きく変え始めている。

1.29

今日も黙々と暮しての 1 日、別にむつつりしているとかぶすつとしているとかではなくて、T の場合はなんとなくその人柄が「黙々として」という表現に似合っているという意味なのだが、別の意味では、重いと

か暗いとかの表現にも通じるだけに、一緒に暮すにはやっぱり気重いなあ～～～ ～～～ ～～～  
～～～。

#### 4. 中期日誌における藤田の寮生理解の諸様相とその特質

藤田の中期に属する日誌から 3 名の寮生についての日誌をとり上げた。その日誌についても、時系列に沿った抄録である。その記述の選択については、「二十年のくぎり」（1983 年）の藤田の振り返りを認識の視点とした。そのかぎりにおいて、どのような特質が見出されるか、以下に指摘したい。

##### (1) 理解する試み

日誌作成の基本的な趣旨について、すでにふれたように、「一人一人の少年について自分の眼で見たことを、家内の眼に触れたもの、他の先生の何気ない言葉の数々に含まれているその少年の学校での、畑での得手不得手の姿態、言葉、明暗の表情、喜怒の笑声、怒声の数々を、夜になってからじっと思い出しは書き続けました」（「二十年のくぎりに」）と藤田が振り返っていたことを想起しよう。この点についてここで補足する。

同じ文書の中で、藤田は、「自分の眼で見たこと」を中心に記述することが、ひとつの重要な選択であったことを伝えている。別の方向もあった。「様々な項目を作り、その一つ一つに○×をつけていく方法をやってみましたし、主要な項目をあげて五段階評価する甚だ数字的なこともやってみました。学期毎の成績評価はそれでいいとしても、日常生活記録としてはいずれも無味乾燥であるばかりではなく、一人の少年の短所弱点を枝葉末節をあげつらって行くだけの攻撃記録又は事件記録に終始する危惧を感じてやめました」。

ここには、用意された「項目」による評価法のことふれられている。事実、家庭学校において職員間で共有された評価様式があった。それによって、寮生のその時々状況を藤田は把握している。その所定の様式には、少なくとも次の 3 種類のものがある。

1) 生徒自身が記述するものとして、学校で共有されている所定の様式（B5）。自由記述（縦 19 字×横 16 字）の原稿欄と共に、「記録」として、「挨拶」（良・悪）、「返事」（良・悪）、「報告」（良・悪）、「むくれ」（有・無）、「けんか」（有・無）、「破損」（有・無）、「管理」（した・しない・有・無）、「健康状態」（良・ふつう・（どこが））、「通院」（有・無・（ ））、「違反行為」（有・無・（ ））のチェック欄がある。本論文に掲載する画像資料（図 5、図 7）参照。

2) 寮長が作成するものとして、学校で共有されている、寮ごとに寮生全員の状況を記載した B4 一枚の学期ごとの所定の「成績査定表」。「場面」として、「寮生活」「学科」「作業」と区分され、「基本的生活習慣」「情緒の安定」「正直」「明朗性・幸福感」「安定感」「判断力・反省」「自主性」「夜尿回数」「無外回数」「賞」18 項目が、「寮生活」の指標とされる。「意欲」「落ち着き」「学用品の取り扱い」「態度」「学科の評価」「学力の程度」「賞」など 7 項目が「学科」の指標とされる。「意欲」「持続性」「態度」「道具の使用管理」「能率」「賞」など 6 項目が「作業」の指標とされる。これらの諸指標についての 5 段階評価を踏まえて、3 場面それぞれについて、寮生ごとに 20 字前後の「概評」が記載される。

3) 寮長が作成し、児童相談所に提出する「児童福祉施設入所児調査票」（B4 サイズ 1 枚）。「施設入所の理由」「保護者」「現住所」について、それぞれ 1、2 行の記載欄とともに、「入所後保護者について知り得た事項」、「学校関係」（就学状況、学業に対する態度、学科の好悪、成績その他）、「身体状況」（健康状態、羅病状況、身体的欠陥、その他）、「性格行動面の特徴」「入所後良くなったと思われる点」「入所後指導上特に困難を感じている点」「本児の将来の希望等」「施設としての本児に対する意見」「児相所見」などの枠が

設けられ、3～8行程度記述できるようになっている。

こうした記載様式のうち、藤田が記載する2) 3)のうち、一人一人についての記述量が多いの  
は、3)である。本稿でとり上げたM寮生の「性格行動面の特徴」について、藤田は「誰とでもすぐ仲良し  
になり、自分から他児と言ひ争ったり喧嘩したりすることはないものの」とした上で、「珍な」という表記  
とともに、行動特徴が要約的に記述されている。こうした3つの様式に見出されるのは、可能なかぎり主  
観性を排除することが意図された客観的な認識である。類型化した認識が求められている。職員間あるい  
は、児童相談所との間で共通認識できる説明を主眼とするものであろう。けれども、他方で「公的な文とい  
うことになる」と、この様にしか書けないなあ～と頭を書きながら」と藤田は、3)について日誌に記してい  
た（児相宛中間報告について、M日誌1980,10.20）。

こうした所定の方式の意義を藤田自身認めつつも、それとは別に、日誌作成によって、藤田がより積極的  
に選びとっている思いは、一言でいえば、理解することである。一人一人の生徒をどう理解できるか、とい  
う課題の意識である<sup>13)</sup>。その場合、次の特徴が示されていた。第一に、内面について。生徒たちの外面的  
行動がどうあるか、という点もちろん重要である。観察のみでは十分ではない、という意識が藤田にはあ  
る。谷校長のことでいえば、「内側」にしか取っ手がない、一人一人の内面の「心」をどう理解するか、  
という点も、同等に、あるいはそれ以上に重要である、と藤田は捉える。寮生たちに課した毎日の「作文」  
は、その問題関心に根ざしている。第二に、個別の事例に即すこと。一人一人に即すということは、その一  
人の寮生についての半年、一年、あるいは数年についての総括であるよりは、その一人一人の日々の個別の  
場面において、どうであったか、を理解することを徹底すること。その場合に出来事の時間的な前後の関係を  
意識して、どのような一連の足跡を示しているかを理解する<sup>14)</sup>。第三に、共同生活者としての藤田自身  
の眼差しをふまえた理解であること。それは、「項目」によってではなく、藤田の認識主観によって構成さ  
れた事実の数々である。よって、外的対象そのものが「客観的」に記述されているのではない。対象にむけ  
た、あくまでも藤田とのかかわり、あるいは寮婦セツ子夫人とのかかわりを基本として、しかも、対象の様  
相が「自分の眼で見たこと」に依拠して記述されている。寮生一人一人を理解するという課題は、藤田の場  
合には、こうした他者としての距離の感覚を踏まえた行為の特質を示していた。

## (2) 対話的なコミュニケーションの実践

他者感覚とともに、一人一人の行動と内面の心の理解を通じて、藤田が意識的、無意識的に試みているの  
は何か。谷校長はインフォーマルな場で「対話」の機会があることが望ましいと述べていた。この点につい  
て藤田の場合、3つのことに注意したい。

第一に、問いかけと応答があること。

生徒たちが実際生活で示す言動、行動、態度、表情、そして作文に対して、藤田が、自身の言動、行動、態  
度、表情そして日誌によって問いかけ、あるいは肯定、否定という方向で応答している。対面でむき合っ  
て語りかけるような「…よ！」という呼びかけの文体も含まれる。場合によっては、仮説的にこうではない  
か、と問いかけ、あるいは応答している。他方、寮生は言動、行動、態度、表情そして作文によって藤田に  
対して問いかけ、あるいは応答している。こうした双方向のやりとりが日誌、及び作文を通じて部分的に明  
らかにされている。その点が、藤田の日誌に接して、とりわけ印象づけられる特質である。この点でも――  
第三者の読み手を意識した説明的記述とともに――、藤田の日誌は独白的なものから離れている。以下、  
あらためて検証しよう。

・「明日は母の日なのだが、今日の M の優しい作文にはうたれている。

「僕は、お母さんがとても好きです。そして、お休みなので、お母さんは、どこかに行っているでしょうね。」

M の優しい気持は、きっと優しい母さんと父さんからはぐくまれたと思うだけに、いつかお会いしたいと思っているんだよ M！」(M1975.5.12)

・「今日の皆の日記に、「君は、10 年後の夏をどの様にすごしているだろうか」と題をして、12 人 1 人 1 人の青春論をじっと聴き続けての夜、M の文にも圧倒され続けたのだが、結びには思わず顔がほころんでしまった。

「そして、子供も生れているかも知れません。10 年後でそういう意味かも知れませんね 終り」  
たしかに、そういう意味なんだなあ～～。」(M1979.8.20)

生徒の応答に対して、藤田は共感し、呼びかけ、同意している。

Y :

・「用務員のおじさんかあ～言い得て妙な表現だなあ～Y よ。ぴったりだしなあ！アハハ!。」  
(Y1981.7.30)

・「鋏を 1 本折ったことも年月の中に埋もれてしまうよ～。」(Y1981.11.6)

・「昨日は成績査定会、明日はその成績発表と始業式、そんな中で今日の Y の日記に少しがっかりしている。

「何んとなく、他の先生方に良い見られ方をしていないと思うし、学習もあまり上がっていないし、作業も軽部先生に良く見られていないと思うし、寮生活でも良くやっている訳でもないし、やっぱりもらう事は出きないでしょうー。」

馬鹿ったれ！そんな本心でもない投げやりな事を口に出すな！Y。」(Y1982.1.14)

生徒の意見に対して、藤田はある時には朗らかな同意を示し、また時にはおおらかな共感的な理解のことはをかけ、そして、よく見られているかどうか気にする姿勢に対し否定し、叱責している。

T :

・「今日の皆の日記に「一週間の生活」について書いてもらったのだが、T も一丁前に「一週間の反省」と題をして書いているのは微笑ましい。

「食事の仕度の時など無駄話が多い。それをなくせばもっと速く、正確に、きれいに出来るのだと思います。」

細かな掃除の仕方も丹念に書いていて、今日の T の日記には僕の方が脱帽である」(T1981.8.17)。

生徒の意見を引用し、たしかにと同意している。

・「続々と皆が帰って来て賑やかになった寮の中で、なんとなく T だけが淋しそうに見えた…のだが、夜に日記を読んで、そのキラキラ光る感性にははっと胸をつかれている。

「平凡が非凡になる日が待ち遠しい」



T よ、

「家に帰ってる間は僕は自由なんですか？」

と結んでいる今日の言葉に僕は今は答え様もないが、これからじっくりと語り合っていかなければならない大きな命題がこの T の言葉には含まれていると受けとめているんだよ！」(T1981.8.18)

生徒の意見に対して藤田は重たい問いかけとしてうけとめている。一般化していえば、強制と自由が人間形成の二つの契機にかかわる問題として藤田は意識している。

・「朝と夕方に、笠間稲荷神社と書いてあるお守りに手を合わせました。」

首に下げているお守り、何かいたいたい気がするのは何故だろうか？」(T1981.8.22)

寮生 T の入学前の来歴（地域社会に衝撃を与えた事案）に対する認識をふまえて、藤田は「何故」かと問いかけている。

・「新しい作業班が始まって2日目、T と H のコンビが平和山中腹からグランドまで木を橇で運んでいる。饒舌な H、無口な T、骨皮でやせっぽちの H、どっしりとした体格の T、何からかにまで対照的な2人だが不思議にうまが合うらしく、せつせと木を積んでは走り下り、登りの時は前を T がロープで引っ張り、後は H がにこにこしながら押していく風景に目頭が熱くなってしまったのは、2人に共通している実父継母のあまり楽しい家庭ではないことを胸に思い浮かべたからだったかも知れない。(T1982.1.19)

生徒が育った家庭境遇に想いを寄せながらの、藤田の推測するような問いが示されている。その問いに応答するかのように、T は「次郎物語を読んで」（1982.1.21）という感想文を書いて、藤田に答えている。

第二に、主題が双方において意識されていること。どう卒業できるかという主題、すなわち、午前は学業、午後は作業班活動、そして寮生活にどう取り組み、「流汗悟道」といえる理念を実現できる資質能力を最小限に身につけることができるか、という主題が、藤田においても、寮生においても、そして他の寮長も、他の寮生も、根底において共有されている。その主題は、端的には藤田によって設定された作文の題目によって凝縮されている。それを単純化して言えば、現在、及びこれからの人生において、両親、家庭を大切にしながら、働き手としてどうよく生きるか、という問いに収斂する。

M :

・今日の皆の日記に「男は何故働くのか」と題をしたのだが、11 人一人一人の男論にはっと学んでいる。小さな小さな体躯の M は、

「力が、大きいから仕事が、できるわけなんかありません。小さくても、働けるのです。小さいこそ、働いて、大きくなるわけなのです」

と凛々として書いて、僕は何かこう電気が走る様な深い感動を受けたのだった」(M1979.4.19)

・「今日の皆の日記に「今一番考えていること」と題をしたのだが、M の文にはうーむと深く感じ入っている。

「僕は、まず始めに帰省に帰ることです。そしてお母さんと、お父さんに会って来る事

が大事なのです。」

大事なのですという言葉が実にいいなあ M よ！」(M1979.5.26)

Y :

・「今日の日記『自分という男』

「何をしても、何をわるいことをしても、自分は悪くないんだ！と思いこんでしまう、ということは、僕の最大の欠点だと思います。」

今までの自分は悪い泥沼に落ちていたと思えよ！Y。僕が今日の題を皆にだした真意はな。そんな反省文を読むためではなく、長短含めての自分をしっかりと見つめつつ、将来をどの様に生きていくかの男らしさをまず見つけることを期待したからなんだよ！Y (Y1981.3.19)

・「誕生会。

49 才の誕生日を祝ってもらった夜に、Y の日記を読んでなんともいえない気持ちになっている。

「僕はまともに誕生会をしてくれたというと、小学校 2 年生までで、それ以後は家出していたので、1 回もしてもらえませんでした。これからは、こっちから、父や母の誕生日を、いわってあげたいと思います。」(下線原文ママ)

こっちから父さんと継母の誕生日を祝ってあげたいという心意気！に自立への胎動を感じるのだ」(Y1981.8.28)。

T :

・「朗 読 会 (整理番号 80) 出場。

皆なが揃っての初めての礼拝堂での礼拝だった。T がどんな顔で座り続けていたか知る由もないが、日記が厳しく胸をうつ。

「僕だって、あの 7 人以上に、学び、全体的に成長し、短かい期間で、家庭学校を、卒業し、立派な学生、又は社会人になり、回りの人にめいわくな事をしないで、自分の回りで、めいわくな行動をしているような人には、その人のために進んで注意してあげたいです。」

特に、僕だってという語勢が印象的だ。」(T1981.8.23)

・「今日の日記、

「時々、勉強に、一生懸命になった時の自分が好きです。そして少し昔の自分が好きです。」

その時の気持ちが痛い程理解出来るだけに、昔の T に戻す事の責任の重さをひしと受けとめての夜である」(T1981.8.24)。

・「僕は今日の T の日記に深く心うたれている。

「僕は自分でやると心から決めた事は昔からやっていた。だからこんな所に入ってしまった。だが、こんどは今までの逆の事を決心した。これも僕は、実現させたい。」(下線原文ママ)

並ではない 1 人の男の意志をじっと感じるのだ。」(T1981.9.6)

このように、M、T、Y それぞれが用いたことば — 「大事なのです」「父や母の誕生日を、いわってあげたい」「僕だって」 — のなかに、人生に対する意志的な姿勢を見出し、あるいはその種のことばの欠如を指摘し、藤田は寮生それぞれにむき合っている。

第三に、対等性が図られていること。寮長—生徒という制度的関係において圧倒的な優位であるのは、もちろん寮長藤田の側である。その立場から、生徒に対してその行動を叱責し、場合によっては罰することもある。そのような場合についても、藤田は時に反省とともに日誌で記述している。親代わりの役割を担う寮長としての振る舞いでもあるだろう。けれども、あるいは、まさにそれゆえに、生徒の心的態度、姿勢に対して、「深い感動」「素朴な感動」「見直し」などの表現でみずからの立場の優位性を否定する、あるいはそれを保留するような、尊敬する思いを抱く場合、そして働き手として同志的な絆を感じずる場合も、少なくはない。生徒が、さまざまな場面で、とりわけ作業の場面、校長講話に対するうけとめなどで示す姿勢、行動に対してである。対等性というよりも、見上げる場合さえある。

M :

・「小さくても、働けるのです。小さいこそ、働いて、大きくなるわけなのです」

と凜々として書いて、僕は何かこう電気が走る様な深い感動を受けたのだった。」(M1978.4.29)

・「やっぱり平和さんはいいね先生！

留岡先生待っているんだよね せんせ！」

と僕の顔を見上げる様にして話しかけ、いい事言うなあ〜と、47 才うなるばかりだった。」(M1979.10.5)

・「黙々とサイロの中をふみ続けていた M の姿には、なんともいえない真摯なものが感じられて、熱い思いが胸にこみ上げて来たのだった」(M1980.6.2)。

Y :

・「ハウスに積った雪を落したり、午後からは 30 度 c にまで上った温床にトマト、ナスビ、キャベツ、ピーマン、ナンバン、シシトウを蒔いたのだが、Y のこつこつした真面目な仕事ぶりには心嬉しくなっている。今あんでいるバックネットあみでも、Y は皆のわいわい騒いでいる中から 2 m 位離れて 1 人で黙々と編み続け、それでいて顔にはとてもいい笑いがあって、いいものを持っているなあ〜とじっとその清冽といってもいい顔に見とれたのだった」(Y1981.3.16)。

・「午後からハウスの中でトマトとスイカのポットへの移植をしたのだが、38 度にも上っているハウスの中はもう暑くて暑くて大変、そんな中で暑さにたいかねたか Y、

「先生、短パンで仕事していいですか〜」

と聞いてから、短パン一丁になってにこにこしながら仕事をしていたのが如何にも楽しかった。Y には白い短パンがよく似合う！」(Y1981.4.16)

T :

・「今日の T の日記に考えさせられている。

「僕は、家庭学校で、普通の中学でやる、勉強より、おくれるのではないかとゆう不安がした。あと一つ、中学 2 年の勉強をしないで、中 1 から中 3 の勉強に入ったら、中 2 でならう勉強を、やらないで、ここを卒業してしまうのではないだろうか。」

T の指摘は、能力別に分けられた家庭学級の学級編成の弱点を的確に指摘していて、その直感力の鋭さにたじたとっている」(T1981.9.8)。

・「午後から酪農部のサイレージ応援に行って来た。長いホークでの草積み、草をいっぱい積んだトラクターに乗って大きく揺れながらの往復、サイロの中での草ふみ！そのひとつひとつに歓声をあげて

は遊んでいた皆の中で、T の静かな笑いはたしかに異質だった。暗く沈んでいるという訳ではないのだが、小さく皆のふざけ合いに眼をやるだけの T の微笑……には、なんだか俗っぽい事をきっぱりと拒否する司祭の様な別の微笑があった様な気がしている。」(T1981.9.25)

「深い感動」、「真摯なもの」を感じさせる M、「清冽ともいっていい顔」を感じさせる Y、「直感力の鋭さ」、「司祭の様な」を感じさせる T、といった 3 名それぞれに対する藤田の応答には、みずからの上位性を打ち消す敬意の念が示されている。

以上のような諸傾向（問答、主題、対等性）が藤田の生徒に対する日々の実践に示しているとすれば、その実践に示されている相互行為は、－ 藤田自身はもちろんその表現を用いてはいないが － 対話を成り立たせる諸要素を含む対話的コミュニケーションといってよい。谷校長が期待していたものといってよい。本稿でとり上げた 3 名について、つねにこの種のコミュニケーションで一貫していた、というわけではない。対話的であるような関係行為を途絶する可能性のある一方的な行為場面も、もちろんあった。「ゲンコツ 3 発」(M.1978.12.4)「ピンタ 2、3 発」(Y1981.4.10) に行った記述も見出される。こうした例は、決して日常態ではない。親としての立場を堅持するという点を考慮すれば偶発的とはいえないかもしれない。けれども、頻度からすれば、明らかに例外的である。対話的なコミュニケーションは、藤田の日々の実践を規定していたといってよい。藤田の日誌は、とりわけ中期に属する日誌は、－ 後期日誌と対比して － そのような諸傾向を顕著に示している。

### (3) 対話的コミュニケーションが示す諸様相

このような相互行為が持続することを通じて、中期日誌が結果的に明らかにしているのは、何か。「少年の学校での、畑での得手不得手の姿態、言葉、明暗の表情、喜怒の笑声、怒声の数々」と藤田は「二十年のくぎり」に記していた。一文に凝縮されているこの振り返りでは、おそらく藤田が意図的に求め明らかにできたものと、結果的に明らかにできたものが併記されているだろう。前者については別稿を用意したい。何者かに対する＜成長証明的＞な記述といってよい。仮説的にいえば、日誌全体の根本動機はこの点にむけられている。

本稿では、後者についてとり上げよう。この点にかかわって、藤田は次のように日誌の中では珍しく総括的な記述をしている。「今日の皆の日記に、「来年の計画」と題をする。13 人一人一人の来年への思いに改めて触れ、うむうむと深く頷くものがあつたし、一人一人を改めて見直しもしたのだった」(M 1978.11.4)。あるいは、「毎日の皆の日記が実に面白い。一人一人の文章に言うに言われぬ個性があるし、その個性が日々の生活の中でどの様に息づいているか、僕などはもうそれをじっと眼を見開いて見るだけで楽しくなってしまう」(Y1981.4.9)。生徒一人一人の固有世界といってよいだろう。本稿では、アルファベットで固有名を抜いて表記しているが、そうであるにせよ、日誌の記述では、寮生それぞれが「個性」を発揮している、と藤田によって思念されている。その記述から、以下、断片的であるが、抽出して検証しておこう。

M :

「5 月の煙草事件、頻発した無外等の動揺の余波がまだ全校にくすぶっている気配なので、今日から 10 日まで終日寮生活となる。

従って今日の平和山登山も寮ごとで登るという異例の登山となり、山頂での谷先生のお話も又厳しく、且つ重いものだった。

しかし、M にとっては全くの他人事といったあんばいで、

「たまにはいいね、寮ごとで平和山に登るのもね せんせ！」

とのんびり僕に話しかけたりして、僕も思わずにっこりしたのだった」(M1979.6.5)。

こうした記述に共感とともに示されているのは、この寮生が有している純粹素朴な表現とその固有世界である。「産まれたままの天真爛漫」(1978.12.23)、「伸び伸びとした父母礼賛」(1979.2.7)、「神様に一番近い場所で生きている」(1979.2.25)、「如何にも素直な感嘆に僕はなんだか照れくさくなって」(1979.6.1)、「天衣無縫」(1979.7.21)、「思わず顔がほころんでしまった」(1979.8.20)といった藤田のことばがその世界を指し示している。その世界と対比すれば、この入寮後も見られるおねしょの習慣も、盗癖も、小さなことに過ぎない。

Y:

・「如何にも Y らしい知的な文章だなあと感心している。生木と生木でないのとの重さの違い、  
「あたりまえのような事だけど、僕にとっては大問題だ。なぜあの大きな木から水分が取れてしまう  
のだろうか？」

そう言われれば僕も段々不思議になって来たよ Y。」(Y1981.1.11)

・「今日の皆の日記に

「生んでくれた母と育ててくれた母」

と題をしたのは、2 人の母を持っている(整理番号 81,85,86,89)の今の気持の様なのを知りたいからだった。

「自分の母さんについて」

と題を書き変えてつづっている Y の文、なんともいえない切ないものが伝わって来て、11 日に訪ねた時の店の様子を改めてまざまざと胸に思い浮かべたのだった。」(Y1981.12.22)

・「10.27

「君が一番信じている人？」

「君は人を信じれるか？！」

「両親、身内をのぞいては、何年か一緒に遊んだりした人達以外はあまり信じられません。」

一諸に悪い事をしたかつての仲間は、向うもそう思っているかも知れないけど、絶対に信じられないという言葉に、それらにきっぱりと決別した Y の決意の様なものをひしと厳しく受けとめている」(Y1981.10.27)。

「知的」であり、意志的な性格の強さ、そして「おだやかな折り目正しい」人間性(1981.9.26)を藤田はこの寮生 Y に見出している。この点で、寮生 M と対照的である。

T:

・「映画「連合艦隊」をみてる。…5 人の感想は 1 人 1 人如何にもからっとしていて、35 才も違う年齢のことをしみじみ考えない訳にはいかなかった。

5 人の中では、T が一番意気こんで日記を持って来た。

「僕ね、わきにはみ出して下にも書いたんだよ」

とにこにこしながら持って来ただけに、堂々とした戦争論は仲々の迫力だ。頭の良さがきらきら光っ

ているし、背後に父親を感じさせる」(T1981.8.16)。

・「夜、誕生会。僕はTの日記に深い衝撃を受けている。

「～～～だから、妹が十才をすぎれば、我、一家は、何か異変が起るかぎり(起らないかぎり)一生、家族の、だれ一人として誕生会をやる事はないでしょう」

異母妹奈緒子さん(49,4,9 生まれ)の誕生祝い、自分のこと、Tの透徹した眼は大人のやることなすことをじっとすべて見すかしている様な気がして、その鋭い感受性に今更に舌を巻いてしまうのだ。」(T1981.8.28)

・「自分が堂々と見える時」

「あまりないが ① 試験中にカンニングをしたことがない事 ② 友達との約束は忠実に守る事。」

表面おとなしく見るともだが、水面下のTは大変に誇り高く生きている」(T1981.10.31)

・「Tは黙々と暮している。勉強も一生懸命にしているし、ひまさいあれば自分の部屋に居て、手紙を書いているか本を読んでいるかしていて、皆との間になんとか一線が引かれている感じ！。

皆がTを嫌っているとか、Tが皆を拒否しているとかではなく、なんとなくどこかが違うのである。例えば、「お八つだぞ！」と僕がひと声叫ぶと皆わっと集まって来るのだが、Tだけは決して走らない。

ゆっくりと皆の後から歩いて来て、皆がもらい終った一番最後に、

「どうもありがと御座いました」

と頭を下げてまでどって行くのである。それが少しも気取った様子を感じさせないのはTの品格だし、皆から白けた感じで見られないのはTがとても真面目だからだと思う」(T1981.9.18)

・「次郎物語」の感想文について

「少ししか読まない本を他の子から応援してもらったり、教えてもらったりして書いた感想文が多い中で、次郎の生き方の中に自分の生き方を二重映しにさせながら読み切っているTの感想文は、群を抜いた迫力で身につまされるものがある。」(T1982.1.21)

知的であり、意志的である点で、この寮生Tは、Yとも共通する。Y以上に「透徹的」で内省的であることの長所が、藤田によって把握されている。その一方、このTは孤立的であり、ただひとりHとの相性が把握されている(T1982.1.19,1.28)「天真爛漫」なMや、味噌小屋大掃除では「アラヨッ コラヨッ」(Y1981.9.14)と表現できる協調的で明朗さをもっているYとは異なっている。

このように3名それぞれの「個性」ある姿が、対話的コミュニケーションを通じ把握されている。

#### (4) 対話的コミュニケーションの成立契機

以上のような対話的コミュニケーション、とりわけ日誌を通じてのその実践は、どのように成立しているだろうか。この相互行為は、藤田の生徒に対する関係の特徴づけるものであるが、これまでの論述内容から、ある程度予想されるように、その行為を導く藤田個人の資質や能力のみによって成り立つのではない。以下、本稿は、3つの成立契機を指摘したい。

##### 第一に、「礼拝堂」等での対話

「礼拝堂」と名づけられた講堂等での校長講話(1981.11.1「闇の子と光の子」)、及び職員の講話、他の寮生仲間との交流も、家庭学校において共有されている習慣である。それらは、寮生一人一人に他者とむき合う機会をもたらしている。藤田の寮生との対話的コミュニケーションを成り立たせる重要な契機になっている。

校長講話について

M :

・「今日はちょうど日旺だしと、午前 10 時、全校で平和山に登る。残り少ない暖かさの晩秋の陽射しの中で、立派になって欲しい、中味のある人になって欲しいと淳々と語りかける谷先生のお話、全校深い感動を受けての一刻、一番前できょとんと聴いている風の M だったが、日記を読んでなんともいえない恥ずかしい思いになってしまった。

「僕は、なぜか知らないけど、谷校長先生がしゃべっていたら、僕は嬉しくなります。」

こんなにも素直に受けとめている事に、僕はなんともいえない感動も受けたのである」(M1978.11.5)

Y :

・「◎創立 67 周年記念式

「今日は家庭学校の開校記念日で、午前中は礼拝をした。礼拝で校長先生はいつになく厳しく、又、優しい顔をしていました。」

「僕はここに来てからもう 6 ヶ月以上たっているのですが、こんなに熱心に話していた校長先生は今までに無かったと思います。」

家庭学校の教育の理念を淳々と、しかも深い調子で話された今日の谷先生のお話には厳しい迫力があつたし、それだけに又、鋭どい感性の Y には心に響くものがあつたと思」(Y1981.9.24)

谷校長の講話、そして職員の講話(1979 年 2 月 8 日の「俳人でもある森田先生が、去年一年の家庭学級の様々な情景を御自分の俳句を通して語られ、その暖かい滋味あふれるお話」についての T の作文、1979 年 5 月 3 日憲法記念日の M の作文など)について、生徒たちにとって印象深くうけとめられている。生徒たちは細大漏らさず書き留めている。

作業班活動の発表が年 1 回の「収穫感謝」ではおこなわれ、仲間たちの日々の努力の成果が報告される。月 1 回「礼拝堂」での「朗読会」も、職員と生徒の交流の機会となっている。

M :

・「今日の工作部木工部土木部の発表、数ある作業班の中でも、この 3 つの部は高度な技術を持っていることであるのだが、今日の土木部の「ヤコブの井戸浄化槽の模型による浄化の実験」は今年最大の圧巻だった。

M はもう眼を丸くして見つめ続け、僕もすっかりその実験に見せられての半日、素晴らしかったな M !」  
(M1979.11.22)

T :

「◎朗読会 (整理番号 80) 出場。

皆なが揃っての初めての礼拝堂での礼拝だった。T がどんな顔で座り続けていたか知る由もないが、日記が厳しく胸をうつ。

「僕だって、あの 7 人以上に、学び、全体的に成長し、短かい期間で、学校を、卒業し、立派な学生、又は社会人になり、回りの人にめいわくな事をしないで、自分の回りで、めいわくな行動をしているような人には、その人のために進んで注意してあげたいです。」(T1981.8.23)

寮生同士の交流のみならず、「朗読会」での寮長のコメントも、藤田にとって、対話を促す機会となっている。「卒業を前にして」という作文を全校で15人も読む「朗読会」でのMの発表についての講評に、その日の日誌（M1981.3.15）でふれている。

「外山先生が

「自分の欠点をM君が知っているということ、それはとても素晴らしいことだし、大切なことだし、これからも自分を大切にして社会で頑張ってください。」

と暖かく講評して下さったのも感謝だった。Mよ、今日読んだ朗読文を絶対に忘れないで頑張って生きていくんだぞ！」

「朗読会」そのものが、家庭学校内での一寮生と寮長との緊張感のある真剣な「対話」の場面として共通認識され一つの様式として認められている。そのような場での卒業を前にしての「講評」は、これからの生き方に対する励ましとなっていた。

## 第二に、生徒自身における自己内の対話

藤田が指示する作文によって、寮生一人一人は自己のその日の生活、出来事、思いについて振り返る機会が与えられる。その姿は、「朗読会」での寮長との対話と区別すれば、自己内の対話といってよい。その様子は、内面を深く見つめる場合もあれば、— 藤田の期待に反して — 表層的な場合もあるだろう。後者の場合に藤田は、その取り繕いに不満を記しているのが常だった。いずれにしても、藤田と生徒とのコミュニケーションを対話的に成り立たせる契機となっている。

M:

・ M 作文 1979.10.18

「自分の将来の計画」

「僕は、去年と同じくしないで、大人になってからの事を書きます。それは、まず始めに、背が、大きくならなかつたら、だめなものでした。まだまだこれから大人になって行くのでは、ないでしょうか。…卒業したとしたら、僕は背が小さいから、働く場所が、ないと思います。そして、大きくなった場合は、皆んなと同じくしていけるのかも知りませんでした。そして、札幌のパン工場でもいいです。僕は、それが、とても良いと思います。そしてもう一つの将来は、美唄の駅弁当屋に働きたいと思います」

こうした生徒自身による自己の振り返りと見通しについて、藤田は次のように記していた。

「今まで弁当屋で働きたいとは言って来たのだが、その弁当屋の所在はまだ不確定の漠としたものだったが、今日の文にははっきりと美唄と書いていて、これは重要な意思表示だと思った。

「もう一つの将来は、美唄の弁当屋に働きたいと思います。

それから、すてきな事は、人生で有った。」

素敵な事は人生で有ったのか！ いい言葉だなあ Mよ！」（M1979.10.18）

Y:

「自分の誕生日の思い出」という作文を読んで、



「Y の日記を読んでなんともいえない気持ちになっている。

「僕はまともに誕生会をしてくれたらという、小学校2年生まで、それ以後は家出していたので、1回もしてもらえませんでした。これからは、こっちから、父や母の誕生日を、いわってあげたいと思います。」(下線原文ママ)

こっちから父さんと継母の誕生日を祝ってあげたいという心意気！に自立への胎動を感じるのだ」(Y1981.8.28)。

藤田によって設定された日記題目によって、自己自身との対話が促されている。その姿に対する共感が、藤田の生徒との対話を成り立たせている。

T:

・「次郎物語」の感想:

「それから次郎は母を失いました。葬式の事にはお浜も来て何年ぶりかの再会をしました。それからの次郎はまるっきり性格が変わり本当にすごい成長をしたなと思いました。小さい時から苦勞をしたり我慢をしたりした次郎の様に僕もそういう生き方をやってみたいと思いました。次郎物語は良い本でした。」1982.1.21

作文題目があらかじめ指示されているわけではないが、文学小説との出会いを通じて自分自身とむき合い、どう生きるかがこの作文において促されている。そうした生徒自身の自己内の対話をうけて、藤田は、「次郎の生き方の中に自分の生き方を二重映しにさせながら読み切っている T の感想文は、群を抜いた迫力で身につまされるものがある」(T1982.1.21)と、生徒にむき合っている。

以上のように、生徒がみずからを振り返り、あるいは将来を見通すことを試みていること、そのような内容は、一対一の対話の対象として藤田が問いかけ、応答する試みを促す契機となっている。

### 第三に、自然の交流・対話

そ菜部、園芸部、果樹部、酪農部、山林部、木工部、土木部、工作部、醸造部など年間を通じての作業班活動、冬季での「雪像コンクール」、夏季での「海水浴」などを通じての生徒と自然とのかかわりは、藤田の石上館の寮生のみならず、その他の寮生も、家庭学校の日課として定着している<sup>15)</sup>。それらも、ここで見逃すことができない重みを示している。

M:

・「7. 19

この4、5日、僕とMとでリンゴと梨に袋かけをしているのだが、(Mは僕に袋を渡す役目)、Mはいろいろいっぱい僕に話しかけて、世間の森羅万象、Mの口から語られると実に楽しいのである。

「日本で一番偉いのは留岡幸助先生なんかもね」

「悪いことすれば谷校長先生になんでもわかられてしまうんだよね！」

「弁当屋もうかるんだもんね！」

「弁当自分で作って、自分で売れば一番もうかるんだよね」

「北の湖とジャイアント馬場と喧嘩したらどっち勝つべね？」

先生ならどっち勝つと思う？」

「僕と実とどっち金持になるべね？ せんせ」

「石油なくなれば、僕の父さんもうかるよね」

(Mの父さんは三井芦別炭坑採炭夫)」(M1979.7.19)

自然を仲立ちとした作業班活動の場が、そこに居合す藤田と生徒との対話を創出している。

M:

・ 11. 20

今日からいよいよ作業班学習の発表が始まる。

今日はまず醸造部と酪農部、多くの鋭い質問がとび交い、それに対してそんじょそこの答弁とは大違いの人間味あふれる名答弁がなされ、1年を締めくくるにふさわしい行事のまずは始まりの1日 Mの質問には満場爆笑となり、僕もいささか小さくなったのだった。

『そのほうまきはとは何ですか?』

一瞬酪農部を代表して答弁に立っている(整理番号54)も意味が判りかねて戸惑ったのだが、表に示されて判ったらしく、

『これは放牧(ほうぼく)と言って、牛を牧場に放つことです』

と答弁して、わっと爆笑がおこったのだが、これからが又 Mは大したもの。

『ハイわかりました』

とにっこり座って悠々とあたりを見回し、僕も全校生徒職員の中で堂々と質問する勇気に敬意を表しつつ、悪いけど赤面してしまったんだよ Mよ!」(M1978.11.20)

Y:

ハウス作業:

「ハウスに積った雪を落としたり、午後からは 30 度 c にまで上った温床にトマト、ナスビ、キャベツ、ピーマン、ナンバン、シシトウを蒔いたのだが、Y のこつこつした真面目な仕事ぶりには心嬉しくなっている」(Y1981.3.16)。

T:

「園芸部の1年の仕事」という表を書くのを Tに任せたのが3日前、丹念に仕上げていよいよそれを今日全校生徒と先生方の見守る前で発表したのだが、はっきりした声で、物おじしない態度で本当に堂々とした発表だったぞ! T!」(T1981.11.23)。

これらいずれも、生徒の作文では、学校の日課である作業班活動を通じて、自然とどのように交流しているかが記述されている。そして、その「仕事ぶり」、作業についての発表の様子は藤田の生徒との対話の題材を提供している。

T:

T1982.1.11 作文「今日の仕事で考えた事」

今日の午前中の作業は、僕は平和山登山道を上った辺りで枯れた白樺などを切って石上館の横まで持って来ました。仕事中考えた事は(木を切っている時)この木は本当に枯れているだろうかという事です。何故そんな事を

考えたかという、僕はまだ少ししか、枯れ木の区別が出来無いからです。僕がその時切っていた木は白樺でした。叩くと中でビーンと音がしました。それからもう一つその木を切っている時に考えました。それは木が自分の思った方角に倒れてくれるかという事です。何故そんな事を考えたかという僕は木を切り倒した事がまだ数回だけで下手だったからです」。

こうした自然との交流によって、生徒はなぜか、と問いかけている。そのような生徒の姿 — 作業の課題そのものに正面から向き合って真剣に取り組む姿は、藤田に対して、生徒、そしてその両親との対話を次のように導いている。

「遂々来ることのなかった父さんと母さん（継母）、夏に会ったらびっくりしますよ！もしかしたら、精神的にもあなた方を大きく越しているかも知れませんよ！」（T1982.1.11）

M :

・「湧別川へ魚釣り遠足に行って来る。

M の釣り果はゼロだったなあ～～～

針にミミズがうまくつけられず、皆も M の針まで手がまわらなくて、僕もあまり上手ではなくて、結局 M はミミズと格闘して 1 日が終わってしまった様なものだったのである。

針にミミズをつける練習をみっちりさせるべきだったなあ～～～という寮長としての僕の深い悔恨～～～。 申し訳なし M よ」（M1979.6.4）。

家庭学校自体が豊かな自然に囲まれているが、このように遠足を通じてあらためて自然とも出会う。そこでの数々の動植物との経験が、藤田との対話の題材を提供している。

数々の事例が示すように、長年にわたり整えられた樹木の林、動植物などに囲まれた北海道遠軽の自然とのかかわりは、生徒たちにとって、対話・交流と言うべき意味をもったものとして経験される。美的な経験でもある。そして、遠軽の冬は零下 30 度になるほどに厳しいが、「森の学校」ともいわれるように、学校を囲む自然は包容的でもある。留岡幸助『自然と児童の教養』（警醒社、1924）も、その点を強調していた<sup>16)</sup>。それらは、藤田の場合においても — 他の寮長の場合と同様に — 寮長藤田と生徒との対話的コミュニケーションを成立させる契機の一つになっている。

以上のように、本稿でとり上げた M、Y、T にかかわる中期日誌の内容に即して、藤田の寮生に対する対話的コミュニケーション成立の契機を捉えることができる。

## 5. 寮長藤田俊二中期日誌の意義 —北海道家庭学校の教育共同体としての成り立ち—

ここまできて、藤田の中期日誌が示した意義を考察することができるだろう。

日誌の内容も本稿では抄録であるが、時系列で具体的にとりあげたので、その記述の様式そのものに研究上の注意がおよぶかもしれない。「エビデンス」を含む教育実践の記録としてどう評価するか。今日の幼児教育における「エピソード記述」としての側面を有することはないか。寮生、卒業生が読むという場面をもし仮に想定した場合に、社会的養護の領域で求められているライフ・ストーリー・ワークとしての可能性はどうか。そうした予想が立てられるだろう<sup>17)</sup>。このような検討の可能性を認めつつも、本稿で問いかねたいのは、これまでの論述をふまえて、対話的コミュニケーションの展開それ自身は、どのような意義を

示していたか、という点である。限定して、北海道家庭学校の成り立ちにとってどうであったかに、焦点化する。

その場合、まず注意されねばならないのは、行為のあり方にわれわれは着目したことである。具体的には、寮長—生徒間の相互行為に関することである。その成り立ちは、すでにふれたように、制度的な出会いをもってはじまる。児童相談所によって「措置」されて少年たちは同校の「生徒」として入校し、入寮する。そして、寮長と出会う。藤田の日誌では「\*\*児相の\*\*先生に伴われて\*\*君入校する」と記述される。この部分にかぎっては、どの寮生についての日誌の書き出しにも共通する定型の様式になっている。したがって、寮長—生徒間の相互行為は、この制度的な関係において、出会いの時点では自発性の契機はほとんど皆無といってよい。就学義務制のもとで学区内で通学指定される公立小、中学校以上に、一定の客観的な標識とその行為事実をもって行政的に「措置」されメンバー構成されるという点において、マックス・ヴェーバーの「共同体」(Gemeinschaft)の概念でいえば、「アンシュタルト」(Anstalt)としての強制的な性格が濃厚に備わっている<sup>18)</sup>。しかし、それにもかかわらず、あるいは、まさにそれゆえに、本稿のはじめにふれたように、校長および寮長夫妻は、生徒をどのように理解するか、ということを基本的課題にしている。当時の教護院一般に共有されている課題であろう。「学校」であることとともに、「家庭的境遇」であることを開設以来自覚的に求めてきた北海道家庭学校の場合は、とりわけそうである。藤田の場合には、生徒に対する「作文」の指示という行為によって理解するというその課題は、どの寮生に対しても例外なしに遂行された。

家庭学校がメンバーの構成において制度上「アンシュタルト」としての基本的性格を保持しているという点—「無外」といわれる無断外出は、その点を顕著に示す寮生の問題行動であろう—では、入校時でも、退寮・卒業時でも変わらないが、しかし、メンバー間の相互行為の内実がどうであったか、という点を把握するならば、この基本的性格とは別の契機が入寮後に生成していることにわれわれは注意をむけたい。本稿で中期日誌によって論証した、対話的コミュニケーションの実践とその展開が示しているのは、相互信頼を基盤とする自発性の絆の契機ではないか。その契機によって、寮長—生徒間の相互行為が成り立っている、という具体的様相である。ヴェーバーとともに「アンシュタルト」概念との対比でいえば、かれらの属する「共同体」—十数名の寮生が生活する「石上館」、よりひろくいえば、各寮含めて80数名の寮生が在籍する北海道家庭学校—は、かぎりなく「結社」組織に接近しているであろう。藤田の場合にも「指導困難」な「強烈なボス」に難儀する事例はあって(後期日誌)、例外はもちろんあるが、中期日誌には、卒業(退寮)までに私塾のような教育関係が成立しているであろう。これまでに明らかにした藤田の日誌記述と、生徒作文とによってその様相は部分的には示されているであろうが、最終局面はどうであったか、以下、検証しよう。

その点を顕著に示しているのは、寮生が寮を卒業する直前に作成する「作文」である。原稿用紙十枚以上に及ぶこともある。慣例的に寮での「送別会」の前日、あるいは数日前に作成する。これまでの寮生生活の振り返りを内容とする最後の対話的コミュニケーションといってよい。自己内の対話を主にしたものである。本稿のこれまでの論述では示していない、その一例を示す。退寮の前日の送別会の様子について、藤田日誌は、寮生Mの場合を次のように記述している。

1981.3.20

「それにしてもMよ、今日の朝礼での挨拶輝いていたぞ!

「僕は2年6ヶ月頑張りました。世の中に出ても頑張ります。  
皆さんも頑張ってください。」

◎ 夜はMと（整理番号73）の送別会盛大。

Mが久し振りに歌った「与作」 深く胸にしみた。

「 与 作 」

与作は木を切る

ヘイヘイホー ヘイヘイホー

こだまはかえるよ

ヘイヘイホー ヘイヘイホー

女房ははたを織る

トントントン トントントン

気だてのいい嫁<sup>こ</sup>だよ

トントントン トントントン

与作与作もう日が暮れる

与作与作女房が呼んでいる

ホーホーホーホー

わらぶき屋根には

ヘイヘイホー ヘイヘイホー

星くずが降るよ

ヘイヘイホー ヘイヘイホー

女房はわらを打つ

トントントン トントントン

働きものだよ

トントントン トントントン

与作与作もう夜が明ける

与作与作お山が呼んでいる

ホーホーホーホー ホーホーホーホー

最後の日記と長い作文、しみじみと貼付しておく。

\*M、原稿用紙(400字)8枚

家庭学校に何ぞきたのか、お正月をすごす

僕は、ここに来る前は、人の家に入って、お金とか、人の物を、取ったりしていました。そして、僕は、よそのおばあさんに見つかってしまいました。そして、僕は、小学三年生の頃は、ふつうに学校に行ったりしていました。そして、

四年生頃から、人の家から、お金を取ったりしていました。その時、僕は何も考えていなかった、僕でした。そして、ちょっとした間、けいさつにお世話になってしまいました。そして、僕は、G君と一緒に又車の中から、お金とか取ったりしていました。それから、違う所に行ってやりました。お父さんにも、やはりめいわくかけてしまいました。そして、僕が、4年生の頃は、街に行って、人の店から、取ったりしていました。それから、友達を、さそうって、店から、物を盗んだりしました。そして、僕は、何ぜ悪い方に進んでしまったのでしょうか。そして、学校には、真面目に行っていました。そして、僕は、家が、いやになって、家出をして、たきかわまで、行きました。そして、最初、僕は、店の中に入って、食べ物を買って食べました。そして、お金が、だんだんなくなってきたので、人の店から、お金を、盗んだりしました。そして、おじいさんに見つかって、にげました。そして、バスターミナルまで来ました。そしたら、二十日位しかいませんでした。その後に、僕は、バスターミナルで、休みました。そして、食堂に入って色々な物を、たので、食べました。そして、今まで、こんな悪い事をしていなかったら、今は、中学校に戻っていると思います。そして、僕にとっては、意思が、弱すぎたと思います。そして、僕は、市役所によばれていきました。色々な悪い事やら、心配かけた事を全部話しました。そして、児相に行く事になりました。僕は、やはり間違っていた事を、してしまったのです。そしてじ相(児童相談所一注)に入ったのが、九月六日に入りました。そして、ちょっとした間、じ相で、くらししました。そして、とても、いい人ばかりでした。それから、千葉先生と、西森先生と、僕と、三人で、卓球をして遊びました。とても面白かったです。そして、つまらない時は、部屋に入って、ねたりしています。たまたま先生が、来て、良いお話をしてくれたりします。最初余りいやだなと思った事も有ります。そして、じ相から、にげようかなと、思った事も有ります。だけど、つかまったら、困まると思って、にげませんでした。そして、じ相で、ソフトボールやキャッチボールをしました。この二つだけじ相の思い出になりました。そして、面白くなかった場合にも有りました。そして九月十九日、大沼学院か、家庭学校に行く所を、話合っていました。僕は、どっちでもいいと言いました。その時は、とても、ふわんが、有りました。そして、千葉先生が、僕に、家庭学校に行くからと教えてくれました余り嬉しくは、有りませんでした。そして、僕は、一晚寝ないで、考えました。そして、二つの部屋に、小学五年生の人がありました。その時に、僕は、一緒に、便所から、にげようかなとつくづく思いました。そして、便所の、窓をあけて、そこから、にげようと思いました。だけど、皆んなが、起っていたので、すぐやめました。そして、朝が、立ちました。七時に、顔を洗って、部屋に戻りました。そして、バックの中に、色々な物を、入れました。そして、食堂に行って、ご飯を、食べました。とても美味しいかったごちそうでした。じ相のごはんより家のごはんの方が、美味しいかったと思います。そして、八時頃にテレビを見ました。そしたら、余り何もいい番組は、有りませんでした。そして、僕は、千葉先生と、岩見沢駅に行きました。そして人が、沢山いました。僕はとても、恥しいように駅に入りました。そして、まだ汽車が、出ていませんでした。その後に、岩見沢の店で、ジュースとか買って飲みました。とても美味しいかった味が、しました。そして、昼ごはんは、岩見沢駅の食堂で、食べました。そして、僕は、とても、いやな時も有りました。そして、汽車改札が出ました。遠軽行、大雪二号の汽車にのりました。そして、僕は千葉先生のとなりにすわりました。そして、僕は、汽車の中で、お客さんと一緒にしゃべったりしました。そしたら、お客さんに、どこへ行くのかなと言われました。僕は、遠軽の街に行くと言いました。そして、たき川に着きました。とても、僕は、とても、なつかしくて、たまりませんでした。そして、深川駅に着いたら、もう少しで、旭川に着くのかなと心配ばかりしていました。そして、とても、遠軽まで、長く感じました。そして、旭川駅に着いてから、三十分で車をしました。そして、一つだけ思い出した事が、有るのです。それは、旭川駅から出てすぐ汽車が止った事でした。そして、窓から見たら汽車が、そのへんに有ったからでした。しばらく止りました。そして、三時ちょっとすぎに、遠軽駅に着きました。とても、つかれた気分でした。その後に、ハイエースが、待っていました。そして、ハイエースで、家庭学校と言う所に行きました。そして、こうもんに、入りました。そしたら、寮見たい建物が、沢山並んでいました。そして、僕は、校長室と言う所に入りました。そしたら、校長先生が、いました。そして、僕と色々なお話をしました。そして、僕のたんとうの先生は、

藤田先生と言う人です。最初、おかない先生だと思いました。そして、すぐ、グランドに行きました。そしたら、皆んなで、ソフトの試合をしていました。そして、僕の弟(他寮ですでに在籍一注)が、いました。そして、僕は、また石上館へ戻りました。そして、僕は、一週間の思い出が、有りました。それは、皆んなと、仲良く出た事です。そして、話が、かわって、行事の思い出について書きます。一つ目は、園遊会でした。二つ目は、楽しいクリスマスパーティーが、有りました。クリスマスパーティーの思い出は、一緒こんなにっぱなパーティーは、出きないと思います。そして、一時帰省が、有りました。残念ながら、帰省は、出きませんでした。僕にとっては、失敗したと思うぐらいでした。そして、皆んな帰省していたのに、僕一人だけ残って、情けないと思いました。そして、スキー大会が、有りました。そして、僕は、転んでばかりいました。そして、スキーまったく出きませんでした。そして、直滑降から、滑べてくるのが、おかなかった気持ちでした。そして、一月頃に、何も有りました。そして、二月頃も同じく有りませんでした。そして、三月二日に、せつ分が、有りました。とても、楽しい一日でした。そして、廊下に豆とか、おかし類をまいて、楽しんでいました。とても一つの思い出になります。そして、一日一日が、大切な時も有りました。それから、僕は、一人で、生きていかなければならない立場になりました。そして、家庭校の思い出は、沢山有ったと思います。そして、僕は、(整理番号 73) 君とか、(整理番号 61)君と、仲良くプロレスしたりして遊びました。たまに仲が悪い時も有りました。そして、僕が、居た時に、トルフィが、五つ位取っています。そして、賞状は、同じく、五枚でした。そして、僕は、ここに来て良かったと思います。そして、ここには、色々な行事が、沢山有ります。その後は、つらい事や、楽しいや、悲しい時が沢山有ったと思います。そして、僕は、家庭学校二年五ヶ月になって、ほとんど行ないせいちょうが、良くなりました。僕は、これから、卒業して、真面目に生活していきたいと思います。そして、これから、ゆうわく負けないで、頑張っていきたいと思います。そして、僕は、少ない期間を、大なし、しないように、気を付けなら、頑張っていきたいと思います。長い間、本当に有り難度ございました。 終わり。

○ 皆がうたった歌

- (整理番号 64) 津軽海峡冬景色
- (整理番号 70) 冬の星座
- (整理番号 73) 大空と大地の中で
- (整理番号 76) 南回帰線
- (整理番号 78) 友だちのうた
- (整理番号 79) ドナドナ
- (整理番号 80) 贈る言葉
- (整理番号 81) 小さな木の実
- (整理番号 82) 異邦人
- (整理番号 83) 今日の日はさようなら
- (整理番号 84) セクシーナイト
- Y                      ドナドナ

以上が、M の送別会当日(1981.3.2)の日誌記述である。問題行動―家出―補導―兇相―便所の窓からの逃亡を思うが断念―遠軽行きの列車―藤田先生との出会い―園遊会(寮ごとに模擬店を出す。1980年10月8日の場合、石上：焼イカ、桂林：大福餅、柏：焼き鳥、掬泉：ホットドック、樂山：カレーライス、洗心：焼きそば、平和：コーヒー牛乳とドーナツ―注)・ソフトボール大会―クリスマスパーティといった経過を振り返りながら、この寮生は、次のように締めくくっている。「ここには、色々な行事が、沢山有り

ます。その後は、つらい事や、楽しいや、悲しい時が沢山有ったと思います。そして、僕は、家庭学校二年五ヶ月になって、ほとんど行ないせいちょう（成長—注）が、良くなりました。僕は、これから、卒業して、真面目に生活していきたいと思います。そして、これから、ゆうわく負けしないで、頑張っていきたいと思います」。「行ないせいちょう」のなかに、報告会での質疑応答（1978.11.20）、藤田が二人との会話を書き留めた作業班活動（1979.7.19）、ゴミを含む「サイロの中に、入って、とてもつらかったが、最後まで、頑張って、できた」という経験（1980.6.26）などもふくまれるだろう。石上館において、こうした卒業間近の作文に示されているのは、当の少年がみずから振り返りのなかで、どのように「行いせいちょう」してきたか、という観点から自己を位置づけ、これからの生活を見据えているということ、そのように自己の成長を語るなかで生きる、ということである。「間違っていた事」という明白な逸脱状況は、入校前のみならず、入校後（1978.12）もあった。けれども、この少年の場合には、例外的に幸いなことに、「一生けん命働く」実の父（1979.2.7）とともに実母からの愛情をうけとめながら — 「自分の一番好きな人」と題目指定された作文（1978.10.12）に「お母さんは、僕と、いしょに買物に連れててくれます、なんとか僕は、お母さんを、楽にしてい（ママ）と僕は、思っています」（643字）と記していた — 藤田先生と仲間とともに日々を過ごし、立ち直ることができた、といった筋道がある。全校「朗読会」（1981.3.15）において「2年5ヶ月生活した学んだ事」でふれた内容も、この筋道のなかに加えられるだろう。こうして力強く、みずからの生を方向づけることができる。藤田によって、あるいはむしろこの寮と学校全体の慣行によって、このような語りが促されている一面もあるだろう。その語りが、藤田の日誌記述とともに、どこまで明確に根拠ある諸事実裏づけられているかどうか、その点はここでは問わない。「成長」の軌跡が生活事実に関する少年の認識主観を通じて把握され、意味づけられていること、その場合、なにかしら振り返りのシートといったものが用意され、所定の枠によって、成長軌跡が諸側面を通じて方向づけられているのではなく、自由に表出されていること、その点が重要である。そのようにして、自己の成長物語の様相を呈している。当事者の主観であるが、この少年一人のみによって成り立っているのではない。他の寮生たちは、慣例としてそれぞれの「思い出」の作文をまとめている。藤田の日誌は、これらをも大学ノートに糊づけしている。共感のなかで、苦楽の共有経験とともに少年の「成長」は語られ、認識されている。寮生と、そして共に暮らした寮生たち、それぞれの歌は、こうした認識を、自分たちの寮の馴染み深い場で共感的に支えていることも付記できる。

藤田の中期日誌は、以上がその一端を示すように、対話的コミュニケーションの展開として特質を示しながら、北海道家庭学校のメンバーの成り立ち、とりわけ相互行為の視点から捉えれば、寮長—生徒間が見出す教育関係に漸次的変化が生じている様相をも同時に示している。すなわち、寮長—生徒間の相互行為は入寮から退寮（卒業）までのあいだに、「アンシュタルト」としての制度的属性の関係性から、結社としての自発的属性の関係性へと移行していることである。

- |              |                                  |
|--------------|----------------------------------|
| I 寮長—複数の生徒   | 自発的な結合意志に基づく相互行為が複数成立する結社的關係     |
| II 寮長—単独の生徒  | 自発的な結合意志に基づく相互行為が成立              |
| III 寮長—単独の生徒 | 一方の拒否的態度によって自発的な結合意志に基づく相互行為が不成立 |

このように相互行為の水準について、寮生一般の傾向性に即して概括すれば、寮長藤田と寮生の相互行為の現実はいのIの類型に接近していることが想定できる。入寮当初のIIIからの移行変化は短時日におこなわ



れるのではない。寮生一人一人に即し、一挙ではなく、数ヶ月、数年の歳月を要する漸次的な移行である。

本稿でとり上げた寮生 M(1978.9.20 年中学 1 年入寮—1981.3.21 中学 3 年就職)についていえば、こうだった。「大喝」せざるをえない「連続の泥棒」(1978.12.4)の状態、「笑顔がよかった」(1979.1.22)という転機、視野の深まりと拡大にかかわって、「小さくとも、働けるのです」という生徒作文についての藤田の「深い感動」(1979.4.19)、果樹園での楽しい対話(1979.7.19)、そして、将来の志望にかかわって、「弁当屋で働きたい」という「重要な意思表示」(1979.10.18)、といった移行を、本稿で断片的に紹介した限りでも、われわれは確認できる。

こうした移行がどのようなプロセスと諸段階を示すかを、十数名の寮生に即した客観的なデータによって明確にし、論証することは、今後の課題としよう。「森での畑での仕事を生き生きと書き始める」(「二十年のくぎりに」)段階が、寮生それぞれにおいて、いつどのように至るか、が重要な段階になるだろう。現時点では、不明な部分を残すが、「学力の向上」「作業の能力の向上」、そして「難有」という根本理念といった、藤田自身も含め学校として期待している能力、精神的態度<sup>19)</sup>とは違った相互行為の絆が、変容の一つの姿としてできる。目標の事項というよりも、プロセス場面に貢献する類のものであろう。そうであっても、相互行為の絆が示す価値をけっして損なうものではない<sup>20)</sup>。こうした対話的コミュニケーションという自発的な相互行為の絆にむけた教育関係の移行の様相を明らかにしている点に、中期日誌が示した一つの重要な特質が見出される。

本稿全体を通じてこの点を確認した上で、もう一つの重要な相互の絆の存在について、ここに見落とすことはできない。出会いのみならず、それ以降、そして、終局の時点でも、「無断外出」は許されず、「アンシュタルト」の契機(規則、慣習)が存在するという制約性の絆の事実についてである。ここで着目したいのは、たんに制度上保持されている、ということであるよりは、それ自体のうちに教育的価値を見出そうとする認識である。谷昌恒校長は、家庭学校の実践とこれまでのその蓄積を念頭におきつつ、教護院一般の教育の本質について、「きびしく仕込まれる」、「厳格に遇せられる」、「強いることとは培うことである」、そのように言い切ることができる「強制施設」であることを言明し、深い洞察とともに指摘していた<sup>21)</sup>。「矛盾」を教育の要件として認めるのである。こうした教育認識が、北海道家庭学校の職員においてはどうか。力量ある職員を同行者としていた事情をふまえれば、共有されていると予想できるだろう。この点について一々検証はしないが、少なくとも藤田自身は、谷校長のこうした認識に同意するにちがいない(T1981.8.18)。石上館に属するという客観的属性によって寮生全員に作文を課し、題目を指示したことも、谷校長のいう意味で「強いること」に属する実践の一つとして位置づけられるだろう。

そうであるなら、この「アンシュタルト」としての認識をたんに管理というよりも、教育上の観点から家庭学校に共有されるべき原則的立場として藤田自身認めた上で、それでも — あるいは、まさにそのゆえに — 結社的關係が生成しているという両面的な契機を含む相互の行為の絆が成立している。北海道家庭学校のこのような絆について、ヴェーバーの「共同体」概念に即して捉えれば、一種の教育共同体として特徴づけられる。この点に、藤田俊二中期日誌の実践記録としての見落とすことのできない意義が存する。

本稿でとり上げたのは、中期日誌に属する 3 名に過ぎない。その期間も 4 年間(M:1978-1981, Y:1981-1982, T:1981-1982)に限られたものであった。そうした制約をとまなうが、予想とともにいえば、北海道家庭学校(1914 年設立)は、史的変遷のなかで感化院、少年教護院、教護院、児童自立支援施設と法制度上の名称等は異なっても、「結社」性・「アンシュタルト」性の両契機の相互行為の絆の集積を含む教育共同体として成り立っているにちがいない。そしてこの事情は、1 世紀の同校の歴史を超えて、より「普遍史」的視野で位置づけられるであろう。「教育」という場合には、日々の一連の行為のなかで、夜尿、病状、基

本的信頼感の欠如に対する気遣い等、「家庭的養護」の部分（M1979.5.8,7.20, T1981.1.22,10.25）をも含めて規定される教育共同体が、その視野に入ってくるであろう。

このように結論づけたところで、この知見との関連で、藤田俊二日記にかかわって、以下のような3つの研究課題が残されていることを指摘できる。

結社的な自発性が相互の絆として意識されているとすれば、相互に共有することが期待される理念の存在が予想される。対話的コミュニケーションにおいて、それはどう語られているか。対話というに値するように、寮の内外、様々な場面が想定される。この点で二つの場が着目され、二つの語りにかかわる問題が注意される。

1) 家庭学校の中心的な場として、「難有」の扁額が正面に掲げられている「礼拝堂」において、同校生徒全員、及び職員を前にして語られる校長講話である。谷昌恒の語りは、藤田日記において、どのような内容として寮生及び藤田によってうけとめられ、対話的コミュニケーションのなかに位置づけられているか、という問題。

2) 家庭学校における家庭を顕著に示す「台所」で語られる寮母のことばである。石上館の寮母藤田セツ子の語りも、藤田日記において、どのような内容で対話的コミュニケーションのなかにどのように位置づけられているか、という問題。いずれも中期日記によって、検討できるだろう。

こうした二つの語りの解明を通じてのち、もう一つ、あらためて問わねばならない点がある。

3) 日記を通じての対話的コミュニケーションによって、藤田俊二は何を明らかにしようとしたか、という根本動機にかかわる事項である。このコミュニケーション自体は、藤田によって意識的、無意識的に目指されたものである。目的的行為に属するであろう。けれども藤田の実践の総体のなかでの位置づけに留意すれば、寮生一人一人をどう理解するかという課題との関連でいえば、あくまでも方法的態度に属する。であるとすれば、日記記述そのものが何を目的としたか、という点があらためて問われねばならない。25年にわたって、生徒とともに暮らし、生徒一人一人に即して、書き続けられたという事実は重い。「少年たちと暮すこと、毎日の作文を読むこと、そして14人のことを書き続けながらその将来の道筋を考えることが不離一体であり、生活のすべてであります」という藤田のことば（「二十年のくぎりに」）の意味を解明することにもなるだろう。初期、中期、後期、それぞれにおいて濃淡はあるだろうが、もっとも持続的に働き、藤田を導いていたものは何であったか。仮説的にいえば、成長しているという根拠事例を生活事実のなかから示し、何者かに対して証明したいという＜成長証明＞と云ってよいだろう。誰よりもまず、生徒本人に対して、次に実父母に対して、そして、世間一般の第三者に対してである。マックス・ヴェーバーとともに、「明証性」にかかわる一種のエビデンスの追求といってもよい。そして、教育における一種のエビデンスにも沿うであろう。そのような、「固有名詞をもって実在する」（谷昌恒「教護院の今日的課題」1976）一人一人についてである。そうであるなら、藤田は成長のうちに何を見ただろうか。この点が種々の視点から究明されねばならない。

#### 注

1.

1) 全国教護院協議会編『教護院運営ハンドブッカー—非行克服の理念と実践—』三和書房、1985年、p.69。

2) 谷昌恒『教育力の原点—家庭学校と少年たち—』岩波書店、1996年、p.10。

3) 花島政三郎『少年非行克服の課題』評論社、1987年、p.221。

4) 花島政三郎『10代施設ケア体験者の自立への試練—教護院・20歳までの軌跡—』法政出版、1996年、p.212。

5) 谷昌恒『少年たちと生きる』日本基督教団出版局、1990年、p.130。藤田在任中と同時代の「朗読会」の実施状況と

その内容(少年たちの成長)について、花島、前掲(1996) pp.223-229、参照。

6)谷昌恒『ひとむれ—北海家庭学校の教育—』評論社、1974年。「成長」と題された1970年の谷の随想は、少年の心の理解の難しさと、「真正面にとり組んでいかなければならない」教師の厳しさ、そして「大きな山を越えたなと思う」時について語っている。理解の難しさを示す局面について、谷はいう。「自分が愛されていることに安らぎを覚えた少年が、やがて、私どもの眼がAにも、Bにも、Cにも注がれていることを発見する。…『なんだ、先生は誰に対してもいい顔をしやがって』少年は裏切られたように思う。…ぐっと近づいて来たとされる少年が、何というわけもなく急によそよそしくなったり、はっきりと遠のいていくのを感じる時が、私ども教師にはある」。pp.94-95。

7)拙稿「北海道家庭学校寮長藤田俊二の実践記録一覧」『宮崎大学教育文化学部紀要』教育科学、第31号、2014年8月。本論文には、日誌の書誌情報のみならず、後述する藤田の報告文書「寮長二十年のくぎり」の一部も掲載する。

8)檜原真也『子ども虐待と治療養育』金剛出版、2015年、は藤田の時代(中期日誌は1963年-1983年)から4、50年の隔たりがあるが、施設養育者の基本的課題として対象者について理解する試みが必須であることを指摘する意味で、ここで参照しておこう。「施設におけるアセスメントとは、生活を共にしながらそれぞれの子どもの今までに何を感じ考えて生きてきたのか、何を喜ぶのか、何に怒るのか、何を怖がるのかといった、子ども自身に映っている世界のありようを想像し、彼らに近づこうとする努力を積み重ねていく過程なのである」(同書、pp.73-74)。藤田の試みる理解も、— 本稿で論証するように — 檜原がここにいう「アセスメント」に近い努力を示しているであろう。藤田の場合にも治療の部分はたしかに含んでいる。その部分を含む日誌も、今後の研究でとり上げるであろう。児童自立支援施設(1998年以降)となった今日ではなおいっそうその観点が求められるはずである。北海道家庭学校編『「家庭」であり、「学校」であること — 北海道家庭学校の暮らしと教育 —』生活書院、2020年、第3章、参照。児童精神医学の立場からの富田拓(1993年3月藤田退職後の1995-2000、平成7-平成12、の期間に家庭学校榎泉寮寮長)のこの章の論述は、家庭学校が「家族や社会から距離を置くことの意味」をふまえた「総合的な療育システム」としての可能性を明らかにしている。このことは、家庭学校に対する檜原、富田のアプローチの有効性を示す。そのことを指摘した上で、違いにも注意をむけたい。藤田の場合には、「治療」という以上に、困難に打ち勝つ精神的自立とともに、より積極的に社会的自立にむけた価値的な目標が設定されている。価値実現の契機が主に導いている。よって、「治療的養育」という臨床的目標が、藤田の場合でも、部分的に試みられていることが確認できるにしても — この点は藤田の人間形成観を究明する意味で重要で、別稿を用意する — 基本は「教育」の実践が志向されている。創設以来、社会事業・社会福祉系列の「施設」でありながらも、「学校」と名づけられている所以でもある。そして、この実践は — この「治療的養育」の部分をたしかに含みながら — 校長、及び寮長夫妻の協働によって成り立つ、一種の「共同体」(Gemeinschaft)に属し、ある領域の教育共同体を構築しているに違いない。

9)谷昌恒『教育の理想—私たちの仕事—』評論社、1984年、p.200。谷、前掲書(1974)、p.124。「教育は対話が生命です」という谷校長と少年たちとの印象深い対話場面が記述されている、谷、前掲書(1996)、pp.80-83、も参照。

10)花島、前掲書(1996)は、その第1章において、46ケースについて入学時の学年、入学時の学力、入校時の主要な問題行動、入校時の保護者の生活態度、入稿者家庭の背景と生育歴、等について実態を客観的に明らかにしている。社会学者であるとともに、藤田と同時代に寮長を担った花島のこれらの研究上の知見は、本稿がとり上げる対象の種々の属性、事跡の理解の点でも貴重である。

3.

11)整理番号は、藤田日誌について研究上整理する観点から入寮生徒順に振り当てたものである。河原、前掲論文(2014)参照。本稿で紹介する画像資料には、便宜上\*\*((番号))を表記した。

12)寮生Tは整理番号89の少年である。藤田はこの寮生については退職後も印象深く残っていたようで、日誌記述とは別に、この寮生を「平川幸策」の名で創作的部分を含む日記体の草稿を残していた。拙稿「藤田俊二未発表原稿『誰れ

が悪いのでもない — ある父子 1960 年から 1994 年 2 月までの日々 —』 — 本文及びその主題設定の意義 — 』『宮崎大学教育文化学部紀要』教育科学、第 32 号、2015 年 3 月、参照。この本論文には、草稿とは別に、T についての藤田の日記の一部と T の作文「次郎物語を読んで」の画像資料(資料 5-1)を掲載している。

#### 4.

13)全国教護院協議会編、前掲書(1985)、pp.241-243、参照。「教護診断表」のサンプルは「観察」を基本として作成されている。その留意点のひとつとして「観察者は主観に支配されず、感情にとらわれすぎず、皮相に流れず、一方に偏せず、誰が見ても納得する具体的事実(行為)を収集する」とある。同書、p.238。藤田の日記の場合には、こうした「観察」とは異なっている。藤田日記の場合にはむしろ主観である。藤田自身の「自分の眼で見たこと」を踏まえ、そのかぎりですべての事実関係の認識、記述を踏まえた思い(所見)である。マックス・ヴェーバーの「理解社会学の若干のカテゴリー」論文(1913 年)の概念でいえば、藤田を「行為」者とし、その「主観」において考えられた意味に従い、「他者」、とりわけ寮生一人一人をどう理解するか、そして、その姿を記録するという作業を通じて、当事者及び第三者にどう「説明」するか、という実践として捉えることができる。Weber, Max, Über einige Kategorien der verstehenden Soziologie, in: Max Weber Gesamtausgabe (MWG), I Band 12, J.C.B. Mohr: Tübingen, S. 393 (『理解社会学のカテゴリー』林道義訳、1968 年、岩波文庫)。本論文の初出は、同名タイトルで 1913 年の『ロゴス』誌である。In: Logos, Band IV, 1913, S. 255。藤田自身は社会学者としての自覚をもって行為しているわけではないが、日記作成する藤田の日常行為、とりわけ他者(寮生)を理解する行為は、実践的な形で、「理解社会学」に相当する、あるいは近似する「理解」の局面を示している。

14)藤田は家庭学校を 1993 年退職後、卒業した寮生たちの足跡をたずねて、その結果の一部をまとめて、『まして人生が旅ならば — 北海家庭学校卒業生を訪ねて —』教育史料出版会、2001 年、を公刊するが、在職中も、卒業生の「予後指導」とともに、必要に応じて、また機会を捉えて、寮生が育った地域を探访していることを日記に明記している。とりわけ本稿でとり上げている寮生 T については、その生育環境訪問時の状況を日記(1981.9.30-10.2)に克明に記している。

15)花島、前掲書(1987)。とくに第 3 章参照。北海道家庭学校のとくに「自然歴」をとり上げ、年間における野菜(畑)、花壇、野草、果樹、行事の各事項についてその細目を明らかにしている。その上で、「自然と労働の治癒力」についての的確に説明している。藤田の在任中の「自然的要素」を把握する上で貴重な情報といえる。

16)『人道』大正 10-11 年に掲載された留岡幸助の「自然と児童の教養」と題した論説を参照。「天然は『プレジユダス』と云ふものを不良少年に有って居りませぬから、自然に子供を感化するのである。…蕪や葱は不良少年に作られたからと云ふて汝が作るのだから成長してやらないとは申しますまい。」(『留岡幸助著作集』第 4 巻、p.94)。当の人間の前歴ではなく、「労働」するという努力そのものを肯定的に認め、積極的にうけ入れることが、教育の原理の一つとして位置づけられ、家庭学校の伝統となった。「望の岡を中心として約三十町歩は原生林其儘を残して公園らしくしてあるから、春から夏、夏から秋と季節々々によって、或は若葉、或は緑葉、或は紅葉と申すやうに何とも言へない光景である」(同上、p.95)といった自然の環境そのものも、人間に対して包容的なものとして経験される。同じ指摘は、谷、前掲書(1996)、p.158、その他も参照。

#### 5.

17)今井康雄「教育にとってエビデンスとは何か — エビデンス批判をこえて —」『教育学研究』第 82 巻第 2 号、2015 年。今井はこの論文で、「近代科学的エビデンス」と「生活世界的エビデンス」を対比している。その論究は卓抜であり、藤田の記録を捉える場合にも有効なものとして参照したい。藤田日記は、徹底的に後者に属する。その場合に「生活世界的な明証性に支えられているという思い込み」が、藤田の場合にも免れられないのか、という問いを發することは無意味ではない。M.ヴェーバーの「理解社会学の若干のカテゴリー」にしたがって、「理解」と「説明」をふまえた「目

的合理的に方向づけられた行為」として藤田の実践を捉えられるとすれば、「近代科学的エビデンス」が示されているか、という課題は、藤田の場合には — ヴェーバーが「心理学」の説明と識別するように —、該当しないであろう。ここにいう藤田の「目的」とは何を指すかは、本稿及び別稿を通じて論証しなければならない。仮説的にいえば、どう「成長」できたか、という点にむけられるであろう。そのことを、当の少年、家族、そして第三者に対して理解できる形で説明する、ということが、藤田によって持続的に思念された目的であるに違いない。

その成長の記録は、「客観的な経過記録」と区別し、日々の出来事とその一連の前後関係の物語性において示されること、そして実践者との関連を排除せず、「私」のありようも記述し、むしろその積極的なかわりを「一個の主体」として意識し把握されること、という点で幼児教育の現場での「エピソード記述」と接近している。鯨岡峻・鯨岡和子『保育のためのエピソード記述入門』ミネルヴァ書房、2007年、参照。顕著な違いは、幼児教育の場合は「保育の場」に限定されているのに対し、寮長藤田の場合には、作業、学習、寮生活といった日々の生活世界を全体として対象にしている。

こうした藤田の記述は、社会的養護の対象ということ、そして「こどもの生にまつわる重要な事実をわかちあい、肯定的な自己物語を形成することを支援する」というという点で「ライフストーリーワーク」に接近する。とりわけ「ストーリーワーク」に近い。檜原真也、前掲書(2015) pp.142-144。外形上の違いは、「ストーリーワーク」の場合は、「生い立ちの整理」ともいわれるように、誕生からの現在までの時期が対象にされるのに対し、藤田の場合は、中学校期の数年間、あるいは、長期の場合には小学校高学年から中学校までの時期が対象になっていること、より内的な目的に関しては顕著な違いがあるだろう。藤田の日誌の場合には、「こども自身の理解や認識を確かめることを主な目的としている」のではないこと。「肯定的な自己物語を形成する」という意図は一部にはあっても、そして、「支援」ということが根本動機のうちにあったとしても、「支援」することにただちに制度的に約束された実践記録ではない。日誌全体は、1993(平成5)年退職後、大野町(現在の北斗市)の自宅から、2006(平成18)年河原国男(当時宮崎大学教授)に託され、引き渡されたことも、そのことを証示する。河原国男「北海道家庭学校寮長藤田俊二年譜」『宮崎大学教育文化学部紀要』教育科学、第27号、2012年8月、参照。こうした違い(明白な目的があるか無いか)は歴然としているものの、もしも卒業生が藤田の日誌を読むという場面を想定する — 公刊された藤田の『もうひとつの少年期』を読むように — ならば、ライフストーリーワークとして機能しうる客観的可能性を含んでいる。そして、その可能性を検証できると予想する事例を、現在の筆者は有している。

18)ここにいう「アンシュタルト」はM.ヴェーバーの前掲論文「理解社会学の若干のカテゴリー」での「共同体」(Gemeinschaft)に属する下位概念を指している。「自由意志」に基づき、すべての当事者による手段、目的、定律について明示的な協定に基づく合理的な「目的結社」(Zweckverein)と対比され、「所属者の意志表示とは無関係に純粹に客観的な諸事実を基礎にした所属」であり、人間によって作られた「合理的な諸定律と強制装置(Zwangsapparat)とが行為をともに規定する」ものとして概念規定される。メンバーの自発的な意志とは無関係に所属性を規定し、所定の行為を強いる共同体である。Weber, M., Über einige Kategorien der verstehenden Soziologie, in: MWG I /12, S.432 (in: Logos, Band IV, 1913, S.287).こうした「アンシュタルト」の例として、ヴェーバーは「国家」と「教会」(カトリックの教会)を挙げている。「結社」と対比される「アンシュタルト」概念を — ヴェーバーは例示していないが — 教育施設に適用すれば、学校、とりわけ義務教育を実施する公立の小中学校は、学齢、居住地という客観的な所属性の事実から区市町村から保護者に対して就学が指定されるという点で「アンシュタルト」に属する強制施設としての性格を保持する。これに対して、塾 — 学習塾であれ、近世の私塾(手習塾、適塾など)であれ — は「結社」に属する。

19)花島政三郎、前掲書(1996)、第三章「教護院での生活を通じて示した少年たちの変容」参照。

20)仁原正幹『新世紀「ひとむれ」 — 北海道家庭学校の子ども達 —』生活書院、2019年。仁原は、「能く働き、能く食

べ、能く眠る」という留岡幸助以来の「三能主義」に加えて、「能く考える」ことを提唱している。「自分の特性、性格や癖などをいつも意識して、どうしたら周りとの人と仲良くできるか、人の気持ちがわかるようになるか」(p.150)を考えることを、生徒たちに求めている。直接的に対話的コミュニケーションの必要性を説いているわけではないが、対話に通ずる相互行為の重要性を、生徒側から求めるものとして着目されてよい。

21) 谷「教護院の今日的問題」『ひとむれ』1976年9月、通巻411号。「教育というものを考えます時に、根本的に矛盾した二つの要素があると思います」と谷は述べて、「できるだけよい条件のもとに子どもを育てようという願い」とともに、「どんな悪い条件でも、どんなにひどい環境でも負けない、もし条件が悪ければ自分で条件を整えていく」という願いを持っている、と谷は語っていた。谷、前掲書(1990)p.197。ここに指摘されているのは、「艱難が人を育てるという真実」の認識に通ずる。谷、前掲書(1996)、p.197。そして、家庭学校の「難有」の根本指針に至る。「教護院の今日的問題」と題した論説でふれられた「収容」という強制的な契機は、ただちに「悪い条件」に相当するものではないが、人間形成における「矛盾した二つの要素」の一つとして理解できるだろう。谷が、このように捉える強制的な契機は、『教護院運営ハンドブック』1985年、でいわれる「教護院における児童の強制的措置」(pp.40-41)とは区別される。後者の場合は、1950年厚生省(当時)通知を根拠とする「一時保護室」での拘束を指している。その一方、谷が強調しているのは、法制度上のあり方ではなく、人間形成の契機である。

## 謝辞

本研究は、令和3(2021)年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究(C))の支援をうけた研究「北海道家庭学校寮長藤田俊二の<成長証明>的实践記録の特質と意義」(課題番号:21K02041)の成果の一部である。研究遂行に際しては、北海道家庭学校理事家村昭矩氏、同校前校長仁原正幹氏、現校長清澤満氏のご理解、ご協力を得ている。深く感謝申し上げます。

Understanding Dormitory Students from the Midterm Diary of Shunji Fujita,  
Housemaster of Hokkaido Home School  
-The Practice of Interactive Communication and Its Significance

Kunio Kawahara

Keywords: Hokkaido Home School, practical data, understanding others, interactive communication, educational community

This study examines three of the 147 daily records of Shunji Fujita (1932–2014) during his tenure as housemaster (1963–1993) of the “Hokkaido Home School,” a reformatory in Japan based on the philosophy of family-like care, and the student essays that accompanied these records. Subsequently, it clarifies the various aspects of Fujita’s understanding of the students and analyzes how he communicated with them.

The findings indicated the following points :

- (1) Over the entire period, Fujita assigned 221 essay titles to students; of these, 16 were in the early period (October 1965–March 1969), 173 in the middle period (April 1969–November 1983), and 32 in the late period (December 1983–March 1990). The subject areas included family, personal strengths and weaknesses, future plans, reflections on the past year, and fellow dormitory students. Through these essays, Fujita questioned each resident and attempted to understand their individual inner lives.
- 2) Among the midterm daily records with the largest number of essay topics, the three student daily records discussed in this study and the student essays attached to them showed the development of communication between the students and Fujita. The communication indicated the mutual actions (setting of the topic, equality between the two parties questioning and responding) that characterize “dialogue.”
- 3) In these cases, through interactive communication, Fujita described the unique world of each of the three students in the dormitory and demonstrated a positive understanding of their experiences.
- 4) Although these daily records are the result of Fujita’s independent efforts, the interactive style itself was not his own invention. Rather, it is a product of the traditional practices of dialogue with the principal and housemaster in the chapel, the students’ dialogues among themselves in the reading sessions, and their interactions with the natural environment.

The above-mentioned daily records, which revealed interactive communication, displayed two characteristics concerning the formation of the membership structure of the Hokkaido Home School, if we attempt to understand it in terms of Max Weber’s (1913) two concepts of “community (*Gemeinschaft*).” First, the relationships not only between Fujita and the three students but also between him and all the students in his dormitory led to spontaneous bonds of association (*Verein*); and second, simultaneously, the membership confirmed the importance of the elements of compulsory (including reformatory) activities in human development and retained its basic character as a type of compulsory institution (*Anstalt*). Thus, Fujita’s midterm daily records provide evidence through practical data that

the “home school” was established as a form of an educational community offering educational activities that exhibited both freedom and coercion.